高松市埋蔵文化財調査報告　第184集

川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川 島 本 町 遺 跡

2017年9月

株式会社ベルモニー
高松市教育委員会

出土遺物集合写真

遺跡遠景（上佐山より）

SD1001・SD1002 完掘状況（南から）

例　言

1　本書は、川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、川島本町遺跡の報告を収録した。

2　発掘調査地並びに調査期間は次のとおりである。
　調 査 地：高松市川島本町字流田 56 番、57 番 1、77 番、79 番
　発掘調査：平成 28 年 7 月 4 日～同年 8 月 24 日（実働 37 日）
　整理作業：平成 28 年 9 月 1 日～平成 29 年 6 月 30 日
　調査面積：約 886 ㎡

3　発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、費用は土地の所有者と事業者である株式会社ベルモニーが負担した。

4　現地調査は高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課 非常勤嘱託職員 中西　克也・杉原　賢治が担当し、同課文化財専門員 波多野　篤が補佐した。整理作業は、遺構については現地担当者と協議して波多野が行い、遺物は中西が担当した。なお、遺物整理のうち石器については、同課文化財専門員 舩築　紀子が補佐した。

5　本書の執筆は、第３章第２節の遺物を中西、それ以外を波多野が担当した。また、編集は、同課非常勤嘱託職員 森原　奈々の補佐を得て波多野が担当した。

6　発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関から御協力と御教示を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順、敬称略）。
　香川県教育委員会、株式会社 中塚工業

7　発掘調査に関連して、以下の業務を委託発注により実施した。
　遺物写真撮影　　西大寺フォト

8　標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）に従った。また、方位は座標北を示す。

9　本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
　SK：土坑　　SE：井戸　　SP：柱穴　　SX：性格不明遺構　　SD：溝

10 本書で使用している挿図の縮尺は、遺構図は 1/40・1/100、土器の実測図は 1/4、石器の実測図は 1/2 を原則とした。また、写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。

11 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過
第１節　発掘調査の経緯……1
第２節　発掘調査の経過（調査日誌抄）……1
第３節　整理等作業の経過……2

第２章　地理的・歴史的環境
第１節　地理的環境……2
第２節　歴史的環境……4
第３節　川島本町遺跡の既往の調査成果……4

第３章　調査成果
第１節　試掘調査の成果……7
第２節　発掘調査の成果……7

第４章　総括
第１節　事業地周辺の堆積環境…… 41
第２節　主な遺構・遺物について…… 41

挿 図 目 次

図１　調査地位置図……2
図２　微地形分類と調査地の位置（1/24,000）……3
図３　周辺の遺跡　……5
図４　層序に関わる事業地周辺の調査成果（1/1,000）……6
図５　調査区位置図……7
図６　調査区東壁断面図（1/60）……9
図７　第１遺構面　平面図（1/200）……11・12
図８　第１遺構面　土坑実測図（1/40）……13
図９　第１遺構面　井戸実測図（1/40）……14
図10　性格不明遺構実測図（1/100・1/40）……15
図11　第１遺構面　溝実測図①（1/100・1/40）17・18
図12　第１遺構面　溝実測図②（1/40）……19
図13　第２遺構面　平面図（1/200）……21・22
図14　第２遺構面　溝実測図（1/100・1/40）‥23・24
図15　第２遺構面　土坑・溝　実測図（1/100・1/40）……25
図16　SK1001 出土遺物実測図（1/4・1/2）……27
図17　SK1002 出土遺物実測図①（1/4）……28
図18　SK1002 出土遺物実測図②（1/4・1/2）……29
図19　SK1004・1005 出土遺物実測図（1/4・1/2）‥‥30
図20　SD1001 上・中層出土遺物実測図①（1/4）‥‥31
図21　SD1001 上・中層出土遺物実測図②（1/2）‥‥32
図22　SD1001 下層出土遺物実測図①（1/4・1/2）‥‥33
図23　SD1001 下層出土遺物実測図②（1/2）……34
図24　SD1001 出土遺物実測図（1/4・1/2）……35
図25　SD1002 出土遺物実測図①（1/4）……36
図26　SD1002 出土遺物実測図②（1/2）……38
図27　第１・２遺構面　出土遺物実測図（1/4・1/2）‥39
図28　第１遺構面　出土遺物実測図（1/4・1/2）‥‥40

挿 表 目 次

表１　第１遺構面　遺構番号対照表……12
表２　第２遺構面　遺構番号対照表……22
表３　ピット一覧表……44
表４　土器観察表（1）～（6）……45～50
表５　石器観察表……51

本 文 写 真 目 次

写真１　流路Ｂ検出状況…… 6
写真２　流路Ｃの断面と基本層序Ⅱ層の被覆状況‥‥6
写真３　流路Ａ付近に粗砂が分布する状況……6
写真４　基本層序Ⅱ層に粗砂が含まれる状況……6

第１章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯

高松市川島本町字流田 56 番ほかで葬祭会館の建設が計画された。事業地の東側隣接地には川島本町遺跡（県道調査）が位置しており、周知の埋蔵文化財包蔵地の隣接地であることから、平成 28 年２月４日付けで事業者である株式会社ベルモニーから本市教育委員会（以下、市教委）に対して、埋蔵文化財の試掘調査依頼が提出された。

同年２月 15 日～ 17 日までの実働３日間を要して実施した試掘調査の結果、事業地内の全域で遺構や遺物が確認されたことから、調査後に事業地全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「川島本町遺跡」の範囲に追加・登録された。

試掘調査の結果を受けて、事業者と市教委で工事の設計変更等の協議を行ったが、遺跡に影響のある工事掘削は避けられず、同年５月 26 日付けで事業者から工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が市教委に提出された。その届出を市教委から香川県教育委員会（以下、県教委）に進達したところ、同年５月 27 日付けで県教委より工事着工前に建物本体等の規模の大きい箇所を発掘調査、擁壁などの狭小な掘削箇所を立会調査で対応し、保護措置を図るようにとの行政指導があった。

発掘調査の実施に向けて事業者と市教委はその後も協議を重ね、費用面などの合意が形成されたため、同年６月 30 日付けで発掘調査の費用負担窓口となる株式会社ベルモニーと業務を管理する高松市、調査・整理作業を管理する市教委の３者で協定を締結し、「川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。なお、協定の締結に先立ち、費用負担者の意向で発掘調査全般を業者委託することとなり、同年６月 24 日付けで費用負担者が選定した委託業者である株式会社中塚工業とで契約が交わされた。

第２節　発掘調査の経過（調査日誌抄）

発掘調査の対象は、建物本体（Ａ・Ｂ地区）、エントランス支柱（Ｃ地区）、浄化槽（Ｄ地区）、防火水槽（Ｅ地区）の大別４箇所である。これらの調査対象は事業地内の複数の地点に分散する。発掘調査は、事業地内に排土置き場を設けることと作業効率を考慮して、建物本体は南北で２回に分けて調査した。その他の地区は、建物本体の調査と併行し、適宜、実施した。

発掘調査は平成 28 年７月４日に建物本体南半（Ａ地区）から着手し、同年８月 22 日に最後の調査区の記録作成が完了、同年８月 24 日にすべての調査区の埋戻しが完了し、現地調査を終了した。

主な調査経過は、下記の調査日誌抄のとおりである。

調査日誌抄（平成 28 年７月４日～同年８月 24 日 実働 37 日）

７月４日（月）　調査区設定。建物本体南半（Ａ地区）の重機掘削を開始した。調査区西側の一部で遺構検出を行った。

７月５日（火）　遺構掘削を開始した。

７月７日（木）　SD1001 の西側に位置する複数の土坑の調査を開始した。多量の遺物が出土し、写真撮影・図化作業を行った。

７月 16 日（土）　建物本体南半（Ａ地区）の第１遺構面の遺構掘削が完了した。全景写真の撮影と平面図の作成を行った。

７月 19 日（火）　建物本体南半（Ａ地区）の第２遺構面の重機掘削を行った。合わせて、浄化槽設置箇所（Ｄ地区）の重機掘削も行った。Ａ地区では、掘削を予定した土層に遺物を含んでいたが、少量であることから重機により掘削を行い、丁寧に遺物の回収に努めた。

７月 20 日（水）　建物本体南半（Ａ地区）の第２遺構面で遺構を検出し、一部の遺構を掘削した。

７月 22 日（金）　建物本体南半（Ａ地区）の第２遺構面の遺構を完掘し、全景写真の撮影と図化作業を行った。

７月 25 日（月）　建物本体北半（Ｂ地区）とエントランス支柱部分（Ｃ地区）の第１遺構面までの重機掘削と遺構検出を行った。

７月 28 日（木）　建物本体北半（Ｂ地区）の第１遺構面の遺構掘削を行った。

８月５日（金）　建物本体北半（Ｂ地区）の全景写真を撮影した。

８月８日（月）　建物本体北半（Ｂ地区）の第２遺構面までの重機掘削と遺構検出・掘削を行った。

８月 10 日（水）　エントランス支柱部分（Ｃ地区）の第１遺構面の全景写真を撮影した。

８月 16 日（火）　防火水槽設置箇所（Ｅ地区）の第１遺構面までの重機掘削と遺構検出・掘削を行った。

８月 18 日（木）　建物本体北半（Ｂ地区）において第２遺構面の完掘状況の全景写真を撮影した。その後、図化作業を行った。

８月 22 日（月）　防火水槽設置箇所（Ｅ地区）の第２遺構面の重機掘削と遺構検出・図化作業を行った。また、調査が完了したその他の地区の埋戻し作業を開始した。

８月 24 日（水）　すべての調査区の埋戻し作業が完了した。本日で、現地での作業は終了した。

第３節　整理等作業の経過

調査終了後、平成 28 年９月から整理作業を開始した。作業の主な内容は、現場で作成した図面・写真の基礎整理、出土遺物の洗浄・接合・実測作業、そして遺構図・遺物実測図のトレースや挿図の作成などである。概ね平成 29 年５月にこれらの作業が完了し、それ以降は原稿の執筆や編集作業を中心に進めた。なお、整理期間中の平成 29 年６月に、出土遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託して実施した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境（図１・2）

高松市は香川県のほぼ中央に位置する県都で、平成 17 年９月及び平成 18 年１月に近隣の庵治町、牟礼町、塩江町、香川町、香南町、国分寺町の６町と合併した。その結果、市域の面積も合併前の約 1.9 倍にあたる約 375k㎡に拡大し、人口も約 42 万人となり、これまで以上に四国において中核的な都市として重要な役割を担っている。

現在の高松市における主要な居住域となっているのが高松平野と呼ばれる平野部で、本平野は地形分類では讃岐山脈を源とする複数の河川によって形成された沖積地と位置づけられている。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川という主に６つの河川が北流して瀬戸内海へと流れ込んでいる。これらの河川のなかでも、香東川は現在の春日川よりも西側の沖積平野を形成したと考えられており、高松平野の地形形成過程を考える上で欠くことのできない河川のひとつと言える。

さて、本事業地は、市域の東側にあたる川島本町に位置する。事業地の東側約 500 mの位置には、現在の春日川が北流する。事業地の東側隣接地では、平成 17 年度に県道の建設事業に先立ち香川県埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵文化財センター）によって発掘調査が行われた。これが川島本町遺跡で初めて行われた発掘調査であり、その結果、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認され、複数の時期にわたる集落跡であることが判明した。

次に事業地周辺の微地形に注目すると、県埋蔵文化財センターの調査報告書に詳細に述べられている[1)]。これに従えば、事業地は東側の旧河道Ａ、西側

図１　　調査地位置図

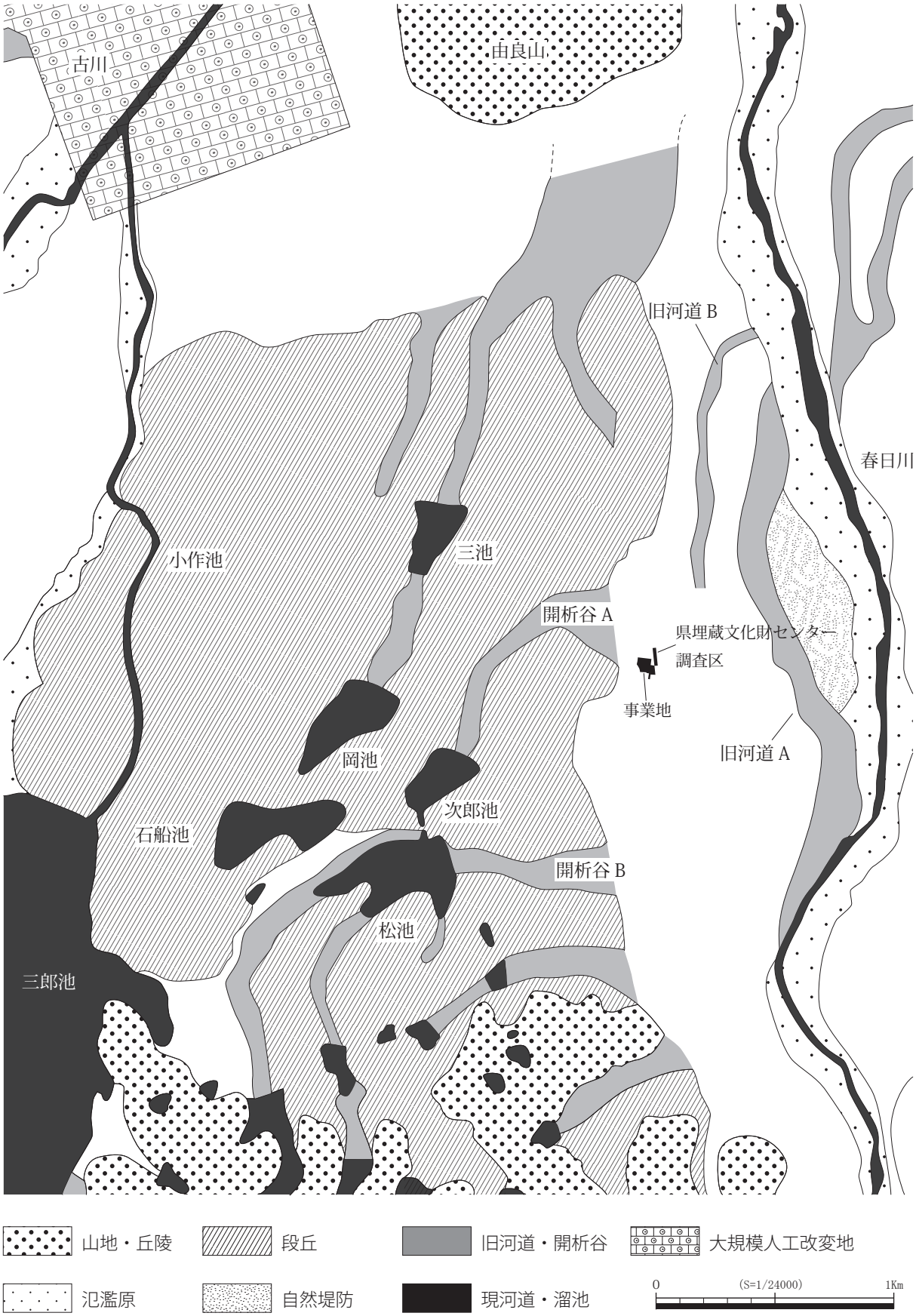


図２　　微地形分類と調査地の位置（1/24,000）

の段丘面に挟まれた扇状地上に立地する（図２）。さらに図２から読み取れるように、事業地は西側にある開析谷Ａの東側延長線上に位置する。以上の点を踏まえると、事業地は西側の開析谷と東側の旧河道、双方の堆積作用の影響を受け得る場所であることが推測できる。

第２節　歴史的環境（図３）

事業地周辺で最も古い時期の遺跡が、縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した十川東・平田遺跡である。このほか、遺物包含層から後期の土器が出土した川島本町遺跡[2]（2）や、後期の土坑が検出された川島本町山田遺跡[3]（4）が知られるが、総じて縄文時代の遺跡の数は少ない。

周辺で人々の活動が活発になるのが弥生時代である。弥生時代前期末の土器が大量に出土した光専寺山遺跡（17）や、川島本町遺跡から直線距離にして約 2.0㎞南側には、中期末から後期初頭にかけての建物跡などが検出された中山田遺跡などが存在する。また、川島本町山田遺跡[4]（４）では前期の土坑が確認されているほか、川島本町遺跡[5]（2）で前期から中期の可能性がある溝や、後期の遺物が出土した溝などが検出されている。また、北山下遺跡[6]（18）では、後期を中心とした複数の溝が検出されている。これまでの調査で春日川周辺の扇状地上で弥生時代の人々の活動の痕跡は窺えるものの、明確に集落の中心的な居住域となった遺跡は確認されていない。

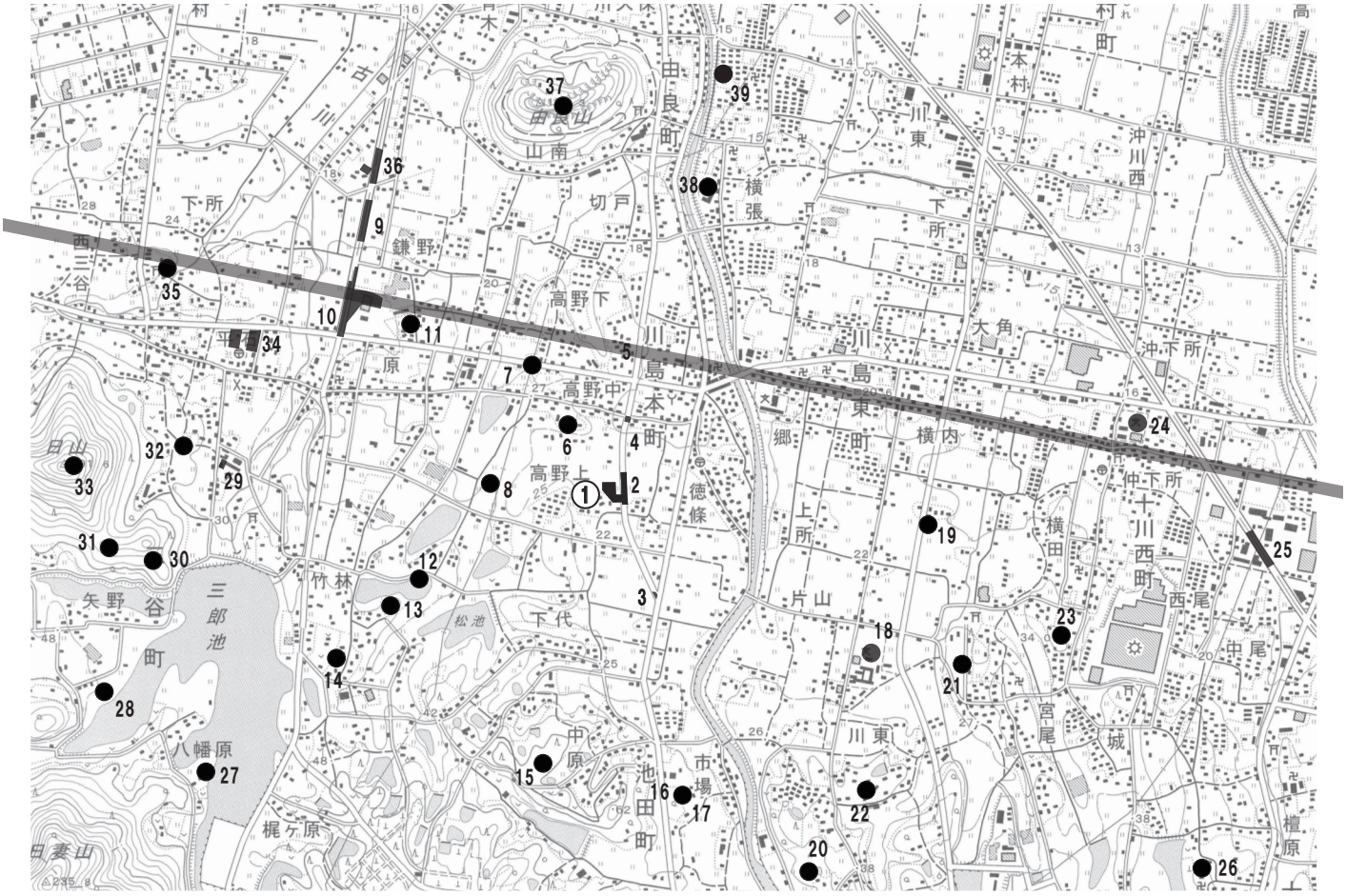
古墳時代の遺跡では、後円部上に刳抜式石棺が露出する全長約 88 mの三谷石舟池古墳（13）や、今は全容が明らかにできないが、周濠を含めた直径が約 60 mと見られる円墳の高野丸山古墳[7]（7）などがある。また、集落に関わる遺跡としては、川島本町遺跡[8]（2）で前期後葉の土器が出土した土坑や井戸などが複数確認されている。

古代では、川島本町遺跡から直線距離にして約 450 m北側に、古代の旧南海道跡（5）の推定ラインが位置する。また、旧南海道跡に隣接する高野廃寺（6）では、奈良時代から平安時代の軒瓦が出土しているほか、西下遺跡[9]（24）で古代の建物などが検出されている。

中世では、平安時代末に土着した植田氏が十河・神内・三谷・由良氏などに分かれ、十河氏を頭領として多数の城館が形成された。これ以外に、前述の北山下遺跡[10]（18）で 13 世紀後半から 14 世紀前半頃の３棟の掘立柱建物跡が確認されており、当地において数少ない中世の集落の状況の一端が明らかとなっている。

第３節　川島本町遺跡の既往の調査成果（図４）

平成 17 年度に本事業地の東側に隣接する川島本町遺跡で県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われたが、本遺跡にとって重要な知見が複数ある[11]。この発掘調査の要点を整理すると、①自然流路や河川堆積に起源すると見られる黒褐色系シルト層などを基盤として遺構が掘り込まれる、②主に縄文時代後期、弥生時代前期～中期、弥生時代後期～古墳時代前期、中世の遺構・遺物が検出された（調査区の北側で弥生時代後期～古墳時代前期の遺構、調査区中ほどで縄文時代後期の遺物群、調査区南側で弥生時代前期～中期の遺構など、各時期の遺構がエリアを隔てて検出された）、③検出した遺構は土坑・井戸・ピット・溝が中心で、竪穴建物跡など居住を直接示す遺構は確認されていない、④特に事業地北側の土坑等の遺構を検出した箇所は、地下水位が高い、以上４点である。このうち、本事業地の層序に関わる所見として、①は重要と言える。報告書の平面図・断面図や事実報告では詳細に触れられていないが、全景写真や一部の断面写真で遺構面を切り込んで粗砂層が帯状に２条認められた。さらに、調査区東側の断面図や断面写真では、後述する本事業地と類似する土層である黒褐色系シルトの土層が観察されている。前者について、北側の１条は調査区北側で南西から北東方向に認められ、南側の１条は調査区南側で東西方向に観察できる。断面写真などから、双方は遺構面を切り込む自然流路と考えられるが、南側の自然流路は、位置関係から本事業地の北側で観察できた自然流路（流路Ｃ）の東側延長部分と考えられる。一方、後者の黒褐色系シルトは、平面図には記されていないが、各断面図から推定すると、調査区東端を南から北方向に分布する土層と考えられる。層相などから、河川堆積を起源とする土層と考えられるが、本事業地でも類似した土層（基本層序Ⅱ層）が認められた。双方が同じ土層であるかは不明だが、いずれにしても事業地周辺の堆積環境を検討する場合の重要な土層と推定できる。また、④の地下水位が高い点を考慮すると、少なくとも事業地周辺は自然流路が複数流下するよう



①. **川島本町遺跡（市教委調査地）**　2. 川島本町遺跡（県埋蔵文化財センター調査地）　3. 川島本町南遺跡　4. 川島本町山田遺跡　5. 旧南海道跡　6. 高野廃寺　7. 高野丸山古墳　8. 高野南１・２号墳　9. 鎌野西遺跡　10. 三谷中原遺跡　11. 鎌野城跡　12. 石舟池１～10 号墳　13. 三谷石舟池古墳　14. 三谷城跡　15. 下代古墳　16. 光専寺山西・中央古墳　17. 光専寺山遺跡・光専寺跡　18. 北山下遺跡　19. 出羽城跡（出羽砦跡）　20. 川東１・２号墳　21. 松宇八幡馬場古墳　22. 古塚古墳　23. 西尾天神社古墳　24. 西下遺跡　25. 露尾遺跡　26. 十川城跡　27. 三谷三郎池窯跡　28. 矢野面古墳　29. 宮ノ浦遺跡　30. 瘤山（小日山）２号墳　31. 瘤山（小日山）１号墳　32. 平石上古墳群　33. 日山山頂経塚・古墳　34. 横内東遺跡　35. 加摩羅神社古墳　36. 北野遺跡　37. 由良山城跡 38. 由良南原遺跡　39. 大灘遺跡

図３　　周辺の遺跡

な環境で、なおかつ河川の堆積作用の影響を受けやすい地点であったことが推定できる。

註・引用文献

1）香川県埋蔵文化財センター（編）2007『県道高松善通寺線道路改修事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　田村遺跡Ⅱ　川島本町遺跡　川島本町南遺跡』香川県教育委員会

2）註 1）前掲

3）香川県埋蔵文化財センター（編）2007『県道大浜仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　家の浦遺跡 川島本町山田遺跡』香川県教育委員会

4）註 3）前掲

5）註 1）前掲

6）高松市教育委員会（編）2015『高松市立山田中学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 北山下遺跡』高松市教育委員会

7）川島郷土誌編集委員会（編）1995『川島郷土誌』川島校区地域おこし事業推進委員会

8）註 1）前掲

9）高松市教育委員会（編）2008『西下遺跡－高松市立十河小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高松市教育委員会

10）註 6）前掲

11）註 1）前掲

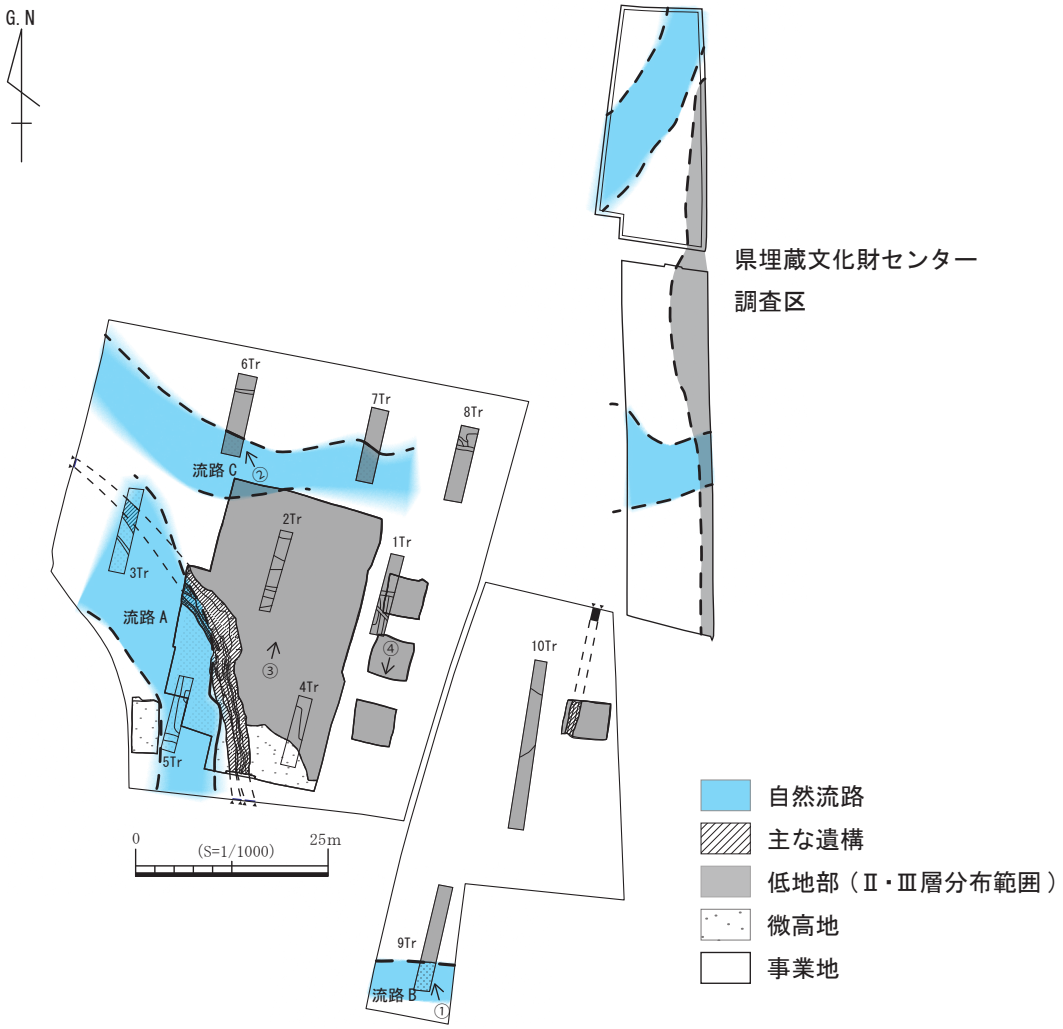


写真１　流路Ｂ検出状況

写真２　流路Ｃの断面と基本層序Ⅱ層の被覆状況

写真３　流路Ａ付近に粗砂が分布する状況

写真４　基本層序Ⅱ層に粗砂が含まれる状況

図４　層序に関わる事業地周辺の調査成果（1/1,000）

第３章　調査成果

第１節　試掘調査の成果（図５）

試掘調査の実施前から、事業地では多くの遺物が表採できる状態であり、当地は多くの遺物を包蔵している可能性が考えられた。試掘調査は、事業地内に南北方向のトレンチを合計 10 本設定して行った。試掘調査の概要については平成 28 年度に刊行した高松市教育委員会（編）『高松市内遺跡発掘調査概報 － 平成 28 年度国庫補助事業 －』に掲載したが、調査成果の要点は、①事業地内の全域でピット・土坑・溝などの遺構や、縄文時代から中世にかけての遺物が出土した、②地点によって遺構の基盤となる土層が異なる、③事業地内には自然流路が存在し、かつ湧水が多いことから地下水位が高いことが推定できる、以上の３点である。このうち、②･③の所見と調査地周辺の微地形から、事業地は河川の堆積作用の影響を受けやすい環境であることが考えられた。

試掘調査の結果、事業地全域で遺構・遺物が認められたことから、隣接する川島本町遺跡の範囲に追加・登録された。

第２節　発掘調査の成果

（1）発掘調査の方法（図５）

ａ　調査区の設定と掘削方法

調査区は、工事によって遺跡が破壊されるか、保護層 30㎝の確保が困難な箇所のみに設定した。事業地内の複数の地点に発掘調査区が生じることとなったため、調査中の遺跡の養生や重機の進入路、作業効率などを考慮して、複数の調査箇所を併行して調査することとした。

掘削方法は、遺構面までの掘削を重機で行い、その後、人力で遺構検出・掘削を行った。ただし、遺物包含層は、遺物の多寡を慎重に観察しながら、重機によって掘削した。また、調査区内で確認した自然流路は、遺構面での検出時や部分的に掘削したところ遺物が含まれていなかったため、平面での検出のみ実施した。

ｂ　図化作業・遺構番号・遺物の取り上げ（表１・２）

遺構等の図化作業は、平面図は調査区内に任意でグリッドを設定し、手測りで測量した。その後、現地でグリッドの交点の国土座標（世界測地系）を測量し、整理作業中に各図面に国土座標の数値を与えた。断面図も手測りで作図した。

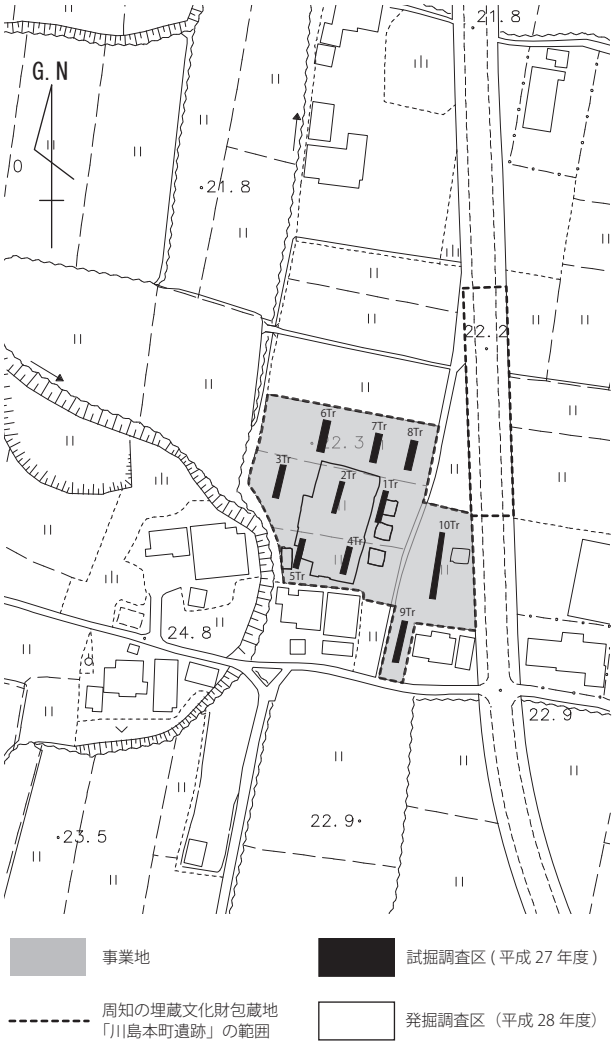


図５　　調査区位置図

遺構番号は、調査区ごとに、かつ遺構の種類ごとに略号（SK、SE・SP・SX・SD）と１から順に番号を与えて管理した（SD1 など）。ただし、整理作業の過程で、煩雑さを避けるために、遺構面ごとに遺構番号を再整理した（表１・２参照）。

遺物は、遺物包含層単位と遺構単位で取り上げた。特に集中して遺物が出土した土坑や溝については、現地で大別層を検討して、その大別層単位で取り上げた。

（2）地形・自然流路と基本層序

ａ　地形（図２）

事業地の西側には微地形分類では開析谷（開析谷Ａ）が認められ、なおかつ東側には旧河道（旧河道Ａ）が存在する。このため、事業地は双方の影響を受け得る環境にあることが調査前から想定できた。なおかつ、試掘調査の状況により、遺構の基盤となる土層は地点によって異なることも、前

述の想定を首肯させるものであった。

さて、調査区内の地形は、遺構等の完掘後の状況から、建物本体部分南側の微高地と、そこから北に向けて低くなる低地部との二大別が可能である。建物本体部分南側の微高地は、前述した微地形分類に従うと、西側にある段丘面の縁辺部の一部にあたると考えられる。それに対して、北側の低地部は、微地形分類の開析谷Ａと関連する低地部と考えられる。なお、低地部は調査区内では北側の立ち上がりは確認できず、調査区内では同様の地形面が北へと連続する状況を確認した。後述する基本層序も、概ねこの地形分類に沿って分布範囲が明瞭に分かれる傾向が認められた。

ｂ　自然流路（図４）

今回の発掘調査では、完掘していないものの、調査区内では多く見積もって３条の自然流路（流路Ａ～Ｃ）を確認した。流路Ａは事業地北西側から南西側にかけて認められ、調査区内で南に向けて屈曲する特徴がある。幅は６ｍ程度、埋土の表層部には灰色粗砂が堆積する。深さは不明だが、周辺の地形を考慮すると概ね東流する自然流路と考えられる。流路Ａは、低地部に堆積する土層（基本層序Ⅱ・Ⅲ層）、調査区南側では段丘面の基盤（基本層序Ⅳ層）を切り込んで形成されていることを確認した。なお、基本層序との前後関係を整理すると、流路Ａより先に基本層序Ⅱ・Ⅲ層が堆積し、その後、流路Ａが埋没する。

流路Ｂは、試掘調査９トレンチで北肩のみを検出した（写真1）。幅は不明で、埋土が類似することと位置関係から、流路Ａと同一の自然流路である可能性も考えられる。流路Ｂの基盤となるのは褐色細砂である。

流路Ｃは、試掘調査６・７トレンチで北肩を検出し、南肩の可能性がある平面形を建物本体部分北西隅で検出した。流路Ｃは概ね東西方向に流れる流路と考えられ、南肩の認識が正しければ幅は５ｍ程度である。位置関係や自然流路の幅から、県埋蔵文化財センター調査区で検出された南側の自然流路が同一のものと推定できる。流路Ｃは試掘調査６トレンチでの観察所見から、流路Ｃの埋没後に基本層序Ⅱ層が堆積することを確認した（写真２）。

以上のとおり、事業地内には最大３条の自然流路が存在することが推定でき、後述する基本層序との前後関係から、形成・埋没時期が異なる自然流路の存在が明らかとなった。

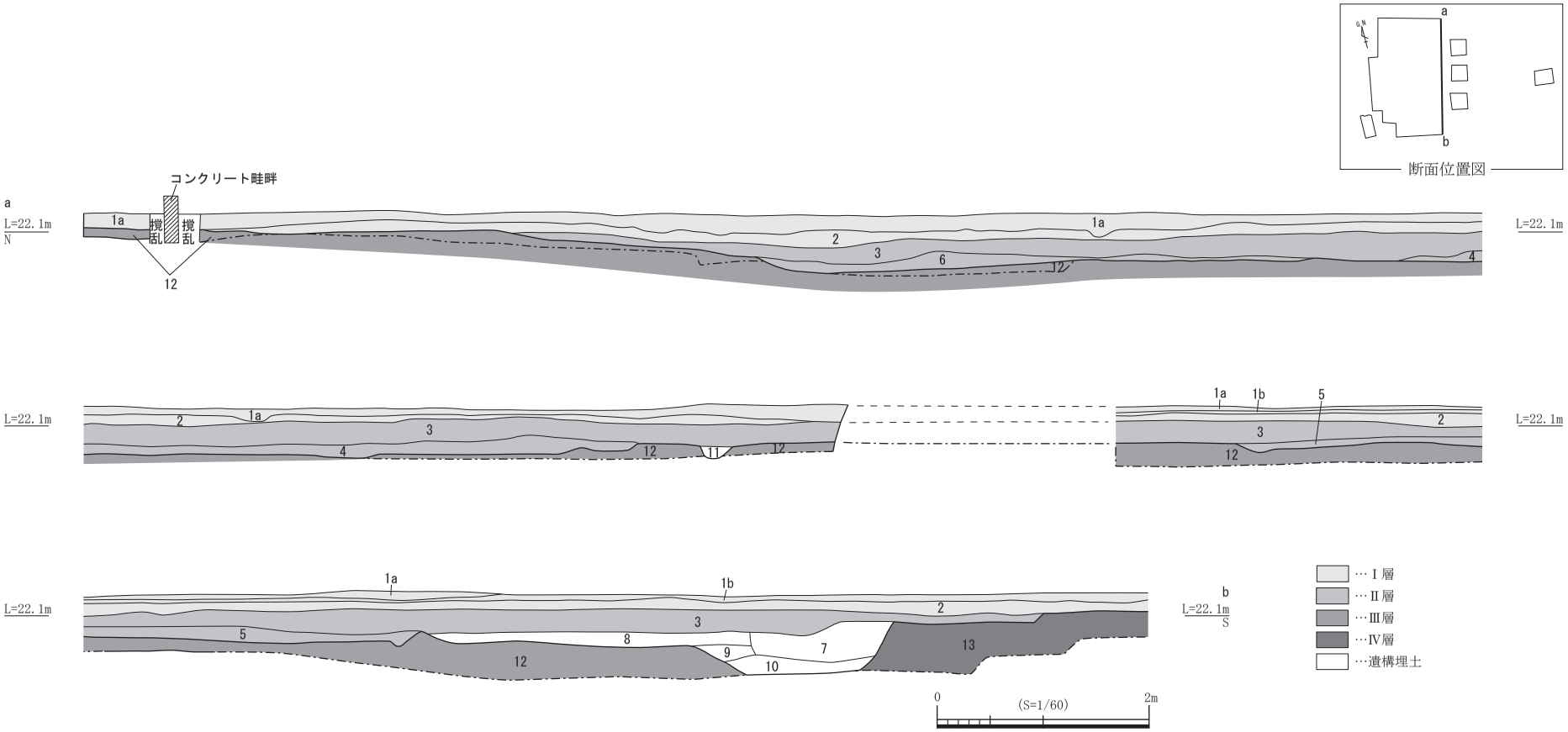
ｃ　基本層序（図６）

これまで整理した事業地の地形と自然流路の状況を踏まえながら、事業地内の表層部の基本層序を整理する。

当地の基本層序は大別して４層にまとめることができる（上から順にⅠ～Ⅳ層）。Ⅰ層は、調査直前まで当地で行われていた耕作に伴う土層で、層厚約0.2ｍである。Ⅱ層は、調査区南側の一部には分布せず、低地部のみに堆積する黒色系統の土層である。層厚は最も厚い箇所で約0.2ｍ、本土層は遺物を包含する。流路Ａが南へ屈曲する地点の東側では、平面ではスプレーを噴射したように粗砂が分布する範囲を複数確認した（写真３）。断面では、この粗砂がⅡ層中に高低差を持ってまばらに堆積し（写真４）、粗砂の一部が表層部に露出する箇所も観察できた。Ⅲ層は、Ⅱ層と類似した平面分布で、Ⅱ層の下位に堆積する砂系を主体とする土層である。層厚は不明であるが、表層部で遺物は認められない。Ⅳ層は、明黄褐色シルトのしまりのある土層で、調査区南側のみ確認した。遺物は含まず、いわゆる地山と考えられる土層である。Ⅳ層は、Ⅱ・Ⅲ層の基盤となる土層であり、かつ事業地西側の段丘面表層部の基盤を形成する土層と考えられる。

基本層序のうち留意が必要なのは、流路Ａ東側のⅡ層中にスプレーを噴射したような平面形で観察できた粗砂である。分布がこの地点に限定され、なおかつ流路Ａの屈曲点付近に位置すること、スプレーを噴射したように粗砂が分布することから、流路Ａに起源するクレバススプレー堆積物（破堤堆積物）[1]の可能性があると考えられる。この見方が正しければ、粗砂が認められた範囲には流路Ａが増水した際にオーバーフローした堆積物が堆重する（上方付加）環境であったことになる。さらに、粗砂がⅡ層中に認められることから、Ⅱ層の起源を流路Ａに求めることができるかもしれない。これについては、流路Ａの下部の埋積状況を確認していないため断定できないが、可能性のひとつと考えておきたい。

一方、基本層序Ⅲ層は、自然流路Ａ・Ｃとの層位的な前後関係から、形成時期に前後差があり、かつ堆積物の供給源が異なることが推定できる。Ⅱ層は前述した流路Ａとの関係で捉えていくべきと考える一方で、Ⅲ層は西側からの開析谷Ａとの関係



1a 2.5Y7/2 灰黄シルト質極細砂
1b 2.5Y7/2 灰黄シルト質極細砂（Fe 多量）
2　10YR5/2 灰黄褐シルト質極細砂（灰白色細砂を含む）
3　10YR5/3 にぶい黄褐 +10YR4/2 灰黄褐シルト質極細砂（灰白細砂～中砂を多く含む）
4　10YR6/2 灰黄褐シルト質細砂 +10YR8/1 灰白粗砂
5　10YR6/2 灰黄褐 +10YR7/4 灰黄褐シルト質極細砂
6　10YR5/2 灰黄褐シルト質極細砂
7　10YR5/2 灰黄褐細砂混じりシルト
8　10YR5/2 灰黄褐シルト質極細砂（灰白細砂を含む）
9　2.5Y7/1 灰白細砂 +10YR6/2 灰黄褐シルト質細砂
10　10YR7/2 にぶい黄橙細～中砂
11　10YR4/1 褐灰シルト
12　2.5Y8/2 灰白細砂
13　2.5Y7/6 明黄褐シルト

図 6　　調査区東壁断面図（1/60）

で捉えるべきと考えられる。具体的にⅢ層は、流路Ａの形成以前に谷部を充填した広義の谷埋め堆積物にあたる土層として、Ⅱ層とは形成時期に差のある土層と考えられる。

自然流路の方向や基本層序の形成要因の検討から、事業地は西側の開析谷Ａからの土砂供給の影響を多分に受ける場所であったことが推定できる。

層序の関係を踏まえた遺構の認識は、調査区南側のみ認められたⅣ層上面と、それと連続して平坦な地形面を形成するⅡ層上面で検出できる遺構を第１遺構面検出遺構として調査した。その後、低地部に堆積するⅡ層を除去した直下のⅢ層上面で検出できる遺構を第２遺構面検出遺構として調査した。

（3）検出遺構・出土遺物

ａ　第１遺構面の遺構

第１遺構面の概要（図７、写真図版１）

第１遺構面の上面の標高は、調査区東壁断面（図６）を参考にすると南・北端ともに標高約 22.1 m 程度で、大きな高低差は認められない。これは、元々平坦な地形だった可能性もあるが、第１遺構面の直上に現代の耕作関連の土層が堆積することを考慮すれば、遺構面の上面が改変されていることも想定しておく必要があるだろう。この地形面上に、土坑・井戸・ピット・性格不明遺構・溝と自然流路が形成される。これらの遺構を破壊して、近世以降に形成された溝などが調査区南西側と中央付近に認められる。なお、本報告では、近世以降の遺構は平面的な記録のみ報告する。

第１遺構面の遺構は、出土遺物から主に古墳時代の遺構が分布すると考えられる。遺構分布の特徴は、調査区南西側に規模の大きいSD1001・1002が、地形の変換点でかつ流路Ａと一部が重なるように開削される点である。その西側の微高地上には、内部から多くの土器が出土した土坑が複数存在する。一方、SD1001 の東側では、多数のピットや溝、性格不明遺構などが分布するが、SD1001 の西側とは分布する遺構の種類がやや異なる。なお、ピットの配置から掘立柱建物跡の復元はできなかった。

事業地東端では、南北方向に開削された溝が１条存在する。出土遺物から前述した遺構とは形成時期が異なると考えられる。位置関係から、県埋蔵文化財センターの調査区で検出した溝と同一の溝の可能性が考えられ、条里に関わる遺構の可能性が想定される。

土坑

SK1001（図８、写真図版２）

SD1002 から西へ約 2.0 mの場所に位置し、流路Ａ上に掘削された土坑である。掘り形はやや南北に長い楕円形で、長軸約 1.9 m、短軸約 1.7 m、検出面からの深さは約 0.4 mである。埋土は６層に分かれ、上位に粘性のある土層、下位に粘性の低い土層が堆積する。SK1001 の掘削中、底部付近では湧水が認められた。

遺物は、完形に近い土器が土坑の中心付近で集中して出土した。出土したのは、断面図１層からである。土器の器種は甕・壺・高杯が中心で、口縁を上や横に向けたものが存在するが、土器の遺存状況と分布を考慮すると、土坑の外側から投棄したものとは考えにくい。

SK1002（図８、写真図版３）

SD1002 から西へ約 1.5 m、SK1001 から南東へ約 1.0 mの場所に位置し、流路Ａ上に掘削された土坑である。掘り形は南北に長い楕円形で、長軸約 1.7 m、短軸約 1.3 m、検出面からの深さは約 0.6 mである。埋土は６層に分かれ、土坑のなかほどから下位にかけては粘性の強い土層と砂が互層状に堆積する。土坑の底部付近では、湧水が認められた。

遺物は、SK1002 の検出面付近で、２個体の甕が横位の状態で互いに口縁部を向けて出土した。いずれの土器もほぼ水平な状態であることと前述の出土状況を考慮し、土器は土坑内に投棄されたものではなく、意図的に配置された可能性が高いと考えられる。遺物の組成の中心は、土師器甕・壺・高杯であり、甕の中には穿孔が認められる個体が複数ある。

SK1003（図８、写真図版 4-1）

SD1002 から西へ約 2.0 mの場所に位置し、流路Ａ上に掘削された土坑である。掘り形はやや東西に長い楕円形で、長軸約 0.7 m、短軸約 0.6 m、検出面からの深さは約 0.3 mである。埋土は３層に分かれ、いずれも砂系の土層である。

SK1004（図８、写真図版 4-2）

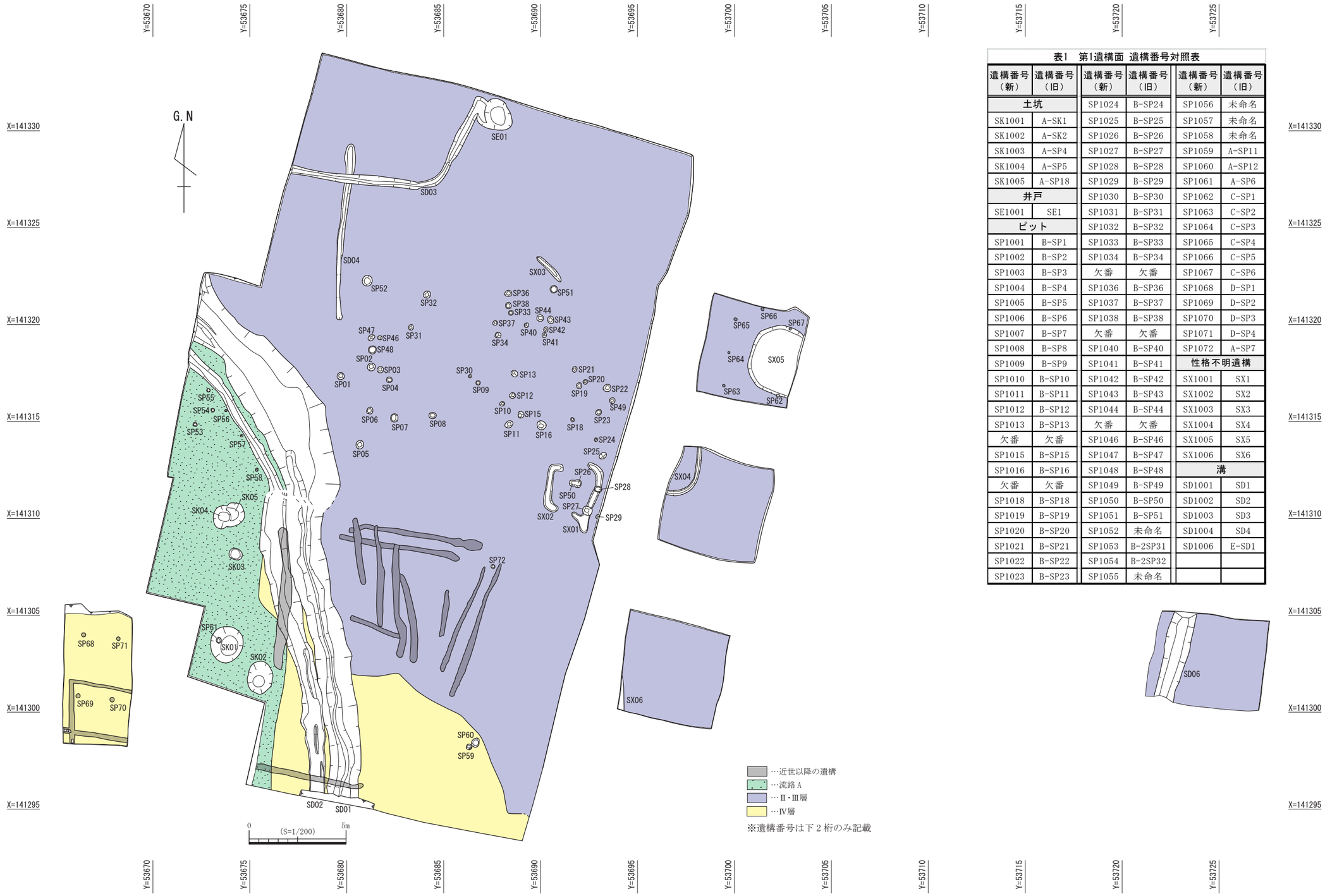
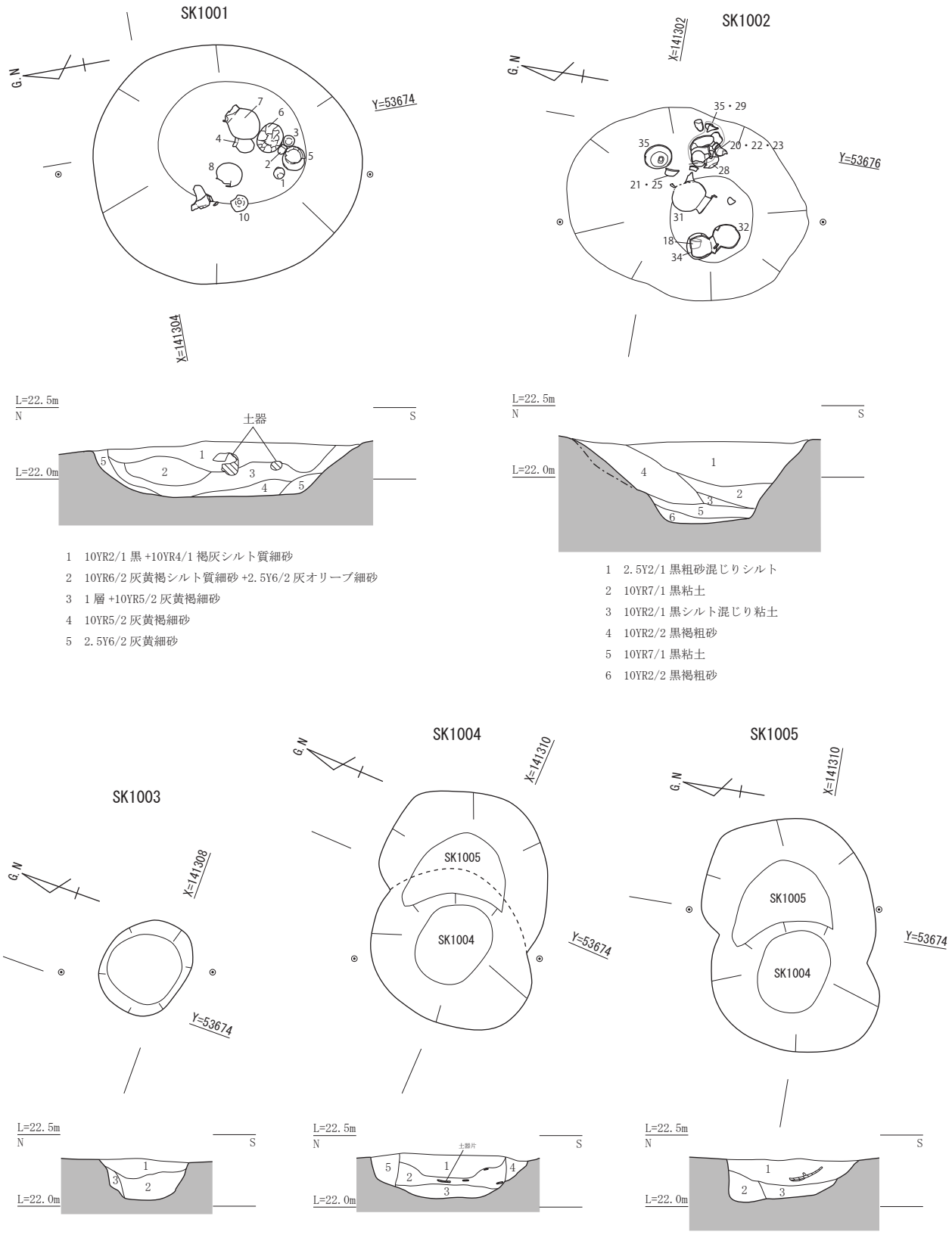


表1　第1遺構面 遺構番号対照表

遺構番号（新）	遺構番号（旧）	遺構番号（新）	遺構番号（旧）	遺構番号（新）	遺構番号（旧）
土坑		SP1024	B-SP24	SP1056	未命名
SK1001	A-SK1	SP1025	B-SP25	SP1057	未命名
SK1002	A-SK2	SP1026	B-SP26	SP1058	未命名
SK1003	A-SP4	SP1027	B-SP27	SP1059	A-SP11
SK1004	A-SP5	SP1028	B-SP28	SP1060	A-SP12
SK1005	A-SP18	SP1029	B-SP29	SP1061	A-SP6
井戸		SP1030	B-SP30	SP1062	C-SP1
SE1001	SE1	SP1031	B-SP31	SP1063	C-SP2
ピット		SP1032	B-SP32	SP1064	C-SP3
SP1001	B-SP1	SP1033	B-SP33	SP1065	C-SP4
SP1002	B-SP2	SP1034	B-SP34	SP1066	C-SP5
SP1003	B-SP3	欠番	欠番	SP1067	C-SP6
SP1004	B-SP4	SP1036	B-SP36	SP1068	D-SP1
SP1005	B-SP5	SP1037	B-SP37	SP1069	D-SP2
SP1006	B-SP6	SP1038	B-SP38	SP1070	D-SP3
SP1007	B-SP7	欠番	欠番	SP1071	D-SP4
SP1008	B-SP8	SP1040	B-SP40	SP1072	A-SP7
SP1009	B-SP9	SP1041	B-SP41	性格不明遺構	
SP1010	B-SP10	SP1042	B-SP42	SX1001	SX1
SP1011	B-SP11	SP1043	B-SP43	SX1002	SX2
SP1012	B-SP12	SP1044	B-SP44	SX1003	SX3
SP1013	B-SP13	欠番	欠番	SX1004	SX4
欠番	欠番	SP1046	B-SP46	SX1005	SX5
SP1015	B-SP15	SP1047	B-SP47	SX1006	SX6
SP1016	B-SP16	SP1048	B-SP48	溝	
欠番	欠番	SP1049	B-SP49	SD1001	SD1
SP1018	B-SP18	SP1050	B-SP50	SD1002	SD2
SP1019	B-SP19	SP1051	B-SP51	SD1003	SD3
SP1020	B-SP20	SP1052	未命名	SD1004	SD4
SP1021	B-SP21	SP1053	B-2SP31	SD1006	E-SD1
SP1022	B-SP22	SP1054	B-2SP32		
SP1023	B-SP23	SP1055	未命名		

図７　　第１遺構面 平面図（1/200）



1　10YR2/1 黒 +10YR4/1 褐灰シルト質細砂
2　10YR6/2 灰黄褐シルト質細砂 +2.5Y6/2 灰オリーブ細砂
3　1 層 +10YR5/2 灰黄褐細砂
4　10YR5/2 灰黄褐細砂
5　2.5Y6/2 灰黄細砂

1　2.5Y2/1 黒粗砂混じりシルト
2　10YR7/1 黒粘土
3　10YR2/1 黒シルト混じり粘土
4　10YR2/2 黒褐粗砂
5　10YR7/1 黒粘土
6　10YR2/2 黒褐粗砂

1　2.5Y4/1 黄灰細砂混じりシルト（土器片含む）
2　2.5Y3/1 黒褐細砂混じりシルト（土器片含む）
3　2.5Y6/2 灰黄シルト混じり細砂（土器片含む）

1　2.5Y4/1 黄灰細砂混じりシルト
2　2.5Y3/1 黒褐細砂混じりシルト
(2.5Y5/2 暗灰色細砂を 1%含む）土器片含む
3　2.5Y2/1 黒細砂混じりシルト
(2.5Y5/2 暗灰色細砂を 1%含む)
4　2.5Y5/1 黄灰シルト混じり細砂
5　2.5Y6/2 灰黄細砂

1　5YR2/1 黒褐シルト混じり粗砂（遺物含む）
2　5YR4/1 褐灰粗砂（遺物含む）
3　10YR7/1 黒シルト混じり粗砂（やや粘質土）

SK1001・1002 の平面図中の番号は、遺物の報文番号を示す

図 8　　第 1 遺構面　土坑実測図（1/40）

SD1002から西へ約1.5 mの場所に位置し、流路A上に掘削された土坑である。遺構の検出時にまずSK1004を検出し遺構掘削を進めたが、土坑の東半を掘削中に異なる遺構(のちにSK1005と命名)が重複して存在することを確認した。このため、断面では双方の前後関係を確認できなかったが、平面で最初にSK1004の掘り形の全形を検出できたこと、遺構底部の深さが若干異なることから、異なる2基の土坑が重複し、なおかつSK1005が先に形成・埋没し、その後にSK1004が掘削されたと判断した。

掘り形はやや南北に長い楕円形で、南北長は約1.3 m、検出面からの深さは約0.3 mである。埋土は5層に分かれ、大半がやや粘性のある土層である。

SK1005（図8）

SK1004の東半の一部を破壊して形成された土坑で、流路A上に位置する。掘り形はやや南北に長い楕円形と考えられ、南北長は約1.2 m、検出面からの深さは約0.3 mである。埋土は3層に分かれ、大半が砂系の土層である。

井戸

SE1001（図9）

調査区北端付近に位置し、流路Cに隣接して掘削された遺構である。他の遺構と比較して、調査時からの遺構内の湧水量が著しく多いことから、遺構の性格を井戸と考えた。なお、隣接して存在するSD1003とは平面的に重複関係が認められず、埋土も類似することから、一連の遺構と捉えて調査した。

SE1001の掘り形は楕円形で、長軸約1.6 m、短軸約1.4 m、検出面からの深さは約0.4 mである。埋土は6層に細分でき、いずれも砂系の土層である。

ピット（図7、表3）

調査区の中央付近を中心に、流路A、基本層序Ⅱ層等を基盤として掘削された遺構である。大小様々で深さも多様であるが、位置関係から掘立柱建物跡を復元することは困難であった。また、各ピットの時期についてもすべてのピットから遺物が出土していないため明らかにできないが、他の遺構の出土遺物から概ね古墳時代前期に形成されたピットと考えられる。

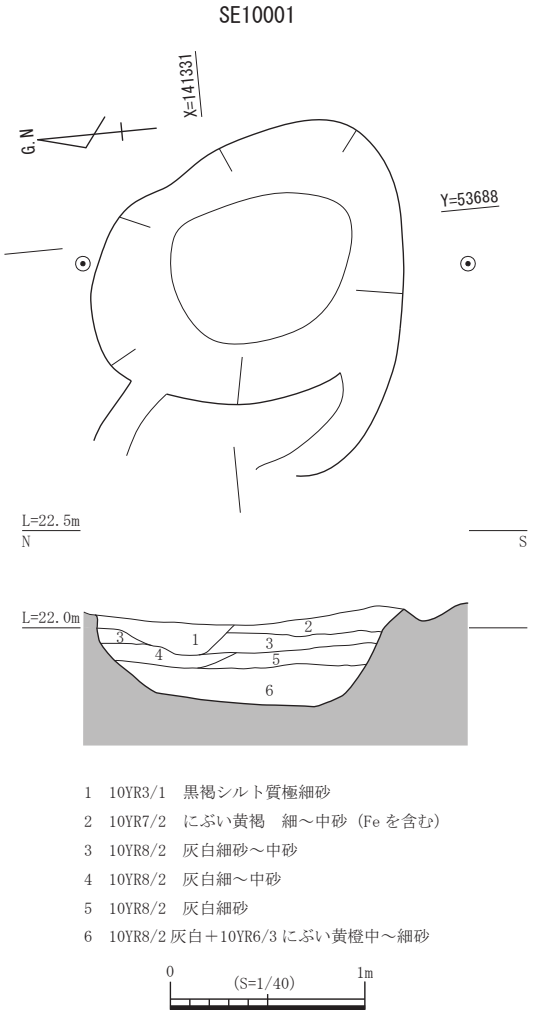


図9　第1遺構面 井戸実測図（1/40）

性格不明遺構

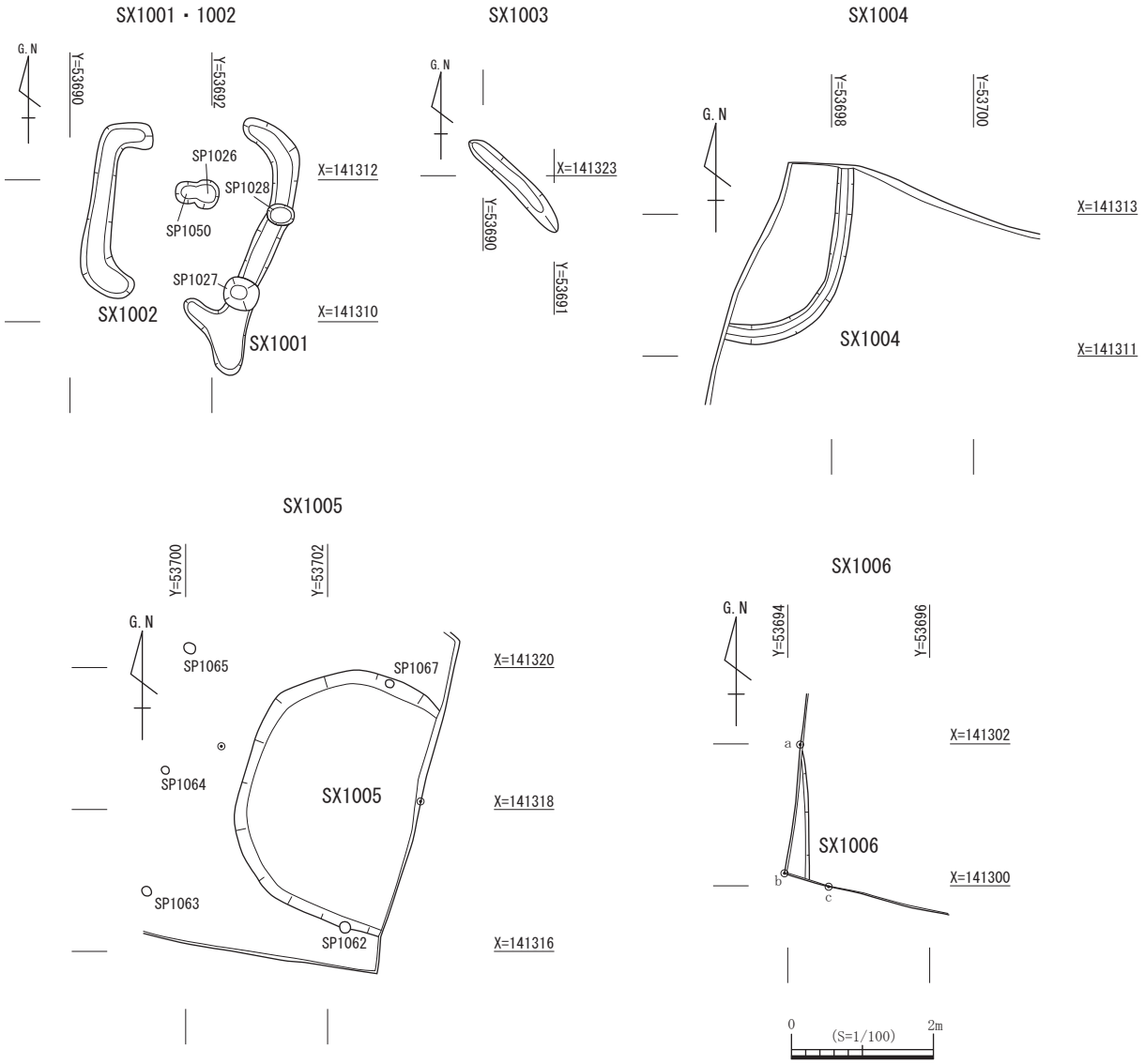
SX1001（図10）

調査区中央付近のⅡ層上面に掘り込まれた溝状の遺構である。後述するSX1002と形状が類似しており、一連の遺構である可能性も考えられるが、規模が小さいため、方形周溝墓とは異なる遺構と判断した。なお、SX1001とSP1027・1028は重複関係にあり、平面での確認からSX1001が先行して形成された遺構と考えられる。

SX1001の検出長は約3.6 m、幅0.4～0.5 mである。遺構の形状等から性格を特定することはできなかった。

SX1002（図10）

調査区中央付近のⅡ層上面に掘り込まれた溝状の遺構である。前述したSX1001と形状が類似しており、一連の遺構である可能性も考えられる。SX1002の検出長は約2.5 m、幅0.4～0.5 m、検



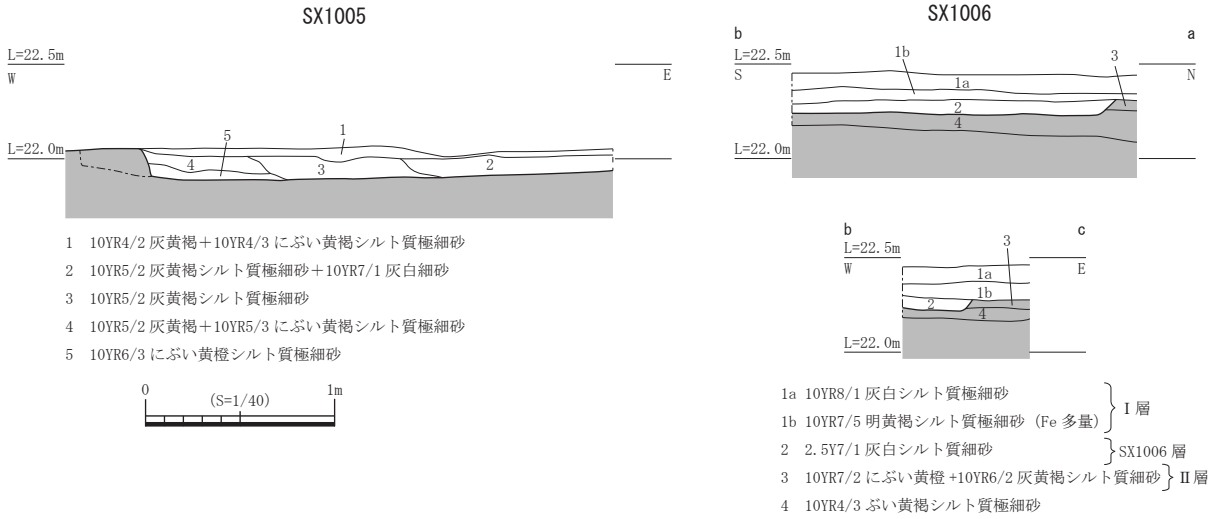


図 10　性格不明遺構実測図（1/100・1/40）

出面からの深さは約 0.1 mである。遺構の形状等から性格を特定することはできなかった。

SX1003（図 10）

調査区中央付近のⅡ層上面に掘り込まれた溝状の遺構である。検出長は約 1.7 m、幅は約 0.3 m、検出面からの深さは約 0.1 mである。溝の可能性もあるが長さが短く、遺構の性格を特定することはできなかった。

SX1004（図 10、写真図版 5-1）

Ⅱ層上面に掘り込まれた遺構である。一部分のみ検出した。確認したのは溝状の平面形で、弧状に配置される。幅は 0.2 ～ 0.3 m、検出面からの深さは約 0.1 m、埋土は褐灰色と灰黄褐色が混じるシルト質極細砂の単層である。遺構の形状は竪穴建物跡の周壁溝に類似するが、遺構のすべてを調査していないこと、溝の内側で、柱穴などの遺構を検出していないことから、竪穴建物跡とは異なる遺構と判断した。遺構の性格は特定できなかった。

SX1005（図 10、写真図版 5-2）

Ⅱ層上面に掘り込まれた遺構である。遺構の一部分は調査区の外側となる。SX1005 は SP1062・1067 と重複関係を有し、平面での観察から SX1005 が先行して形成された遺構と考えられる。

掘り形は円形を呈し、南北方向の長さは約 3.5 m、検出面からの深さは約 0.2 mである。平面形が竪穴建物跡に類似するが、遺構底部でピット等の遺構が認められなかったことから、遺構の性格を特定することはできなかった。

SX1006（図 10）

Ⅱ層上面に掘り込まれた遺構である。遺構の大部分は調査区の外側となる。掘り形は溝状を呈し、南北方向の検出長は約 1.9 m、検出面からの深さは約 0.1 mである。一部分を確認したのみであるため、遺構の性格を特定することはできなかった。

溝

SD1001（図 11、写真図版 6）

調査区北西から南西側で検出した、平面ではやや弧状の配置となる溝である。SD1001 の一部は、流路 A を基盤として掘削される。また、流路 A とほぼ共通した方向に掘削されるという特徴も指摘できる。SD1001 は、SD1002 と一部が重複しており、断面での観察の結果、SD1001 が先行して形成されたのち、埋没が進行するなかで隣接して SD1002 が開削され、最終的に同じ土層で双方とも埋没する。

SD1001 の幅は 2.5 ～ 4.4 m、検出面からの最大深度は約 1.5 mである。埋土は最終埋没層を含めると上から上・中・下層の 3 層に大別できる。上層は、断面図を作成した場所によっては遺存しておらずすべての断面で確認できなかったが、観察した箇所では細砂ないしは粗砂など砂系の土層で、厚さは最大で 0.2 m程度である。中層も砂系の堆積物を基本とするが、中層の最下部で黒色系統の粘土層が認められる。下層も砂系の土層で、一部で葉理構造が認められる。これらの大別層の状況から、少なくとも溝が機能している段階では流量の差はあるものの水が流れていたことが想定できる。大別層の層相から、下層は一定の水量が見込める段階、中層は下層と比較して水量が低下した段階に堆積が進行したと推定できる。上層は、SD1002 の最終埋没と同時であることから、SD1001 としては機能を停止しているが、窪地状に残った痕跡を最終的に充填する土層と推定できる。なお、SD1001 の底部の標高を確認すると、北と南で高低差がほとんど認められないことから、流方向を特定することはできなかった。ただし、流路 A と同様の根拠から、概ね南に向けて水が流れていたと考えられる。

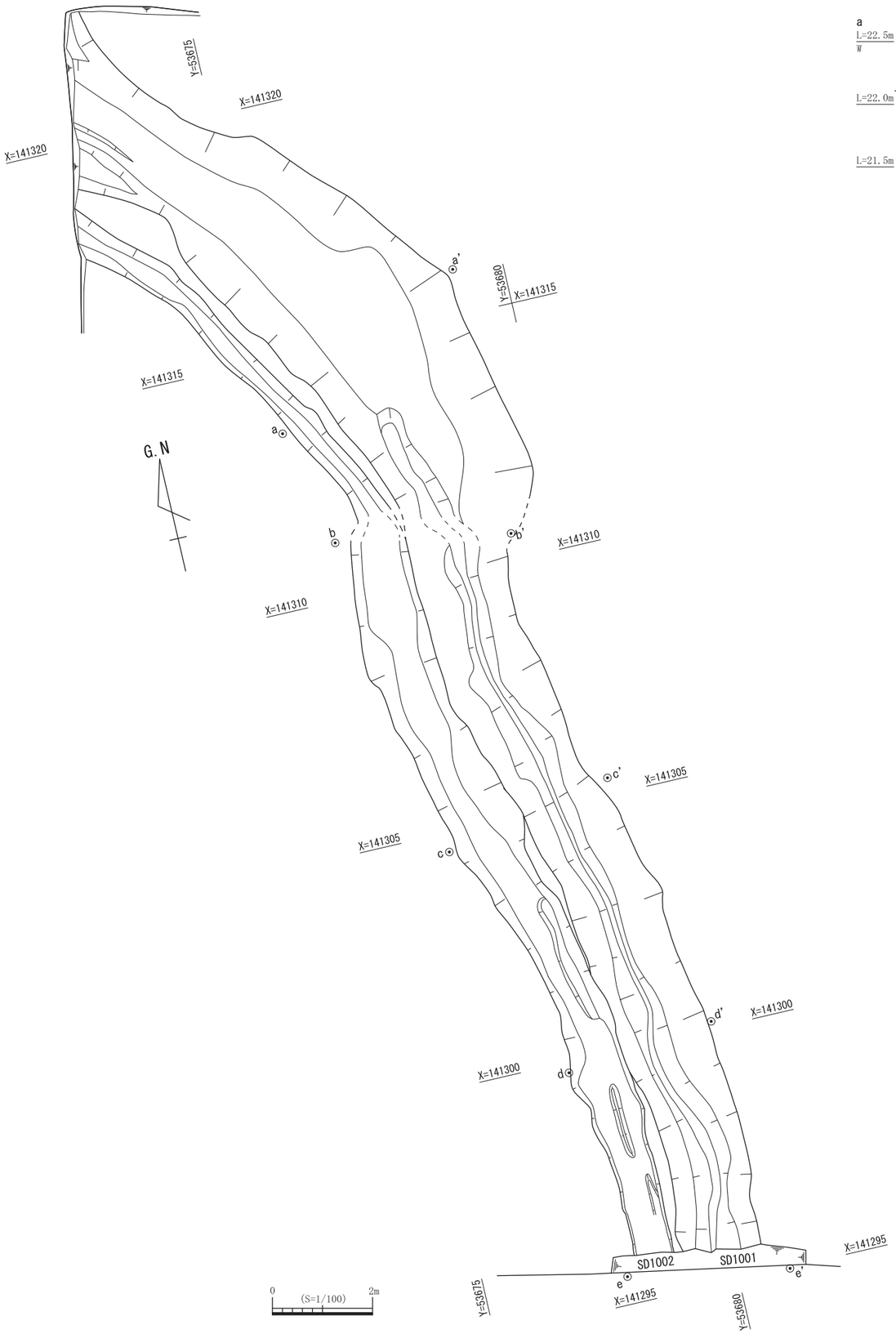
遺物の出土状況は、特に中層からの出土が多かった。特筆すべき遺物として、SD1001 北側の溝北肩付近の中層から、馬の骨の可能性が考えられる骨片 (写真図版 14-4) が複数出土した。

SD1002（図 11、写真図版 6）

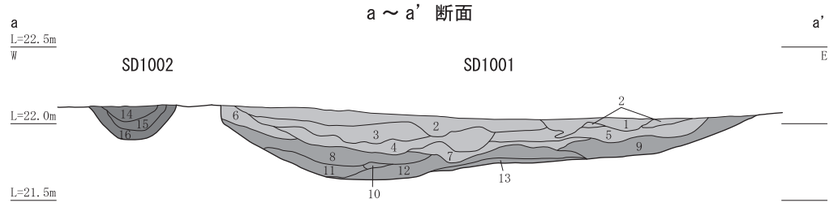
調査区北西から南西側で検出した溝で、SD1001 と一部重複するものの、弧状を描いてほぼ同じ方向に掘削される。SD1002 の一部も、流路 A を基盤として掘り込まれる。SD1002 は、SD1001 の後に形成された溝で、幅は約 0.5 ～ 1.0 m、検出面からの深さは最深部で約 0.3 m、埋土は類似した砂系の土層である。

SD1003（図 12）

調査区北側で検出した溝である。掘り形の途中



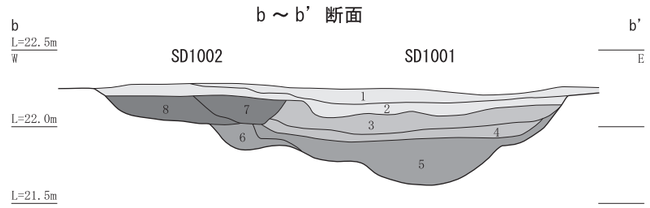
a～a’断面



1　10YR7/2 にぶい黄橙細砂＋10YR6/2 灰黄褐シルト質細砂
2　10YR6/2 灰黄褐シルト質細砂＋10YR5/ 褐灰シルト質極細砂
3　10YR6/3 にぶい黄橙＋10YR7/2 にぶい黄橙シルト質極細砂（灰白細砂を含む）
4　2.5Y6/2 灰黄＋10YR7/3 にぶい黄橙シルト質極細砂（灰白細砂を含む）
5　10YR5/1 褐灰シルト質極細砂（灰白細砂を若干含む）
6　10YR5/1 褐灰シルト質極細砂＋10YR8/2 灰白細砂
7　10YR6/2 灰黄褐シルト質極細砂＋10YR8/2 灰白細砂
8　10YR7/2 にぶい黄橙＋10YR6/2 灰黄褐 細～中砂（Fe を含む）
9　2.5Y7/1 灰白細砂＋10YR6/1 褐灰シルト質極細砂
10　10YR4/1 褐灰シルト質極細砂
11　10YR5/1 褐灰細砂
12　10YR6/4 にぶい黄橙中砂
13　7.5Y6/6 橙シルト質極細砂（Fe 多量）
14　10YR7/2 にぶい黄橙細砂
15　10YR4/1 褐灰シルト質極細砂
16　10YR5/1 褐灰シルト質極細砂＋10YR7/1 灰白細砂

SD1001 埋土
SD1002 埋土

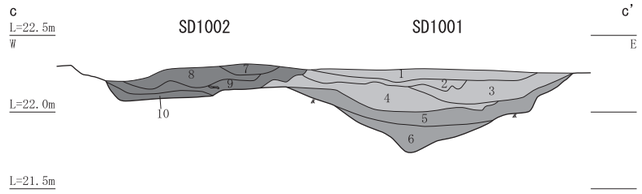
b～b’断面



1　7.5YR7/1 明褐灰粗砂混じり細砂
2　10YR7/1 灰白粗砂
3　10YR7/2 にぶい黄橙細砂混じり粗砂（遺物含む）
4　10YR3/2 黒褐粗砂混じり粘土（やや粘性高い、遺物含む）
5　10YR4/1 褐灰粗砂（φ5 ～ 10 ㎜の同色の粘土層を含む）
6　10YR5/1 褐灰シルト質細砂＋2.5Y7/2 黄灰細砂
7　10YR4/1 褐灰シルト混じり細砂（φ2 ～ 5 ㎜の同色の粘土層を含む）
8　10YR7/1 灰白細砂

SD1001 埋土
SD1002 埋土

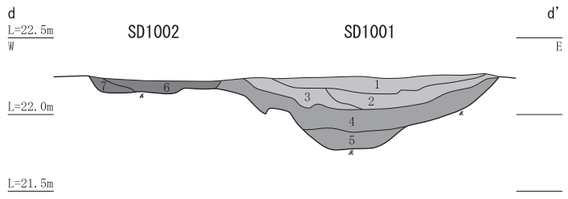
c～c’断面



1　7.5YR7/1 明褐灰粗砂混じり細砂（Mn を 15%程度含む）
2　10YR7/1 灰白粗砂
3　10YR7/2 にぶい黄橙細砂混じり粗砂（遺物含む）
4　10YR3/2 黒褐粗砂混じり粘土（やや粘性高い　遺物含む）
5　10YR4/1 褐灰粗砂（φ5 ～ 10 ㎜の同色の粘土層を含む）
6　10YR6/1 褐灰粗砂
7　10YR8/4 浅黄橙粗砂混じり細砂
8　10YR6/1 褐灰シルト混じり細砂（遺物含む）
9　10YR4/1 褐灰シルト混じり細砂（φ2 ～ 5 ㎜の同色の粘土層を含む）
10　10YR7/1 灰白粗砂

SD1001 埋土
SD1002 埋土

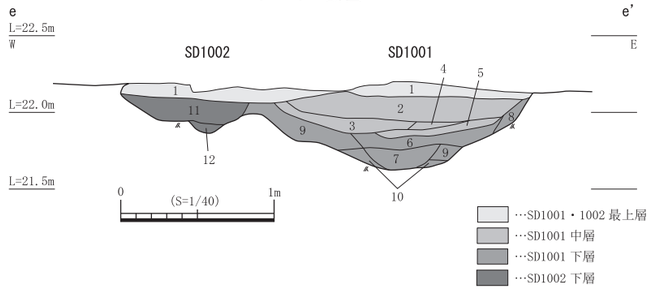
d～d’断面



1　7.5YR7/1 褐灰粗砂混じり細砂（Mn を 15%程度含む）
2　10YR7/2 にぶい黄橙細砂混じり粗砂（遺物含む）
3　10YR3/2 暗褐粗砂混じり粘土（やや粘性高い、遺物含む）
4　10YR4/1 褐灰粗砂（φ5 ～ 10㎜ の同色の粘土層を含む）
5　10YR6/1 褐灰粗砂
6　10YR8/4 浅黄橙粗砂混じり細砂
7　10YR6/1 褐灰シルト混じり細砂（遺物含む）

SD1001 埋土
SD1002 埋土

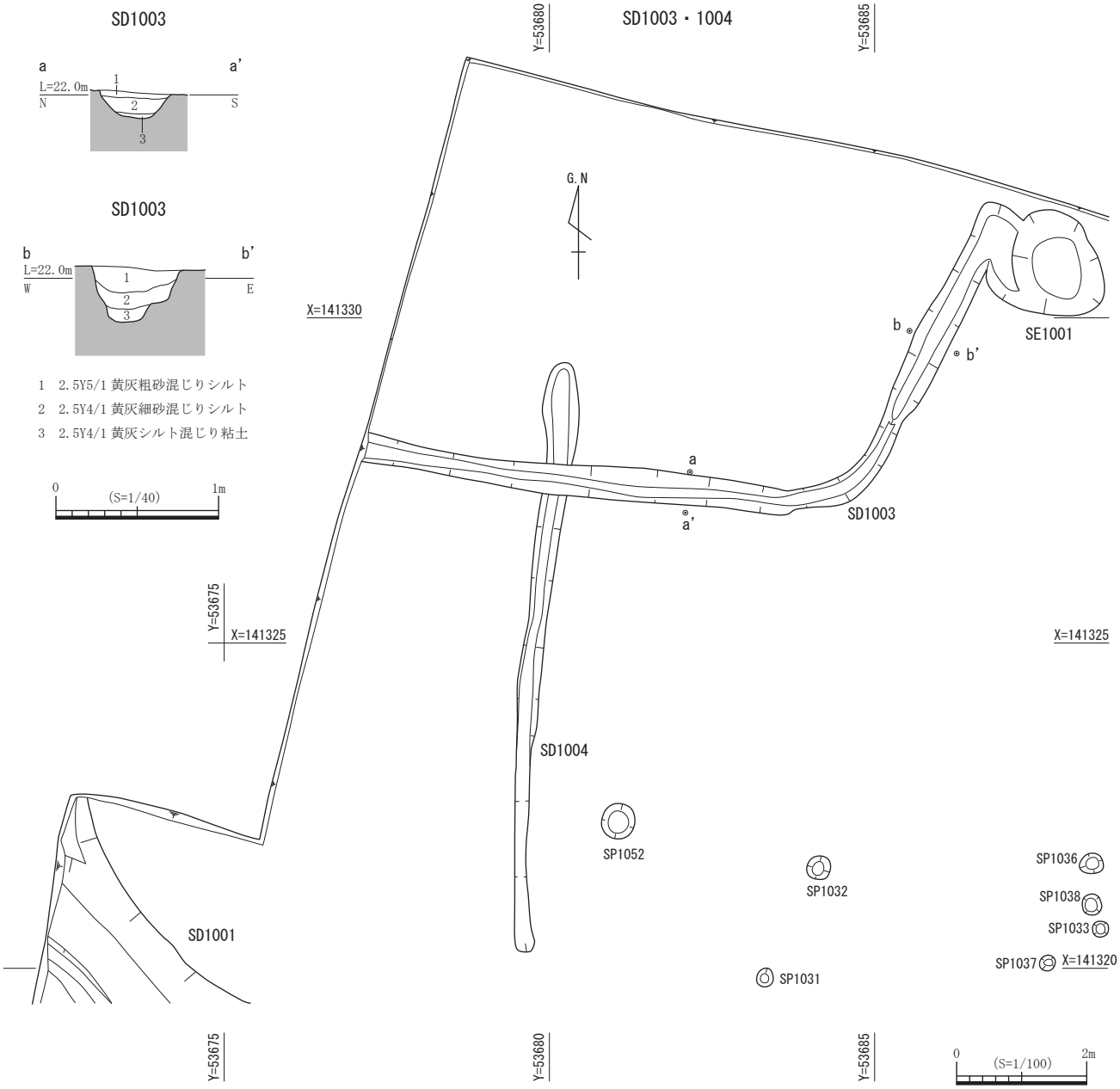
e～e’断面



1　7.5YR4/3 褐粗砂混じり細砂
2　10YR2/3 黒褐粗砂
3　7.5YR2/3 極暗褐シルト混じり粗砂
4　2.5YR3/2 黒褐細砂
5　2.5YR3/2 黒褐細砂混じり粗砂
6　2.5YR4/3 オリーブ褐粗砂
7　2.5YR4/3 オリーブ褐粗砂
8　5YR4/3 暗オリーブシルト混じり粗砂
9　10YR4/2 灰黄褐粗砂
10　10YR3/2 黒褐粗砂
11　2.5YR3/1 黒褐シルト混じり
12　2.5YR3/2 黒褐粗砂

SD1001 埋土
SD1002 埋土

図 11　第 1 遺構面 溝実測図①(1/100・1/40)



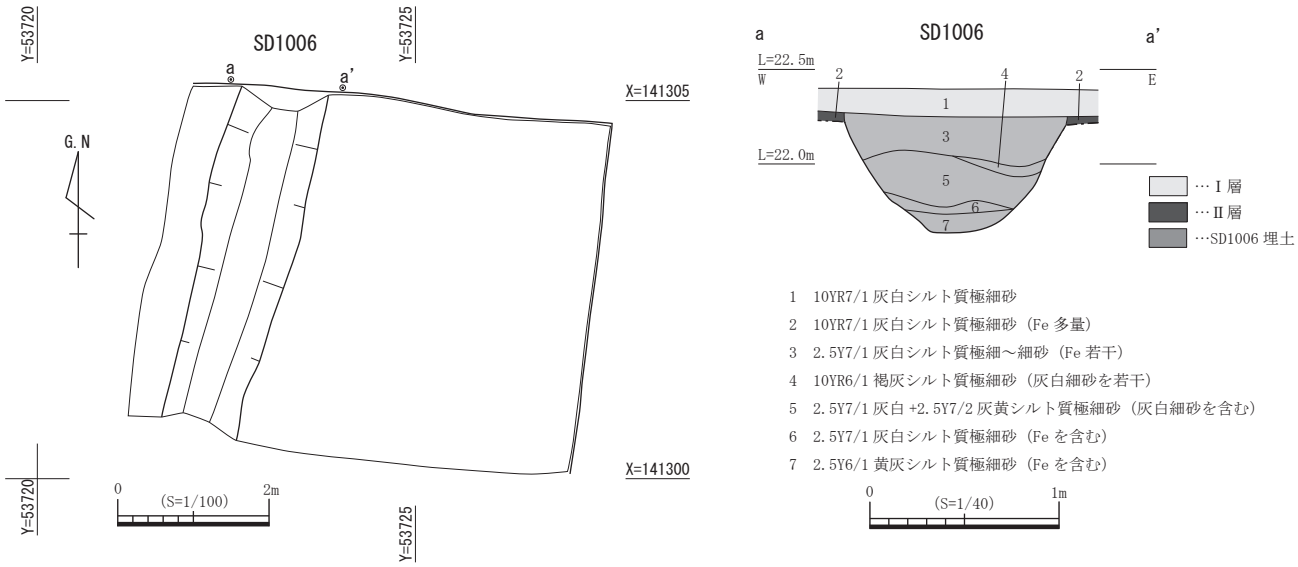


図 12　第１遺構面 溝実測図②（1/40）

で北に向けて屈曲し、SE1001へと続く。検出長は約12.5 m、検出面からの深さは最深部で約0.3 mである。埋土は概ね3層に細別でき、上位2層がシルト、最下層が粘性の高い堆積物である。

溝の底部では、部分的に段差が生じる箇所が認められた。SD1003とSE1001の最上層は類似した埋土であるため一連の遺構と捉えた。SE1001に向けて溝の底の標高が低くなることから、他の地点からSE1001に水を引いていた可能性が考えられる。

SD1004（図12）

調査区北西側で検出した南北方向の溝である。SD1004はSD1003と重複関係を有し、平面での観察所見から、SD1004の埋没後にSD1003が形成されたと考えられる。

SD1004の長さは約9.0 m、幅は最大で約0.5 mである。

SD1006（図12、図版7）

事業地の東端で検出した、基本層序Ⅱ層を基盤に掘り込まれた遺構である。SD1006は、座標に対して北で東に振る南北方向の溝である。検出長は約4.7 m、幅は1.0～1.3 m、検出面からの深さは約0.6 mである。埋土は5層に細分でき、いずれも類似した極細砂が堆積する。ただし、葉理構造などは明瞭に認められず、流水があったかは不明である。なお、溝の位置と延伸方向から、県埋蔵文化財センターで調査された川島本町遺跡のSD110と同一の溝と考えられる。

b 第2遺構面の遺構

第2遺構面の概要（図13）

第1遺構面とは異なり、微高地と低地部の高低差が存在する起伏のある地形と言える。ただし、微高地上に遺構は存在せず、低地部側に土坑や溝、多数のピットと、図4に示したとおり調査区北側で流路Cが認められた。ピットの配置から掘立柱建物跡の復元はできなかった。

土坑

SK2001（図15、図版8）

調査区北西側に位置し、遺構の西半は調査区の外側となる。遺構の形状から、土坑と判断した。掘り形は円形で、南北方向の長さは約1.1 m、検出面からの深さは約0.3 m、埋土は褐灰色細砂混じり粗砂の単層である。遺構の底部付近で、多くの湧水を確認した。

SK2002（図15）

調査区北西側に位置し、SK2001から約2.5 m南東側に位置する土坑である。掘り形は南北方向にやや長い楕円形で、長軸約1.4 m、短軸約1.1 mである。

ピット（図13、表3）

第1遺構面と同様に、大小様々で深さも多様なピットが合計43基認められた。これらのピットは、概ね3箇所程度の塊となって分布する傾向が認められた。ただし、位置関係から掘立柱建物跡を復元することは困難であった。また、各ピットの時期についても、すべてのピットから遺物が出土していないため明らかにできなかった。

溝

SD2001（図14）

調査区北西側から南東側に向けて検出した溝である。微高地と低地部の境界付近に位置し、調査区中ほどで、掘り形の続きを連続して検出することができなかった。

SD2001の検出長は約23.5 m、幅は約0.5～1.3 m、検出面からの深さは0.1～0.2 mである。埋土は灰黄褐色粗砂混じり細砂の単層である。

SD2002（図14）

調査区中ほどで検出した溝である。当初はSD2001の続きと考えて掘削したが、この地点よりも東側でSD2001の続きと考えられる掘り形を検出したため、別の溝と認識して調査した。SD2003と重複関係を有するが、平面での検出状況から、SD2003が先に形成されたことが明らかになった。検出長は約2.2 m、幅は約0.8 mである。

SD2003（図14）

調査区中ほどでSD2003と接して検出した溝である。溝の東側をSD2002、西側をSD1001に破壊される。検出長は約1.3 m、幅は約0.5 m、検出面からの深さは約0.05 mである。埋土は、暗灰黄色粗砂混じりシルトの単層である。

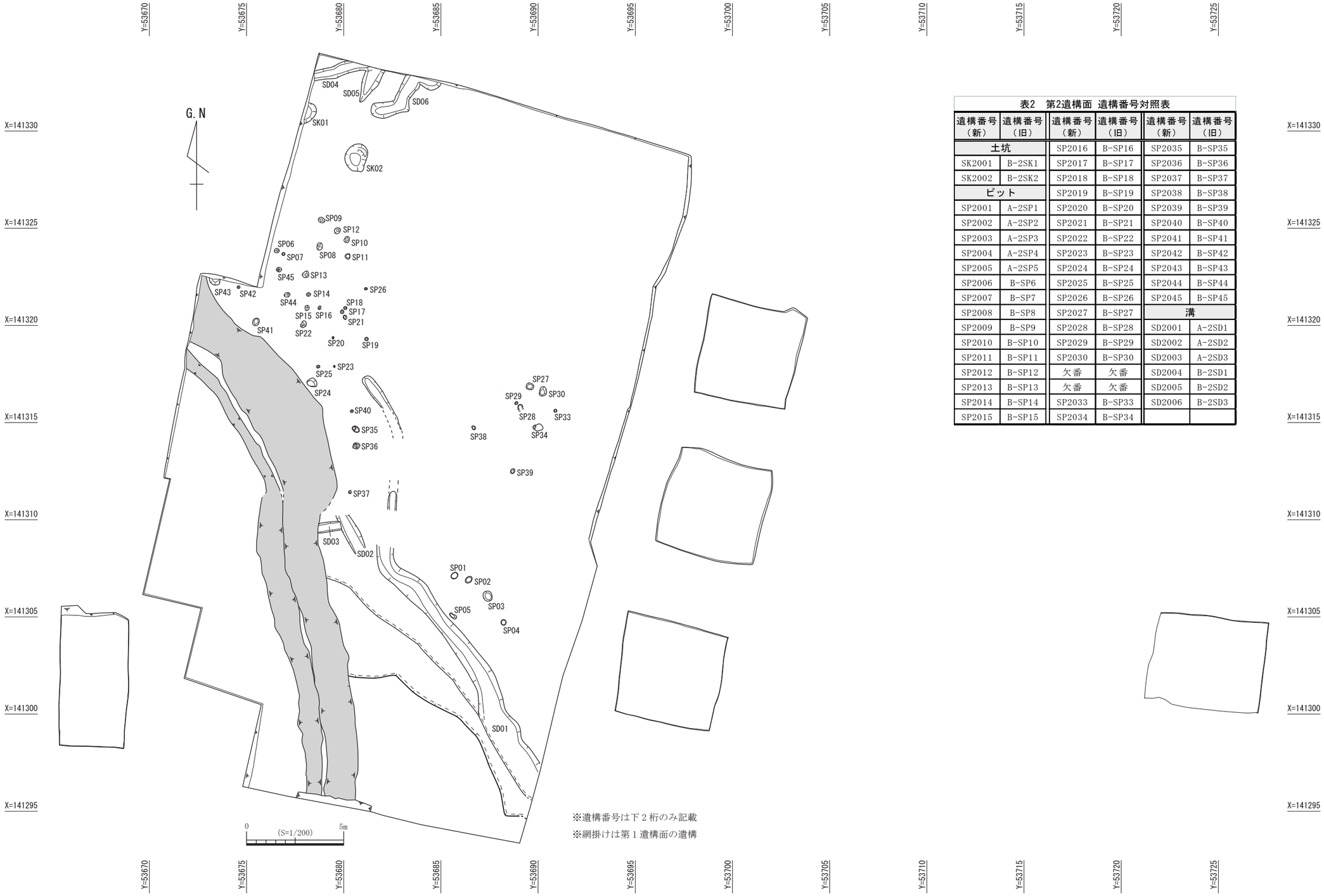


表2　第2遺構面　遺構番号対照表

遺構番号（新）	遺構番号（旧）	遺構番号（新）	遺構番号（旧）	遺構番号（新）	遺構番号（旧）
土坑		SP2016	B-SP16	SP2035	B-SP35
SK2001	B-2SK1	SP2017	B-SP17	SP2036	B-SP36
SK2002	B-2SK2	SP2018	B-SP18	SP2037	B-SP37
ピット		SP2019	B-SP19	SP2038	B-SP38
SP2001	A-2SP1	SP2020	B-SP20	SP2039	B-SP39
SP2002	A-2SP2	SP2021	B-SP21	SP2040	B-SP40
SP2003	A-2SP3	SP2022	B-SP22	SP2041	B-SP41
SP2004	A-2SP4	SP2023	B-SP23	SP2042	B-SP42
SP2005	A-2SP5	SP2024	B-SP24	SP2043	B-SP43
SP2006	B-SP6	SP2025	B-SP25	SP2044	B-SP44
SP2007	B-SP7	SP2026	B-SP26	SP2045	B-SP45
SP2008	B-SP8	SP2027	B-SP27	溝	
SP2009	B-SP9	SP2028	B-SP28	SD2001	A-2SD1
SP2010	B-SP10	SP2029	B-SP29	SD2002	A-2SD2
SP2011	B-SP11	SP2030	B-SP30	SD2003	A-2SD3
SP2012	B-SP12	欠番	欠番	SD2004	B-2SD1
SP2013	B-SP13	欠番	欠番	SD2005	B-2SD2
SP2014	B-SP14	SP2033	B-SP33	SD2006	B-2SD3
SP2015	B-SP15	SP2034	B-SP34		

図 13　第 2 遺構面 平面図（1/200）

図 14　第 2 遺構面 溝実測図①(1/100・1/40)

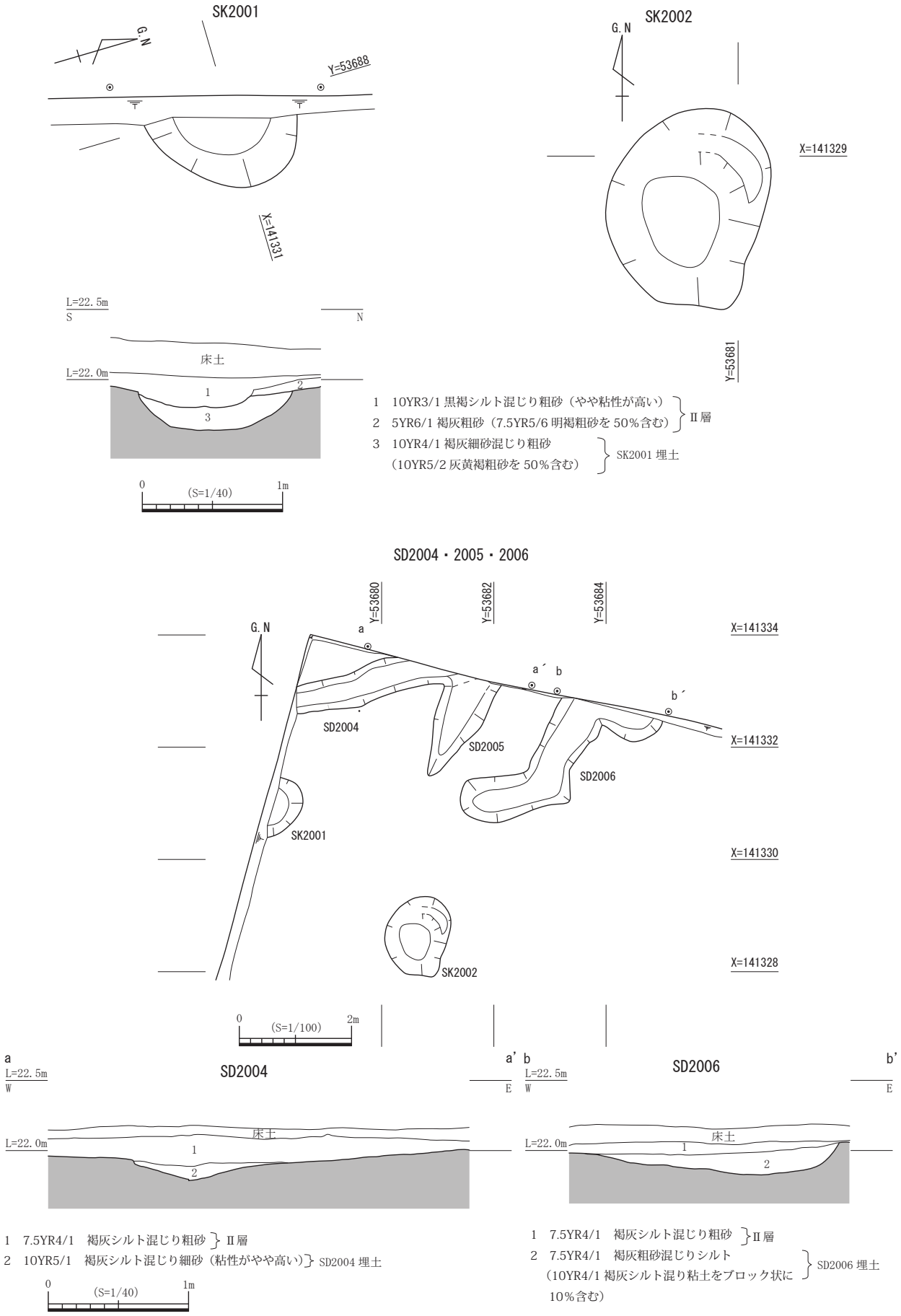


図 15　第 2 遺構面 土坑・溝実測図（1/100・1/40）

SD2004（図 15）

調査区北西隅で検出した東西方向の溝である。溝の東側と西側は、それぞれ調査区の外側に続く。SD2004 は SD2005 と重複関係を有し、断面で SD2005 が埋没したのちに SD2004 が形成されることを確認した。検出長は約 3.0 m、幅は 0.5 ～ 0.6 m、検出面からの深さは約 0.1 mである。埋土は褐灰色シルト混じり細砂の単層である。

SD2005（図 15）

SD2004 の東側で検出した南北方向の溝である。掘り形は土坑状を呈し、南側の続きを検出することはできなかったが、周辺の遺構の状況などから、溝と判断した。検出長は約 1.9 m、幅は約 0.9 mである。

SD2006（図 15）

SD2005 の東側で検出したやや屈曲する南北方向の溝である。溝の北側は調査区の外側へと続く。検出長は約 3.0 m、幅は 0.7 ～ 0.8 m、検出面からの深さは約 0.2 mである。埋土は、褐灰色粗砂混じりシルトの単層である。

c　出土遺物

土坑

SK1001（図 16、写真図版 9・10・14）

1 ～ 3 は土師器の小型丸底壺である。1 は非常に歪な形態であり、口縁端部を欠損する。体部外面は一部にヘラの擦痕、口縁部内面はヘラの押圧痕が残る。体部外面に黒斑がある。2 は球形の体部に僅かに外反する口縁部が付く。体部外面に黒斑が見られる。3 はやや半球状の体部に外反する口縁部が付く。器形は歪である。体部内面にヘラの押圧痕が残る。口縁部・体部の外面には帯状の黒斑が見られる。

4 ～ 7 は土師器の甕で、4・5 は小型の甕である。4 は球形の体部に外反する口縁部が付く。体部下位に焼成後の穿孔が 1 個ある。体部外面下半には煤が付着し、底部付近は熱により赤化する。5 は球形の体部にやや長い口縁部が付く。体部外面下半には煤が付着する。6・7 はやや長胴気味の体部に外反する口縁部が付く。体部外面は剥離が著しく、下半には煤が付着する。

8 は土師器の二重口縁壺であり、球形の体部に短い口縁が付く。外面には黒斑が見られる。

9 ～ 11 は土師器の高杯である。9 は杯部で、内面にヘラミガキが施される。10 は脚部であり、裾部が大きく広がる。最上部は杯部との接合痕である。　11 は脚部で、焼成が良好である。最上部は杯部との接合痕で、内面には輪積痕があり、全面に搾り目が残る。

12 は弥生土器の壺であり、ヘラ描き沈線、刺突文、山形文を施す。13・14 は弥生土器の底部である。

15 ～ 17 は石製品である。

15 は石鏃未成品で、石材はサヌカイトである。素材剥片の 1 側面に細部調整を施す。

16 は二次加工のある剥片で、石材はサヌカイトである。 1 面からの調整が施される。

17 は磨製石斧で、石材は緑色岩である。

SK1002（図 17・18、写真図版 9 ～ 11・14）

18 は土師器の小型鉢であり、平底の底部から急角度で体部が立ち上がり、口縁部は歪で短い。内外面に黒斑がある。

19 ～ 25 は土師器の小型丸底壺である。19 ～ 21 は球形の体部にやや短い口縁部が付く。22・23 は半球状の体部で、24・25 は球形の体部にやや長い口縁部が付く。20・21・23 は体部内面に明確な輪積痕が残る。

26 は土師器の広口壺である。

27 ～ 34 は土師器の甕である。27・29 は球形の体部に短く外反する口縁部が付く。28・30 は球形の体部であり、28 の内面には輪積痕が残る。31 ～ 34 は球形の体部に外反するやや長い口縁部が付く。31 はやや直立気味の口縁部で、体部には焼成後の穿孔が 2 個見られる。体部内外面には輪積痕が残存し、体部外面上位には黒斑がある。32 の体部内面には輪積痕が残る。33 の外面調整は縦方向に板ナデと横方向のナデが施される。34 は全体的に器厚が薄く、体部中央に焼成後の小さな穿孔が 1 個ある。体部外面下半に黒斑が部分的に見られる。

35 ～ 44 は土師器の高杯である。35 の杯部は丸みを帯びた椀形を呈し、外面中位に僅かな稜を持つ。脚部は中位から大きく広がる。杯部内面に工具痕があり、杯部と脚部の接合部分には接合痕が明瞭に確認できる。

36 ～ 41 は脚部上半で、裾部が大きく広がる器形である。41 の内面には粘土紐巻上げ技法の痕跡が残る。

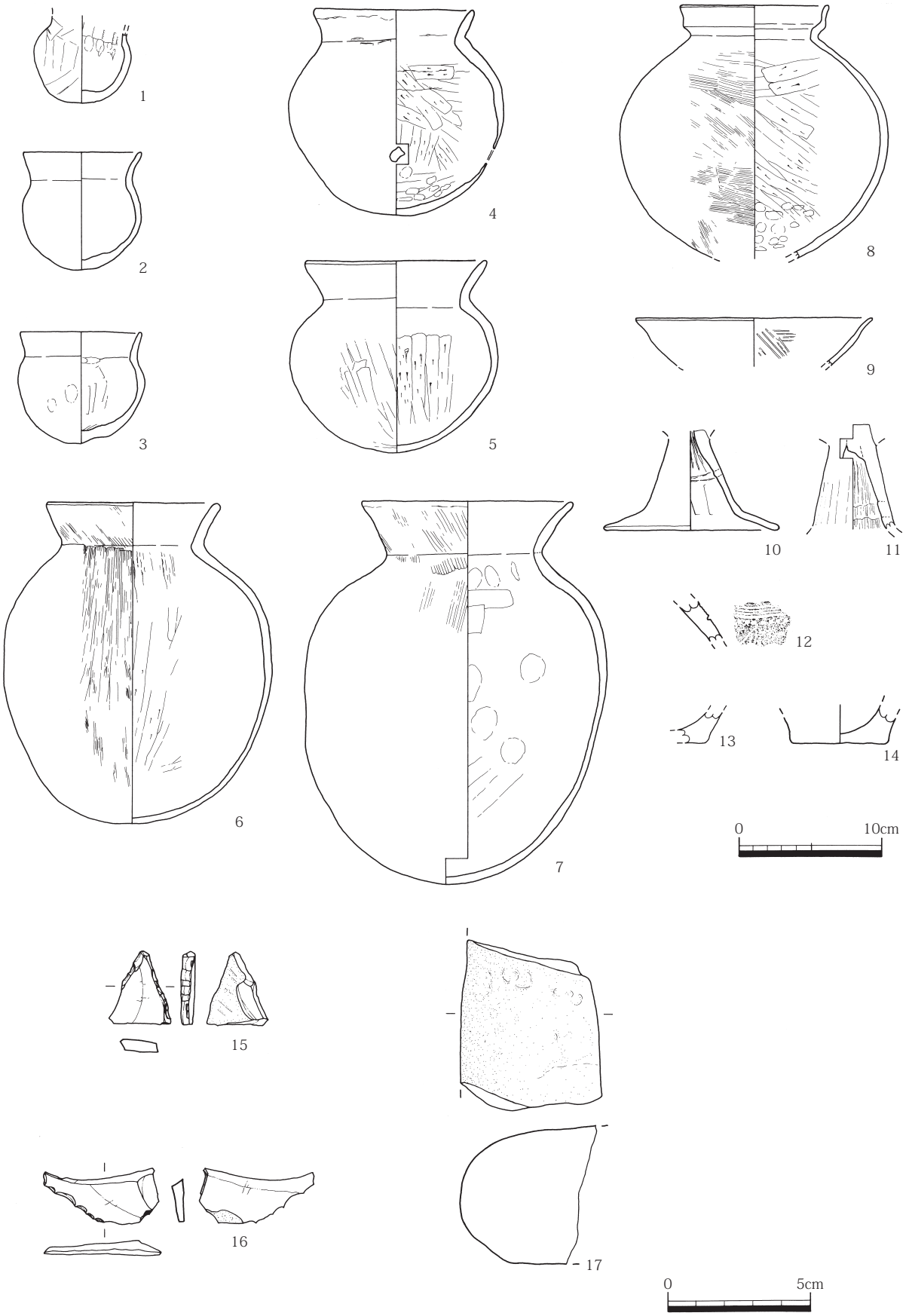


図 16　SK1001 出土遺物実測図（1/4・1/2）

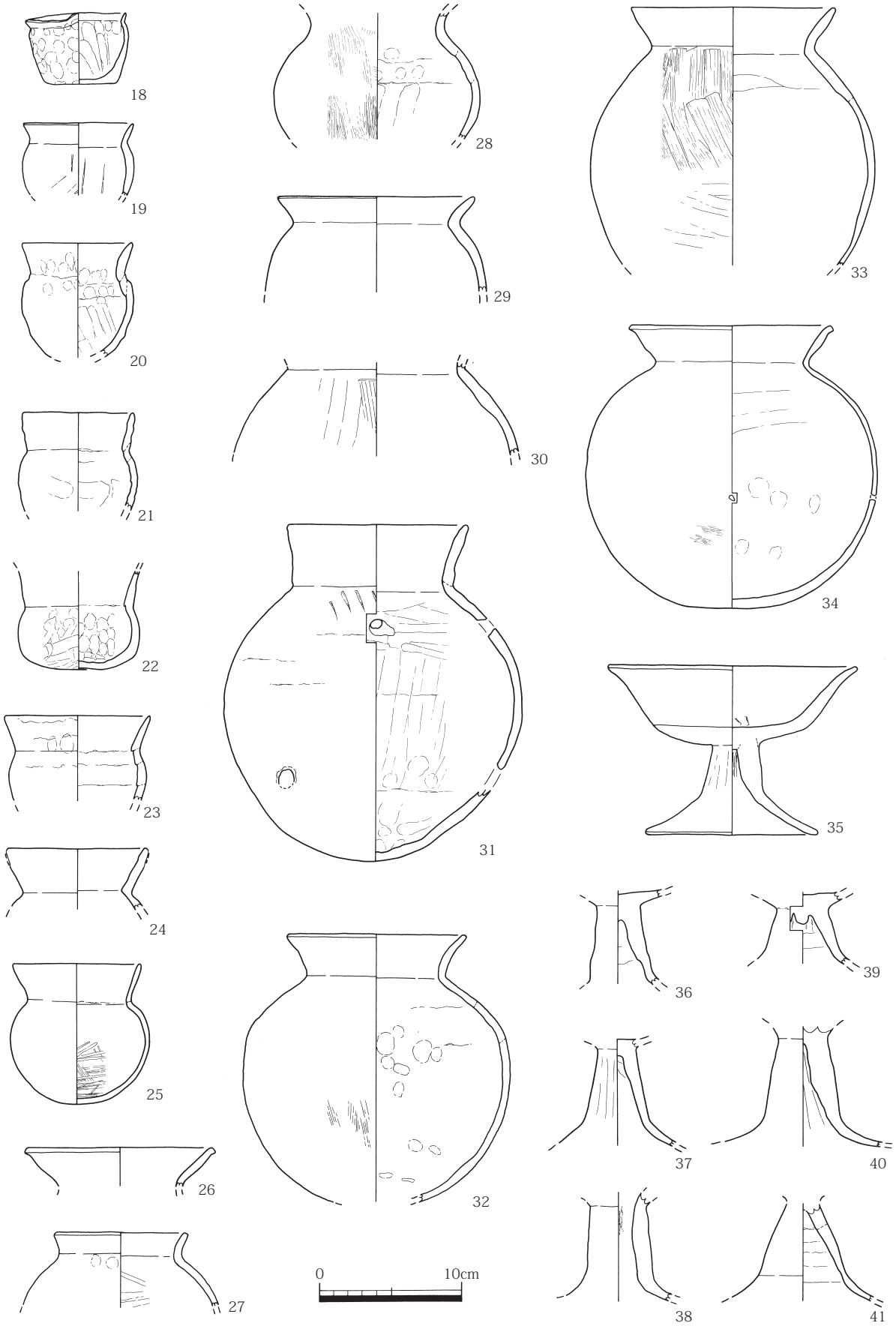


図 17　SK1002 出土遺物実測図①（1/4）

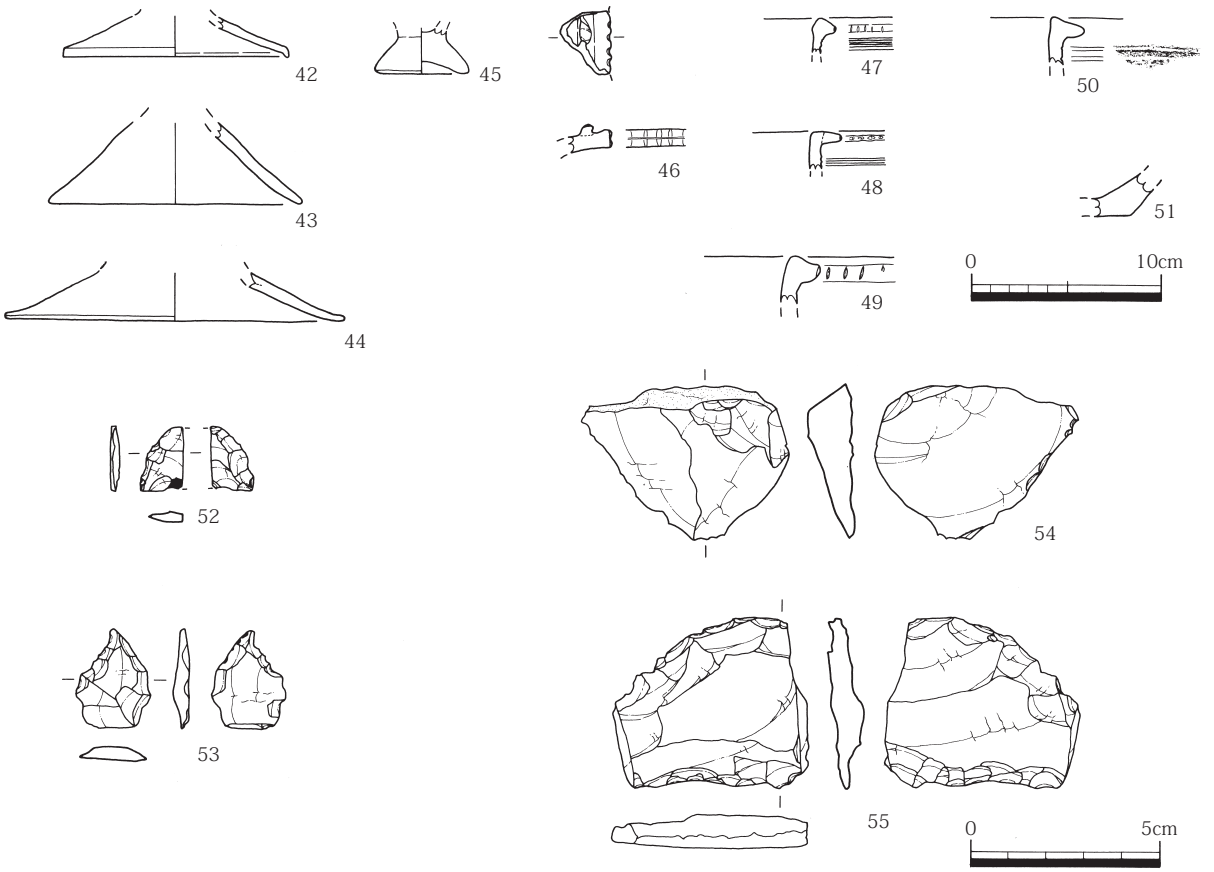


図 18　SK1002 出土遺物実測図②（1/4・1/2）

42 ～ 44 は裾部である。42 の裾端部は下方に少し拡張し、44 の裾端部はほぼ平坦に広がる。

45 は土師器の製塩土器の脚部である。

46 は弥生土器の壺で、内面に押圧突帯があり、口縁端部には刻み目が施される。47 ～ 50 は弥生土器の逆「L」字状口縁の甕である。51 は弥生土器の底部である。

52 ～ 55 は石製品で、石材はすべてサヌカイトである。

52・53 は平基式石鏃の未成品である。54 は微細剥離痕のある剥片で、上側面に自然面を残す。55 はスクレーパーで、両面に調整が施される。

土坑

SK1004・1005（図 19、写真図版 11）

56 は土師器の壺で、全体的に器厚が薄い。

57 ～ 59 は土師器の甕で、球形の体部から直線的に口縁部が延び、口縁部は比較的強く折り曲げられる。58・59 の体部外面の調整はハケが施される。58 は輪積痕が内面に残存する。

60 ～ 63 は土師器の高杯である。60 は椀状の杯部で、脚部との接合痕が明確に残る。61 は脚部との接合痕が残る。62・63 は脚部中位から広がる器形である。

64 は土師器の製塩土器である。直線的な体部から口縁部に至る。

65・66 は弥生土器の底部である。

67 は石鏃で、石材はサヌカイトである。細部調整が 1 面のみ施される。

溝

SD1001（図 20 ～ 24、写真図版 12 ～ 14）

68 ～ 181 は SD1001 から出土した遺物であり、68 ～ 117 は上・中層、118 ～ 164 は下層の遺物、165 ～ 182 は出土層不明の遺物である。

68・69 は須恵器の杯蓋である。68 の口縁端部は僅かな凹面を成す。稜は非常に僅かである。69 は平坦な天井部で、外面に回転ヘラケズリが施される。

70 ～ 74 は須恵器の杯身である。70 は口径 11.8cm、立ち上がり高 1.6cm である。立ち上がりは内傾し、端部は段を成す。受部は水平に延びる。71 は口径 11.8cm、立ち上がり高 2.0cm である。受部は外上方に延びる。72 ～ 74 は口径 13.2 ～

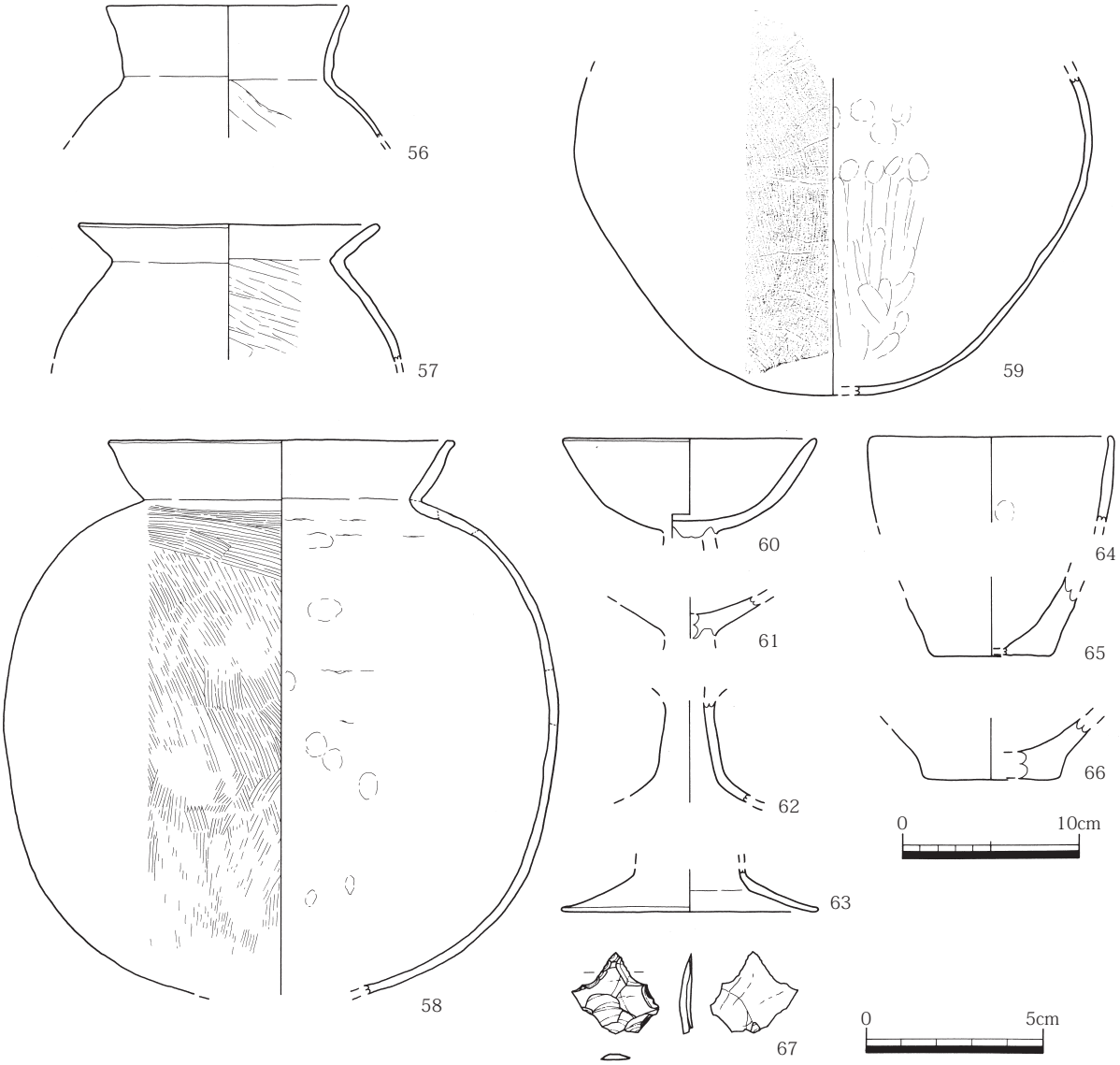


図 19　SK1004・1005 出土遺物実測図（1/4・1/2）

14.8cm、立ち上がり高 0.7cm である。底体部外面の調整は回転ヘラケズリである。

75・76 は須恵器の甕である。75 は低い突帯を巡らし、波状文がある。76 は内面に自然釉。

77・78 は須恵器の高杯である。77 は 1 対の輪状の把手を伴い、凸帯の下に波状文を施す。78 は裾端部が拡張し、透かしを有する。

79 は須恵器の堤瓶で、カキ目が施される。

80・81 は土師器の小型丸底壺である。

82 は土師器の壺で、外反気味の口縁部である。

83 は土師器の二重口縁壺である。

84 ～ 86 は土師器の高杯で、85 は杯部と脚部の接合痕、86 は脚中位と裾端部に接合痕が見える。

87 は土師器の甑で、部分的に煤が付着する。

88 ～ 91 は弥生土器の壺である。88 は口縁端部が上方に若干拡張する。90 は外面にヘラ描き沈線が施される。91 は断面に輪積痕が見える。

92 ～ 94 は弥生土器の甕である。92･93 は逆「L」字状口縁、94 は如意状口縁である。

95 は弥生土器の蓋である。

96・97 は弥生土器の底部である。

98 ～ 117 は石製品であり、石材はすべてサヌカイトである。98 ～ 112 は石鏃、113 は石錐、114 は打製石斧、115・116 はスクレイパーで、117 は二次加工のある剥片である。

98 ～ 105 は平基式、106 は凸基式、107 ～ 112 は凹基式である。すべての石鏃は細かな調整が施されている。

113 は両面からの調整が施される。

114 は両面から調整が施され、打製石鍬あるいは打製石包丁の可能性も考えられる。

115･116 は上下辺に両面からの調整が施される。

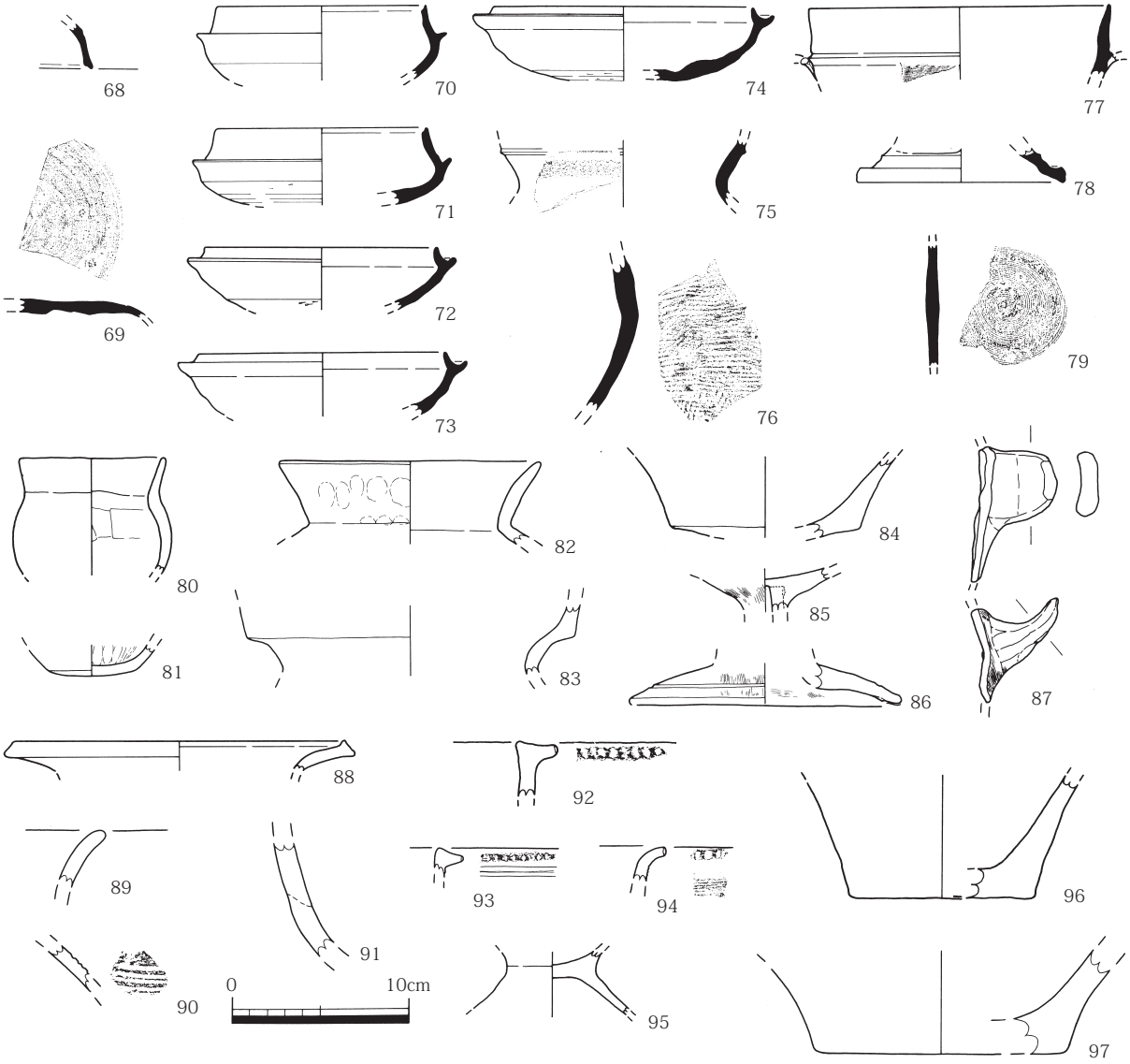


図 20　SD1001 上・中層出土遺物実測図①（1/4）

117 は細かな調整があまり見られない。

118 ～ 123 は須恵器の杯蓋である。118 は口径 12.0cm で、口縁部は下外方に下り、端部は面を成す。119・121 は口径 14.6cm と 16.4cm で、口縁部はほぼ垂直に下る。120 は口径 15.2cm で、口縁部は下外方に下り、端部は丸い。外面に自然釉が部分的に付着する。

124・125 は須恵器の杯身である。124 は口径 13.4cm、立ち上がり高 1.0cm であり、器高は低い。125 は口径 11.0cm、立ち上がり高 2.0cm であり、受部は水平に延びる。

126 は須恵器の甕、127・128 は須恵器の壺であり、127 は内外面に自然釉がかかる。

129・130 は土師器の小型丸底壺である。

131 ～ 133 は土師器の甕である。

134・135 は土師器の甑の把手である。

136 ～ 143 は弥生土器である。136 ～ 139 は壺であり、ヘラ描き沈線・山形文と刻み目のある貼付突帯が施される。

140 ～ 142 は甕であり、140 は櫛描直線文を施し、141・142 は逆「L」字状口縁であり、142 は貼付口縁の接合痕がある。143 は底部である。

144 ～ 164 は石製品で、石材はすべてサヌカイトである。

144 ～ 154 は石鏃である。144・148 は平基式、145 は異形、146・167・169 ～ 151 は凹基式、152 は有基式であり、 153・154 は未成品である。

155 ～ 157 は石錐である。155 は頭部と石錐部の境界が不明瞭である。156・157 は棒状の形態を呈する。

図 21　SD1001 上・中層出土遺物実測図②（1/2）

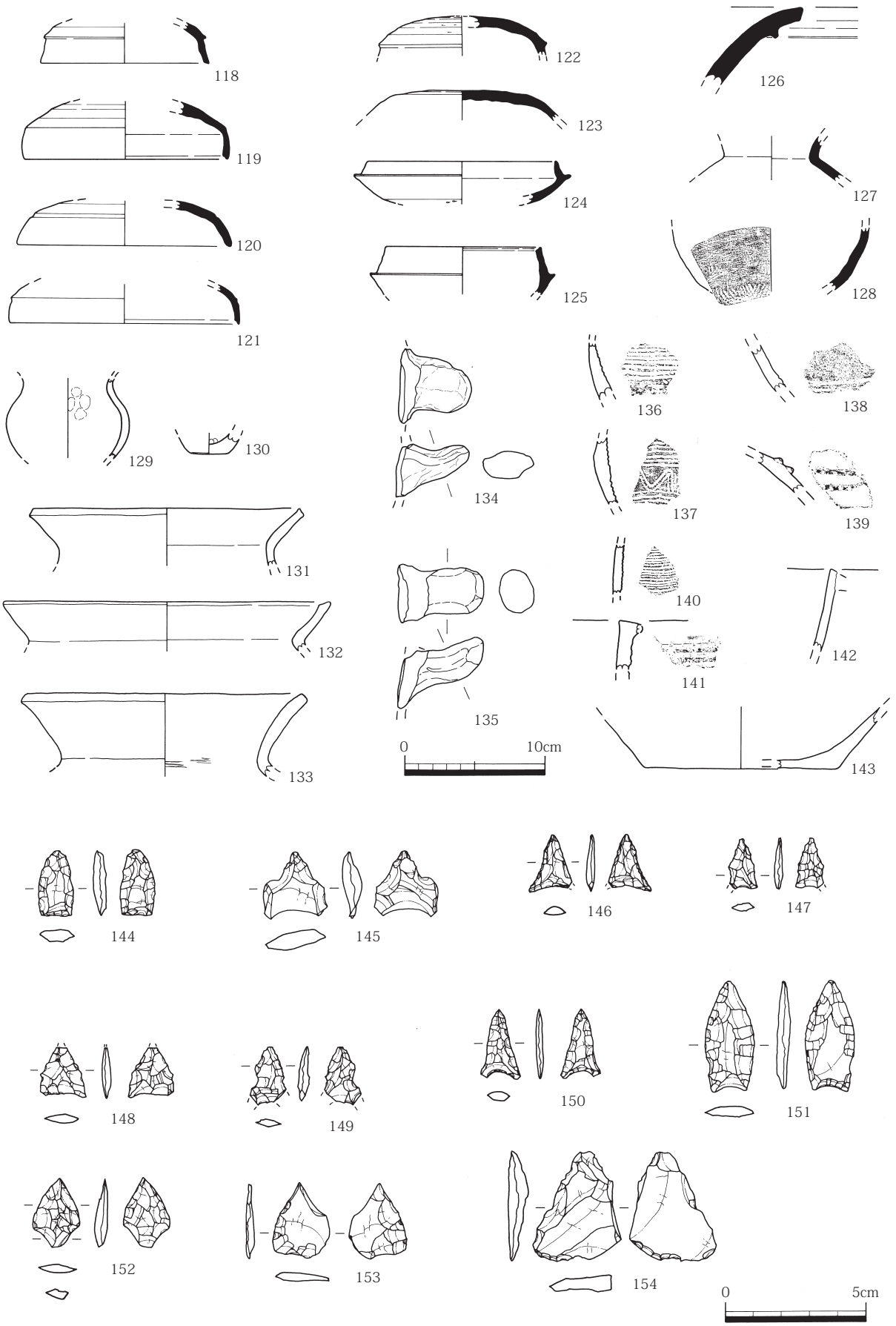
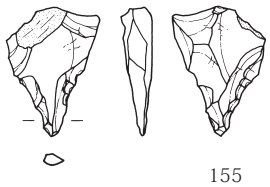
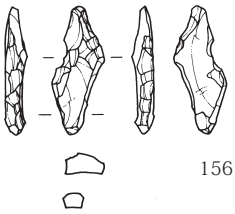
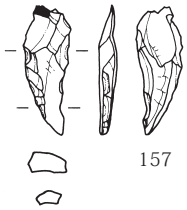
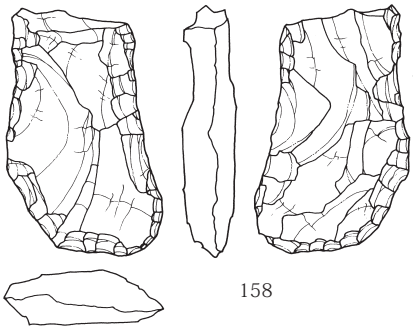


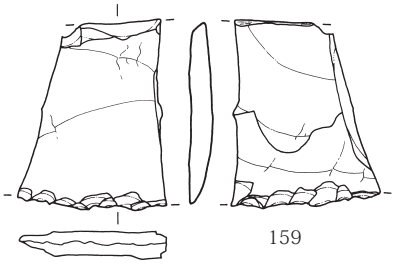
図 22　SD1001 下層出土遺物実測図①（1/4・1/2）

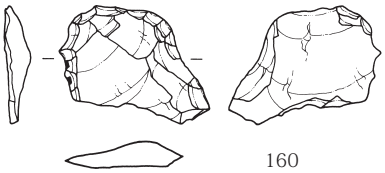

155

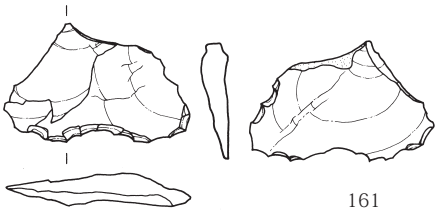

156

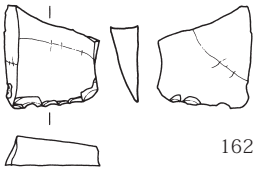

157

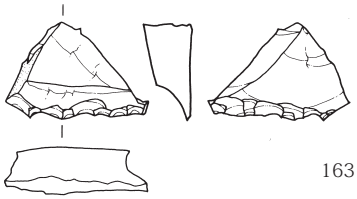

158


159


160


161


162


163

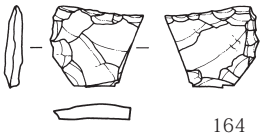

164

図 23　SD1001 下層出土遺物実測図②（1/2）

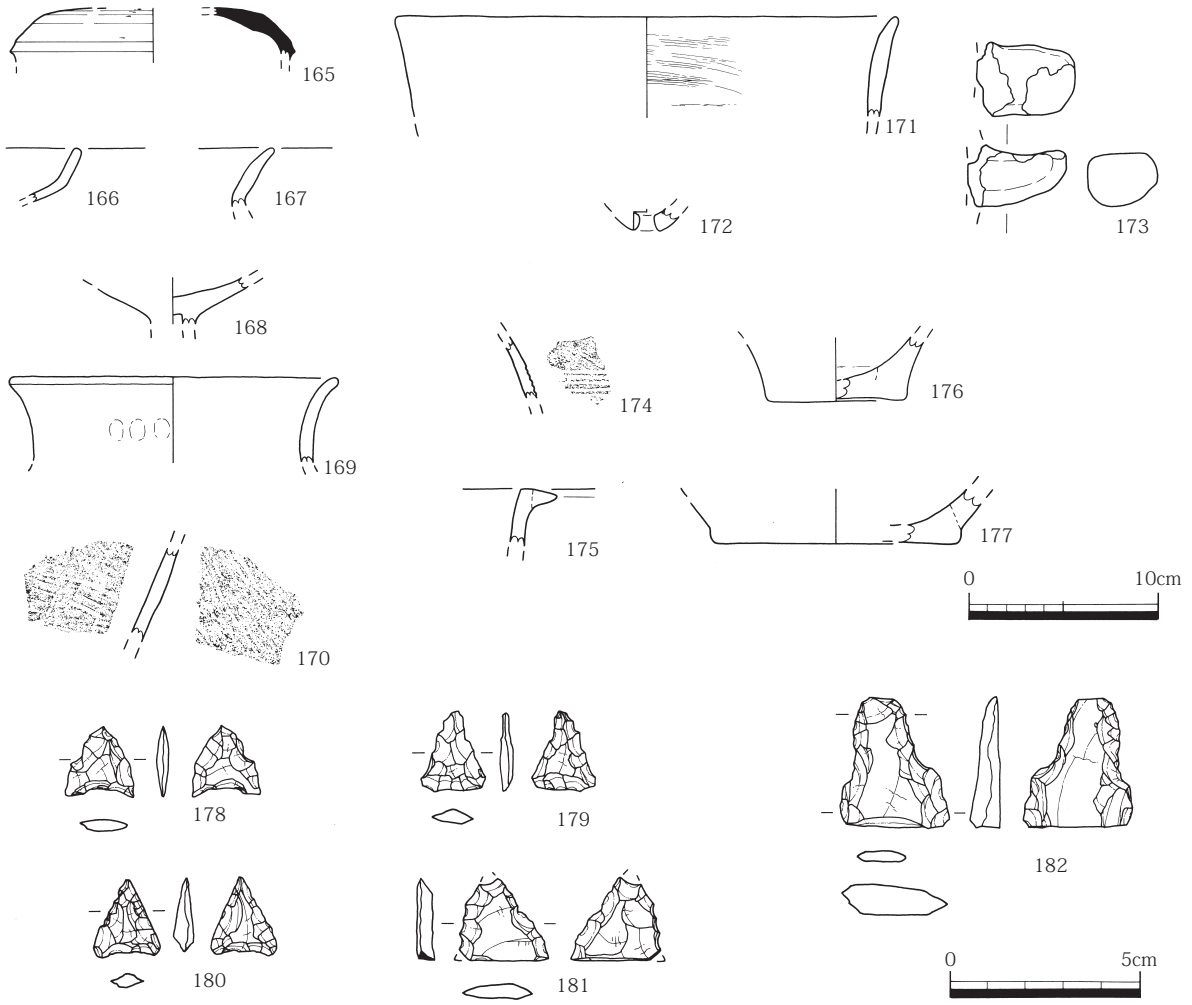


図 24　SD1001 出土遺物実測図（1/4・1/2）

158 は打製石斧であり、両面調整し、刃部に使用痕が明確に残る。

159 は打製石包丁であり、刃部を両面から調整する。

160 ～ 163 はスクレイパーであり、横長剥片素材で、刃部は両面ないし片面から調整する。160 は二次加工のある剥片の可能性もある。163 は 1 側面に自然面を残す。

164 は二次加工のある剥片であるが、石鏃未成品の可能性もある。端部に両面調整を施す。

165 は須恵器の杯蓋で、外面に稜を持つ。天井部の調整は回転ヘラケズリが施される。

166 は土師器の壺である。

167・169・170 は土師器の甕で、167・169 の口縁部は外反する。170 は外面がハケ、内面が板ナデを施す。

168 は土師器の高杯である。

171 ～ 173 は土師器の甑である。171 は体部から直線的に口縁部に至る器形である。172 は底部であり、中央に孔を有する。173 は把手である。

174 ～ 177 は弥生土器である。174 は壺で、ヘラ描き沈線を巡らす。175 は逆「L」字状口縁の甕で、貼付口縁の接合痕が見られる。176・177 は底部であり、断面に輪積痕がある。

178 ～ 182 は石製品で、石材はすべてサヌカイトである。

178 ～ 181 は石鏃である。178 は凹基式、179･180 は平基式であり、小型である。

182 は異形石器で、下方を欠損する。

SD1002（図 25・26、写真図版 14）

183 ～ 187 は須恵器の杯蓋である。183 は口径 11.2cm で、口縁部は下外方に下り、端部は内傾する平面を成す。外面の稜は僅かである。184 の口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は内傾する平面を成す。外面の稜はやや鋭い。185・186 は口径

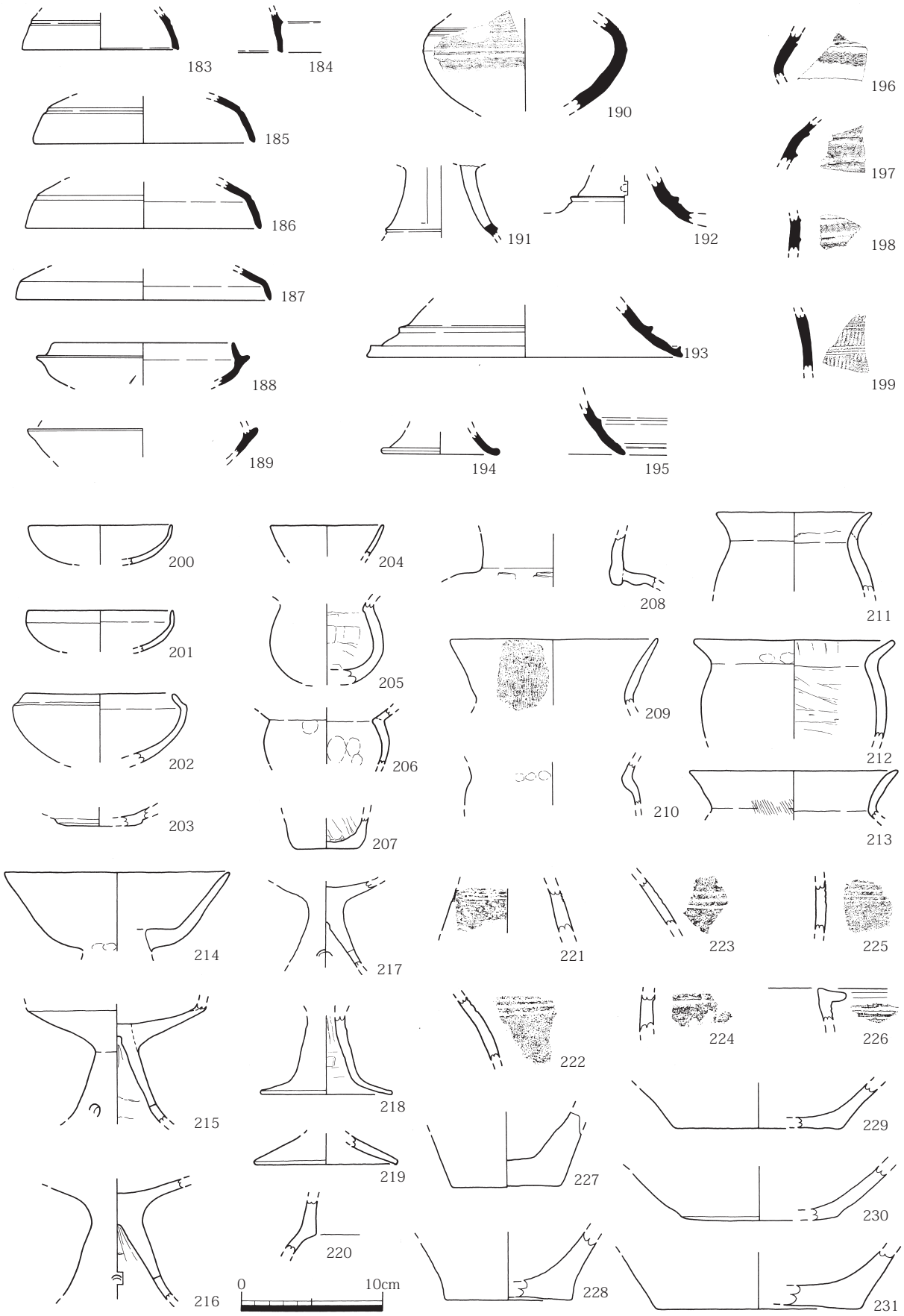


図 25　SD1002 出土遺物実測図①（1/4）

15.6cm と 16.8cm で、下外方に下り、端部は丸い。187 は口径 18.0cm で、口縁部は短くほぼ垂直に下り、端部は丸い。

188・189 は須恵器の杯身である。188 は口径 12.8cm で、立ち上がり高は 1.0cm である。受部は水平に延びる。体部外面にヘラ記号が見られる。189 は受部が外上方に延びる。

190 は須恵器の甕で、やや扁平な球形を成し、体部中央に僅かな突帯を廻らせ、沈線との間に波状文を施す。

191 ～ 195 は須恵器の高杯脚部である。191 は方形の透かしを三方向に有する。杯部との接合痕が残る。192 は突帯を有し、円形の透かしの一部が残存する。193 は底径 22.2cm の大型の高杯で、突帯を有し、裾端部は上方に細く拡張する。内面には自然釉が部分的にかかる。194 は底径 8.2cm の小型であり、裾端部は丸く収まる。195 は断面三角形と方形の突帯を廻らす。

196 ～ 199 は須恵器の壺である。196 ～ 198 は低い突帯を廻らせ、その間に波状文を施す。196 は内面に自然釉がかかる。

200 ～ 203 は土師器の杯である。174 は口径 10.0cm で、浅い半球形の体部からそのまま口縁に至る。201 は口径 10.2cm で、浅い半球形の体部から口縁部は僅かな段を持って垂直に立ち上がる。202 は口径 10.6cm、器高 4.9cm 以上で、体部は半球形を成し、口縁部は段を持って内傾する。203 は底径 6.1cm の底部である。

204 ～ 207 は土師器の小型丸底壺である。204 はやや内湾気味の口縁部であり、器厚が薄い。205 は体部の最大径が中位よりやや下にあり、やや下膨れする器形である。器厚は厚い。206 は球形の体部から口縁部が強く屈折して外反する。口縁部と体部の境に接合痕が残る。207 は底部が平底である。

208 は土師器の壺であり、肩の張る体部から口縁部が直立する。体部外面にヘラの押圧痕が残り、口縁部と体部の境に接合痕がある。

209 ～ 213 は土師器の甕である。209 は長い口縁部が直線的に外反し、外面の調整は縦方向のハケが施される。211 ～ 213 は短い口縁部が外反する。211 は口縁部内面に輪積痕が残る。212 の口縁部内面にはヘラの押圧痕が見られ、体部内面はヘラケズリが施される。

214 ～ 219 は土師器の高杯で、214 は杯部、215 ～ 217 は杯部と脚部の接合部、218・219 は脚部である。214 は外面に僅かな稜を持って立ち上がり、そのまま口縁部に至る。脚部との接合痕が明瞭である。215 は杯部外面に明瞭な稜を持ち、その部分に接合痕を残す。脚部は円孔３個を有し、杯部との接合痕が明瞭である。216 は脚部に円孔１個のみ残存する。217 は脚部に円孔２個が残存する。218 は脚裾部が大きく外方に広がる。

220 は土師器の壺で、段を持ち立ち上がる。

221 ～ 223 は弥生土器の壺であり、外面にヘラ描き沈線が施される。

224 ～ 226 は弥生土器の甕である。224 は外面に削り出し突帯、225 はヘラ描き沈線が施される。226 は逆「L」字状口縁であり、口縁部の下にヘラ描き沈線が施される。

227 ～ 231 は弥生土器の底部である。227 は断面に輪積痕が見られ、228 は外面に黒斑がある。

232 ～ 251 は石製品である。232 ～ 243 は石鏃、244 は石錐、245 はスクレイパー、246・247 は微細剥離痕のある剥片、248 は石製模造品、249 は石棒、250 は用途不明の石製品、251 は砥石である。232 ～ 248 の石材はサヌカイトである。

232・233 は凹基式、234 ～ 237 は平基式、238 は凸基式、239 ～ 243 は石鏃未成品である。232 ～ 234 は小型であり、側面は両面からの調整が施される。235・236 は両面からの細かな調整が施される。237・238 は細長い形状で、両面からの細かな調整が施される。239 は表面からの調整が施される。240 は風化が著しい。243 は二次加工のある剥片である可能性も考えられる。

244 は両面からの細かな調整が施され、上部側面は自然面である。

245 は刃部を両面から調整するが、表面からの調整が強い。

246・247 は 1 面からの調整が施される。

248 は石剣の可能性があり、現存長 2.9cm、幅 1.5cm、厚さ 0.4cm であり、全面に擦痕が見られる。直径 2mm の孔は両面から穿孔される。

249 は石棒の破片であり、石材は結晶片岩。

250 は珪化木であり、用途は不明である。

251 は表面と裏面に使用痕が見られ、石材は流紋岩である。石の磨耗状態から判断して砥石の中央付近と考えられる。

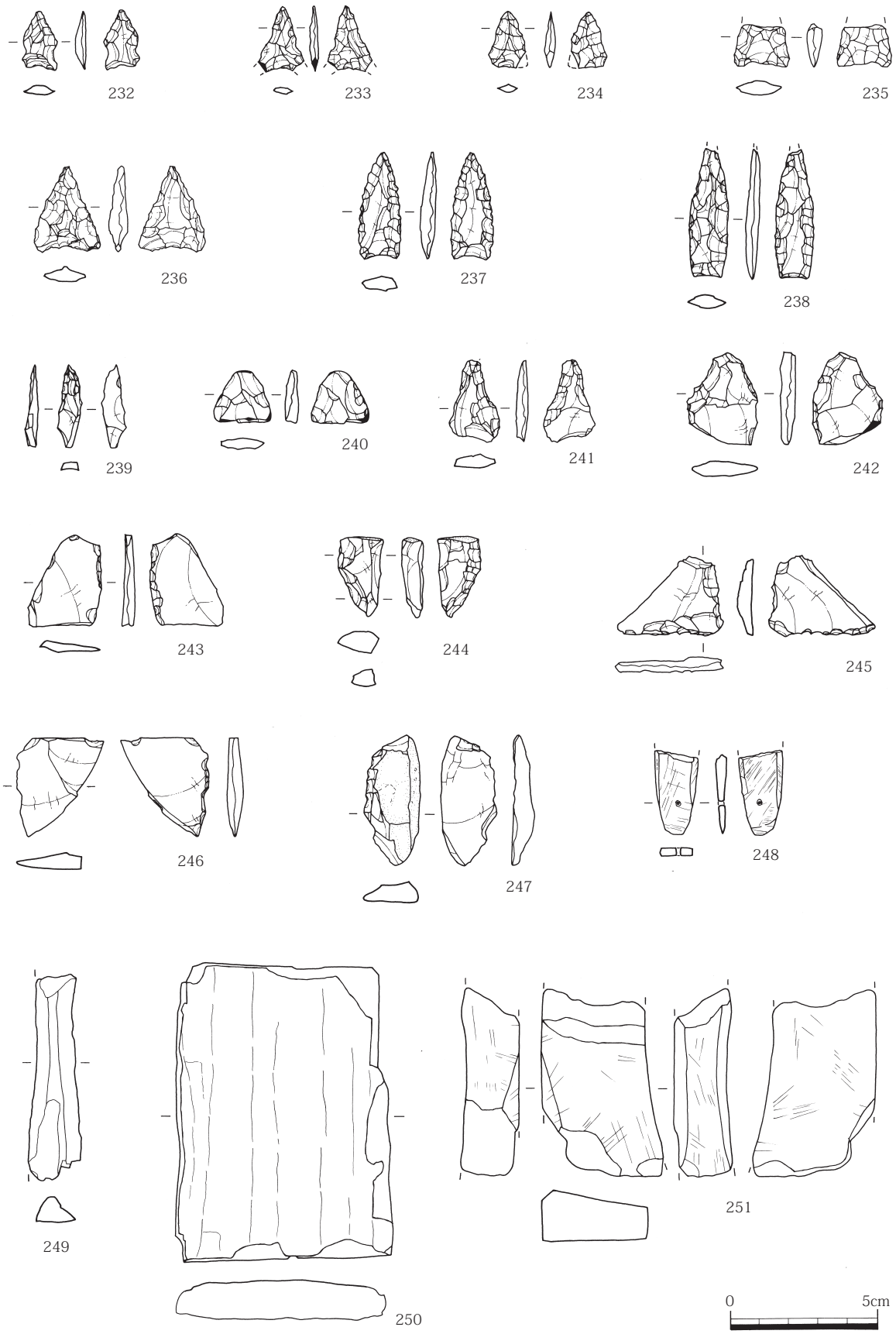


図 26　SD1002 出土遺物実測図②（1/2）

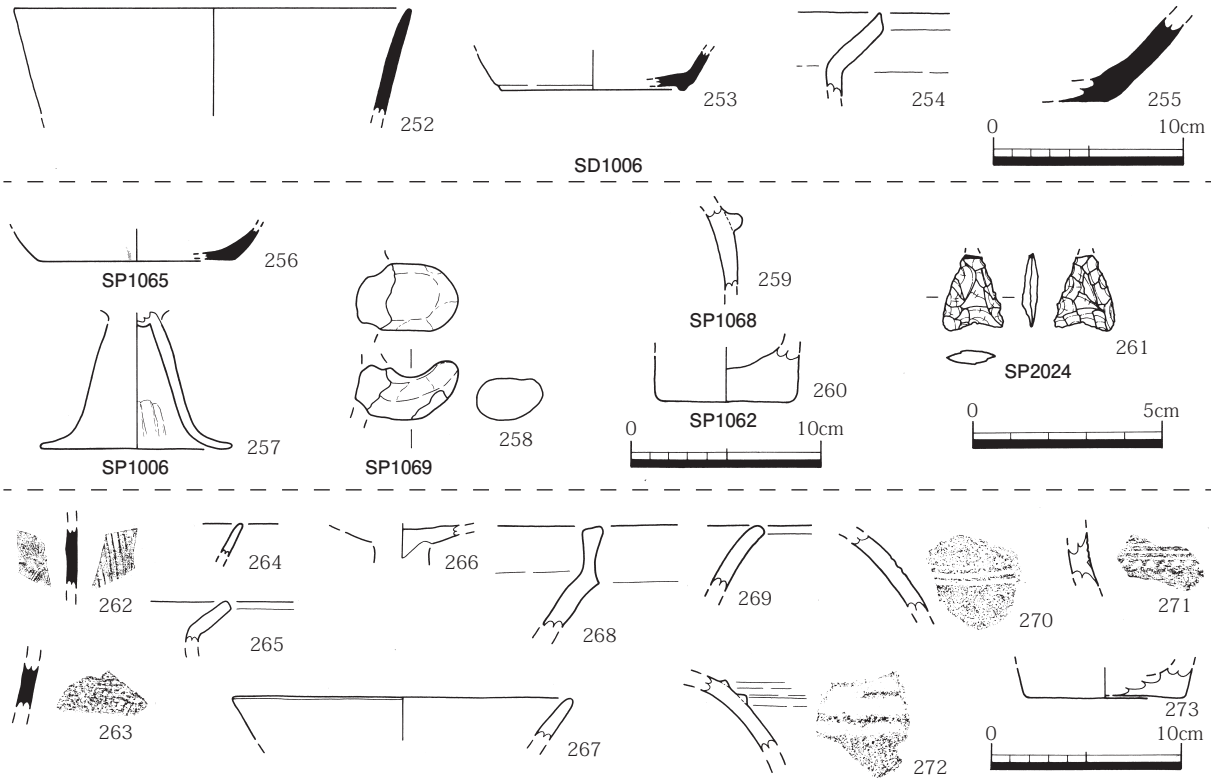


図 27　第１・２遺構面出土遺物実測図（1/4・1/2）

SD1006（図 27）

252 は須恵器の壺で、直線的に外反する。

253 は須恵器の杯で、低い高台が付く。

254 は土師質土器の鍋である。

255 は須恵器の底部である。

ピット

SP1065（図 27）

256 は須恵器の杯で、体部から底部にかけて火襷が見られる。

SP1006（図 27）

257 は土師器の高杯で、脚裾部は短く外方に広がる。杯部との接合面が明確に残る。

SP1069（図 27）

258 は土師器の甑の把手である。

SP1068（図 27）

259 は土師質土器の鍋である。

SP1062（図 27）

260 は弥生土器の底部である。

SP2024（図 27）

261 は凹基式石鏃で、石材はサヌカイトである。先端部を欠損する。

近世以降の溝（鋤跡）（図 27）

262・263 は須恵器の甕である。

264・265・267 は土師器の甕である。

266 は土師器の高杯で、脚部との接合痕が明瞭である。

268 は土師質土器の鍋である。

269 は弥生土器の甕である。

270 ～ 272 は弥生土器の壺である。270 はヘラ描き沈線、271 はヘラ描き沈線と刺突文を施し、272 は２条の貼付突帯を有する。

273 は弥生土器の底部である。

第１遺構面出土（図 28）

274 ～ 276 は須恵器に杯蓋である。274・276 は口縁部がほぼ垂直に下り、端部は内傾する浅い段を成し、稜は鋭い。275 は扁平な擬宝珠様のつまみを付す。

277 は須恵器の短頸壺である。

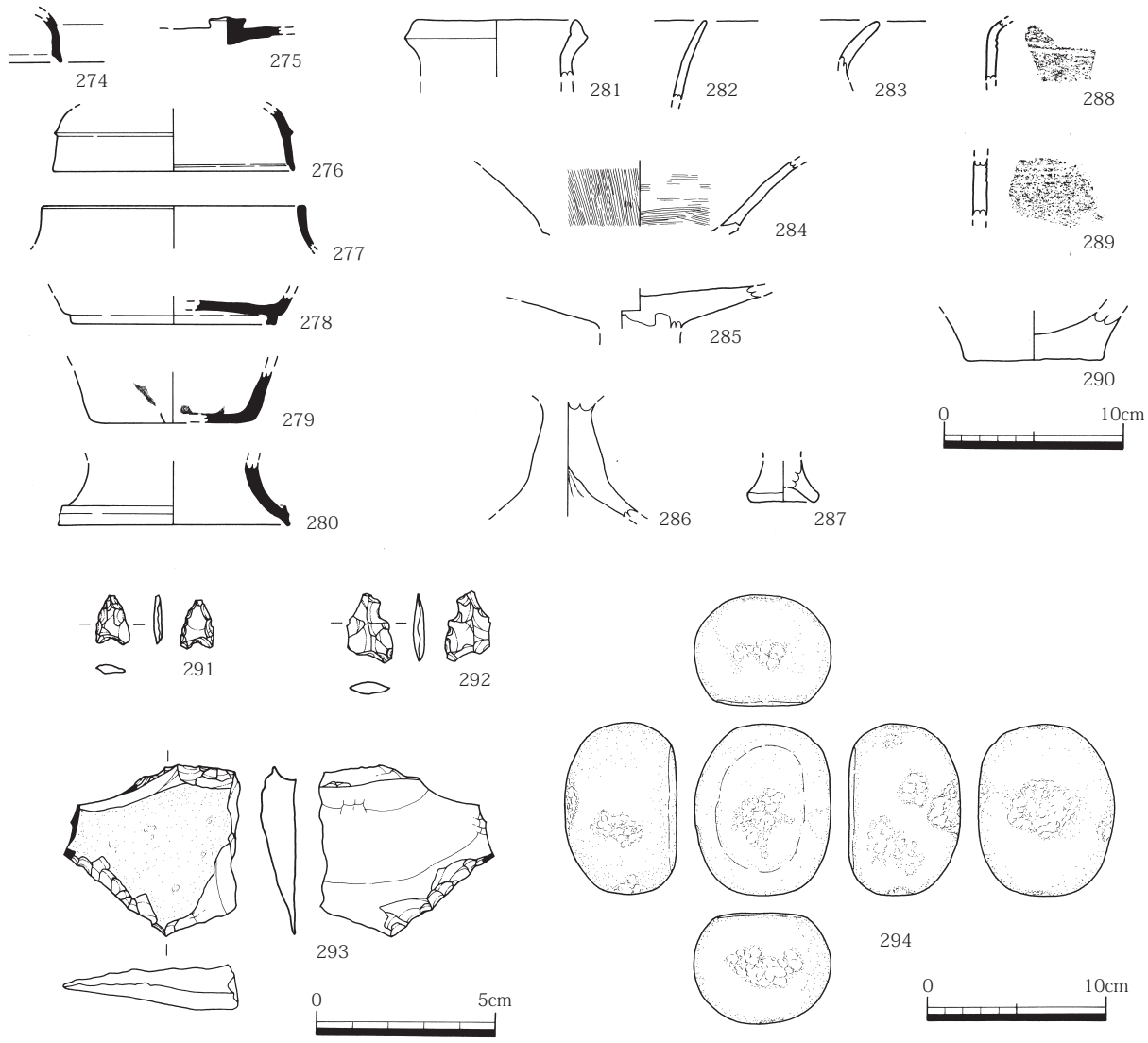


図 28　第 1 遺構面出土遺物実測図（1/4・1/2）

278・279 は須恵器の杯である。278 は断面方形の高台が付き、底部内面が非常に滑らかであることから、硯の可能性も考えられる。279 は内外面に火襷がある。

280 は須恵器の高杯である。

281・282 は土師器の壺である。

283 は土師器の甕である。

284 ～ 286 は土師器の高杯である。284 は内外面にハケが施され、段部分の接合痕が明瞭である。285 は脚部との接合痕が明瞭である。

287 は土師器の製塩土器の脚部である。

288・289 は弥生土器の甕で、ヘラ描き沈線が施される。288 は如意状口縁である。

290 は弥生土器の底部である。

291 ～ 294 は石製品である。291・292 は石鏃、293 はスクレイパー、294 は敲き石である。

291･292 は凹基式で、石材はサヌカイトである。小型で、両面からの細かな調整が施される。

293 は刃部に両面からの調整が施され、表面に自然面を残す。石材はサヌカイトである。

294 は砂岩製で、あばた状の敲打痕がある。

註・引用文献

1）マイケル R. ウォーターズ 2012『ジオアーケオロジー － 地学に基づく考古学 －』朝倉書店

参考文献

平井　勝 1991『弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社

第４章　総括

第１節　事業地周辺の堆積環境

事業地は扇状地上に位置するものの、東側の旧河道や西側の開析谷の存在から、複数の要因からなる堆積作用の影響を受け得る位置にあったことを第３章第２節で述べた。合わせて、事業地内で確認した自然流路が、調査区内の層序の形成に影響を与えた可能性も指摘した。具体的には、基本層序Ⅱ層の形成には、調査区内で検出した南へ屈曲する流路Ａが関連していることを、破堤堆積物とみられる堆積物の観察所見から推定した。

この点を念頭とした現地での検証を行っていないため、層序の形成要因の検討は推定の域を出るものではないが、少なくとも事業地周辺では自然流路と層序の関係を的確に把握し、かつ周辺の堆積物の状況を詳細に観察することで、遺跡が形成された場所の地形形成過程をより鮮明に描くことが可能となるだろう。

第２節　主な遺構・遺物について

今回の調査では、主に弥生時代前期・後期、古墳時代前期・後期、古代の遺構・遺物を検出した。なお、弥生時代の遺物のみが出土した遺構は認められなかった。遺構は集落に関連したものが大半だが、一部で当地の条里施工を検討する場合の手掛かりとなりうる遺構も認められた。

ここでは、調査で明らかになった本遺跡の主要な土地利用の時期と言える古墳時代と古代に分けて、土地利用の状況をまとめる。

ａ　古墳時代の主な遺構と土地利用の状況

古墳時代のなかで帰属時期が明確な遺構としては、古墳時代前期の土坑（SK1001・1002）と後期の溝（SD1001・1002）が挙げられる。

古墳時代前期の遺構としては、地形的に高い調査区南西側で、土器が大量に出土した土坑が複数認められた（SK1001・1002）。出土遺物から、双方は古墳時代前期後葉に帰属する遺構と考えられる。

これらの土坑で特徴的だったのが、双方の土坑と、これ以外に形状や土質等が類似する周辺の複数の土坑（SK1003 ～ 1005）も含めて、土坑の形成時にすでに埋没している流路Ａ上に掘削されているという点である（図 7）。実際に、これらの土坑を調査している際にも豊富な湧水量があることを確認している。偶然、埋没した自然流路上に土坑が掘削された可能性も考えられるが、西南側に隣接する浄化槽設置箇所の調査区では、遺構の基盤となるのが当地の地山（基本層序Ⅳ層）であり、そこで土坑が認められない点を考慮すると、地下水位の高い埋没した自然流路上を狙って意図的に掘削した遺構である可能性も十分考えられる。このように考えると、これらの遺構は地下水の獲得を目的に掘削された井戸である可能性も考慮すべきかもしれない。なお、東側に隣接する県埋蔵文化財センター調査区の北側でも、埋没した自然流路上に、古墳時代前期後葉の遺物を含む井戸（SE101）などが掘削されている[1)]。これを本調査地との類似性と見るならば、本集落では埋没した自然流路上を狙って、各所で井戸を掘削していた可能性も想定できる。この点は、本遺跡の古墳時代前期後葉の集落のあり方を知る、ひとつの手掛かりとなるだろう。

なお、本調査地の SK1001・1002 から出土した土器については、双方の土坑とも土器を意図的に配置したような出土状況であったことから、集落の不用品を単純に廃棄したような状態ではないと考えられる。また、他の遺構で異なる時期の遺物が混在して出土したのに対して、双方の土坑では異なる時期の遺物が少ないという点も指摘できる。前述の遺構の解釈と合わせて考えると、土坑の廃絶時に土器を埋納する行為を行っていた可能性がある点と、出土層位から見ても遺物の一括性が高い点の双方を指摘できる。

次に、古墳時代後期の遺構で特徴的だったのが、SD1001・1002 である。このうち、微高地と低地部の境界付近に開削された SD1001 は、幅 2.5 ～ 4.4 m、検出面からの最大深度が約 1.5 m と、同時期の遺構と考えられる SD1002 の規模と比較しても、突出した規模と言える。双方から出土した遺物は、弥生時代の土器や古墳時代中期末・後期後葉の遺物等、相当の時間幅がある。最も新しい遺物から、古墳時代後期後葉の溝と考えられる。

SD1001 下層の層相を観察したところ、この溝に流水があったことが推定できる。地形の変換点付近に位置することや堆積状況・規模などから、基幹水路としての役割を担った溝である可能性が推定できる。残念ながら、他に同時期と明確に位置づけられる遺構が存在しないため、この時期の集落の様子を詳細に述べることはできない。

以上、古墳時代の特徴的な遺構について述べたが、

川島本町遺跡では、少なくとも古墳時代でも２時期の土地利用があったことが分かる。各時期の遺構数が少なく集落の具体的な様子は推測しがたいが、事業地内で竪穴建物跡を確認できなかったことから、集落の中心となる居住域は別の地点にある可能性が考えられる。ただし､層序と遺構の関係を見た場合、流路Ａの埋没後に古墳時代前期後葉の土坑が形成されることから、流路Ａの埋没は古墳時代前期後葉までには果されたと言える。この流路Ａは基本層序Ⅱ層の供給源となった可能性もある点を考慮すると、当地において自然流路の埋没が果される、すなわち氾濫低地での上方付加が不活発となる古墳時代前期後葉以降に、集落としての活動が本格化すると見ることもできる。基本層序のⅡ層直下で検出できる第２遺構面の遺構からは、帰属時期を推定できる遺物がほとんど出土していないが、この点も踏まえて考えると、事業地周辺の地形としての安定化の時期を古墳時代前期後葉頃と見ることには、一定の蓋然性があると言えるだろう。

なお、SD1001・1002 などから古墳時代中期末の遺物も一定数出土している点は留意する必要がある。あるいは SD1001・1002 の開削時期を示す遺物の可能性もあるが、少なくとも調査地とその周辺で古墳時代中期末にも一定程度の人的活動があったことを見込める点は、本遺跡を理解する場合に看過できない事象と言える。

ｂ 古代の主な遺構

古代の主な遺構としては、事業地東端の第１遺構面で検出した SD1006 が重要である。位置関係から、県埋蔵文化財センター調査区の SD110 と同一の溝と考えられる 2)。この南北溝は、周辺に遺存する条里地割の方位とほぼ一致する。SD1006 からは古代に帰属する遺物が出土し、それよりも新しい遺物は見られないことから、溝の形成時期のひとつの可能性として古代が想定される。このように考えると、少なくとも条里に対応する方向の溝が、古代の段階で形成されたという点が推定できる。出土遺物が少ないため詳細な時期比定は困難であるが、さらに周辺での調査成果の蓄積を待って、溝の開削時期や当地における条里施工の時期を検討すべきと考えられる。

註・引用文献

1）香川県埋蔵文化財センター（編）2007『県道高松善通寺線道路改修事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　田村遺跡Ⅱ 川島本町遺跡 川島本町南遺跡』香川県教育委員会

2）註 1）前掲

遺構・遺物観察表

表３　ピット一覧表

遺構番号	平面形	法量（cm）			遺物
		長軸	短軸	深さ	
第1遺構面					
SP1001	円形	37	36	16	×
SP1002	円形	43	40	19	×
SP1003	円形	33	31	18	×
SP1004	円形	28	24	16	×
SP1005	円形	43	37	26	×
SP1006	円形	36	28	21	×
SP1007	円形	43	40	19	×
SP1008	円形	37	30	13	×
SP1009	円形	25	24	14	×
SP1010	円形	24	20	15	×
SP1011	円形	47	32	20	×
SP1012	円形	34	28	12	×
SP1013	円形	36	26	22	×
欠番	－	－	－	－	－
SP1015	楕円形	35	20	13	×
SP1016	円形	50	44	20	×
欠番	－	－	－	－	－
SP1018	円形	26	14	14	×
SP1019	円形	31	25	9	×
SP1020	円形	26	25	14	×
SP1021	円形	30	23	12	×
SP1022	円形	43	38	18	×
SP1023	円形	31	30	14	×
SP1024	円形	20	17	9	×
SP1025	楕円形	45	27	11	×
SP1026	楕円形	41	－	16	×
SP1027	長方形	57	43	11	×
SP1028	円形	41	31	9	×
SP1029	半円形	26	－	8	×
SP1030	円形	15	14	10	×
SP1031	円形	23	26	12	×
SP1032	円形	35	34	15	×
SP1033	円形	28	26	8	×
SP1034	正方形	32	24	15	×
欠番	－	－	－	－	－
SP1036	円形	34	30	10	×
SP1037	円形	26	25	6	×
SP1038	円形	32	30	20	×
欠番	－	－	－	－	－
SP1040	円形	29	23	14	×
SP1041	円形	26	21	26	×
SP1042	楕円形	31	23	18	×
SP1043	楕円形	41	29	13	×
SP1044	円形	36	34	17	×
欠番	－	－	－	－	－
SP1046	円形	38	25	8	×
SP1047	円形	40	26	8	×
SP1048	円形	42	41	5	×
SP1049	円形	40	37	15	×
SP1050	不整円形	33	－	16	×
SP1051	円形	39	38	11	×
SP1052	円形	52	46	19	×
SP1053	円形	22	20	11	×
SP1054	円形	20	20	11	×
SP1055	円形	20	20	11	×
SP1056	円形	15	12	19	×
SP1057	円形	13	10	14	×
SP1058	円形	18	14	6	×
SP1072	円形	23	18	9	×
SP1059	円形	32	30	22	×
SP1060	楕円形	48	36	14	×
SP1061	円形	30	23	11	×
SP1062	円形	15	16	－	○
SP1063	円形	14	12	9	×
SP1064	円形	11	9	11	×
SP1065	円形	18	16	24	○
SP1066	円形	16	13	17	×
SP1067	円形	13	9	17	○
SP1068	円形	22	18	16	×
SP1069	円形	22	18	34	×
SP1070	円形	25	22	25	×
SP1071	円形	20	18	37	×

遺構番号	平面形	法量（cm）			遺物
		長軸	短軸	深さ	
第2遺構面					
SP2001	円形	36	28	16	×
SP2002	円形	40	25	24	×
SP2003	円形	50	43	14	×
SP2004	円形	28	22	24	×
SP2005	円形	40	12	12	×
SP2006	円形	28	22	9	×
SP2007	円形	17	16	6	×
SP2008	隅丸長方形	40	25	9	×
SP2009	楕円形	35	26	7	×
SP2010	隅丸長方形	32	21	8	×
SP2011	隅丸三角形	29	22	4	×
SP2012	不整方形	35	27	8	×
SP2013	不整円形	36	27	8	×
SP2014	円形	24	18	－	×
SP2015	不整円形	25	16	7	×
SP2016	円形	17	12	6	×
SP2017	円形	18	16	10	×
SP2018	円形	18	17	8	×
SP2019	円形	21	16	8	×
SP2020	円形	14	10	4	×
SP2021	円形	25	17	8	×
SP2022	不整楕円形	33	24	13	×
SP2023	円形	14	8	6	×
SP2024	隅丸三角形	51	41	21	○
SP2025	円形	18	14	5	○
SP2026	楕円形	13	9	15	×
SP2027	楕円形	38	34	11	×
SP2028	－	30	18	7	×
SP2029	円形	16	10	7	×
SP2030	楕円形	51	36	8	×
欠番	－	－	－	－	－
欠番	－	－	－	－	－
SP2033	円形	18	15	12	×
SP2034	楕円形	53	30	12	×
SP2035	楕円形	40	26	6	×
SP2036	不整円形	36	31	19	×
SP2037	円形	14	13	9	×
SP2038	円形	18	15	8	×
SP2039	円形	25	20	7	×
SP2040	円形	16	15	9	×
SP2041	楕円形	40	29	8	×
SP2042	円形	15	12	6	×
SP2043	円形	56	－	15	×
SP2044	円形	30	22	8	×
SP2045	円形	30	22	13	×

表４　土器観察表（1）

報文番号	遺構名 層位名	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	焼成	備考
1	SK1001	土師器	小型丸底壺	－	3.0	〔6.1〕	ヘラナデ、ナデ	指頭圧痕のちナデ、ナデ、ヘラナデ	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙	4mm以下の長石・石英、1mm以下の赤色粒	良	外面に黒斑 外面にヘラの痕
2	SK1001	土師器	小型丸底壺	8.2	－	8.3	ヨコナデ、ナデ	ナデ、指オサエ後にナデ	5YR5/6明赤褐	5YR6/8橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒	良	外面に黒斑
3	SK1001	土師器	小型丸底壺	8.9	－	7.9	ナデ、指オサエ後ナデ、	ナデ、ヘラナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	0.1～2mmの石英・長石・赤色粒	良	外面に黒斑
4	SK1001	土師器	甕	11.3	－	14.5	ナデ	ナデ、ヘラ削り、指オサエ	10R6/6赤橙	10YR8/2灰白	8～1mmの石英・小石、0.5mm以下の白色粒	良	体部に孔 外面に煤付着
5	SK1001	土師器	甕	12.6	－	13.5	ヨコナデ、ナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ナデ、ヘラ削り	7.5YR5/1褐灰	7.5YR4/1褐灰	2～1mmの石英、0.5mm以下の白色粒	良	外面に煤付着
6	SK1001	土師器	甕	12.0	－	22.5	板ナデ後にナデ、板ナデ、ハケ、ナデ	ナデ、絞り目、ヘラ削り、ナデ	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/2明褐灰	0.5mm以下の白色粒・茶色粒	良	体部外面上半に剥離 外面下半に煤付着
7	SK1001	土師器	甕	(14.8)	－	26.8	ナデ、板ナデ	ナデ、指オサエ、ヘラ削り	7.5YR7/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	0.5mm以下の白色粒・赤色粒・黒色粒	良	体部上半外面は剥離 外面に煤付着
8	SK1001	土師器	壺	(10.4)	－	〔17.7〕	ヨコナデ、ハケ後にナデ、ハケ	ヨコナデ、ナデ、ヘラ削り、指オサエ	2.5YR7/6橙	10YR8/2灰白	3mmの石英・白色粒・黒色粒	良	外面に黒斑（全体の1/4） 吉備系？
9	SK1001	土師器	高杯	(16.6)	－	〔3.3〕	ナデ、摩滅	ナデ後にヘラミガキ	2.5Y6/1黄灰	10YR5/3にぶい黄褐	赤色粒・長石	良	
10	SK1001	土師器	高杯	－	12.4	〔7.1〕	ナデ	ナデ、ヘラ削り、絞り目	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	1～2mmの石英、0.5mm以下の白色粒・赤色粒	良	
11	SK1001	土師器	高杯	－	－	7.3	ナデ、ヨコナデ	絞り目	10YR7/2にぶい黄橙	2.5Y7/2灰黄	2mm以下の石英・長石	良	接合痕
12	SK1001	弥生土器	壺	－	－	〔2.8〕	ヘラ描き沈線4条、刺突文、山形文	摩滅	7.5YR6/3にぶい褐	10YR8/2灰白	2mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒	良	
13	SK1001	弥生土器	（底部）	－	(7.6)	〔2.2〕	ナデ	摩滅	10YR5/1褐灰	2.5Y8/1灰白	2mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒多量	良	
14	SK1001	弥生土器	（底部）	－	(6.6)	〔2.8〕	ナデ	指オサエ後にナデ	5YR5/6明赤褐	10YR6/4にぶい黄橙	5mm以下の石英・長石	良	
18	SK1002	土師器	小型鉢	7.2	4.3	5.1	ナデ、指オサエ後にナデ	ナデ、指オサエ、指ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y7/2灰黄	3mm以下の石英・長石	良	内外に黒斑
19	SK1002（上層）	土師器	小型丸底壺	(7.6)	－	〔5.1〕	ナデ、板ナデ	ナデ、板ナデ	10YR4/4褐	10YR4/2灰黄褐	0.5mm以下の白色粒・金雲母	良	
20	SK1002	土師器	小型丸底壺	(7.4)	－	〔8.1〕	指オサエ後にヨコナデ、指オサエ後にナデ	指オサエ後にヨコナデ、指オサエ後にナデ、指ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/2灰黄	1～4mmの石英・小石、0.5mm以下の白色粒	良	内面に輪積痕
21	SK1002	土師器	小型丸底壺	(7.7)	－	〔7.0〕	横方向のナデ、ナデ、板ナデ	横方向のナデ、ナデ、板ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	0.1～3mmの石英・長石	良	内面に輪積痕
22	SK1002	土師器	小型丸底壺	－	－	〔6.9〕	ナデ、指オサエ、ヘラナデ	ナデ、指オサエ	2.5Y6/2灰黄	10YR2/1黒	3mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒	良	内面に輪積痕
23	SK1002	土師器	小型丸底壺	(9.8)	－	〔5.8〕	指オサエ後にヨコナデ、ナデ	ナデ、指ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	0.1～4mmの白色小石・白色粒	良	内外面に輪積痕、内外面に黒斑
24	SK1002（上層）	土師器	小型丸底壺	(9.2)	－	〔4.3〕	摩滅	摩滅	2.5YR6/8橙	10YR8/1灰白	5～0.1mmの石英・長石・赤色粒	良	
25	SK1002	土師器	小型丸底壺	(9.0)	－	9.9	摩滅	ナデ、ヘラミガキ、摩滅	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	4mm以下の石英・長石、2mm以下の赤色粒	良	外面に黒斑
26	SK1002（上層）	土師器	壺	(13.0)	－	〔2.8〕	ナデ	ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	1mm以下の白色粒・黒色粒・茶色粒	良	外面に黒斑
27	SK1002（上層）	土師器	甕	(9.0)	－	〔5.2〕	摩滅（部分的に指オサエ）	摩滅（ヘラナデが残存）	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	3mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒	良	
28	SK1002	弥生土器	甕	－	－	〔8.9〕	ハケ、ナデ	指ナデ、指オサエ	2.5Y8/1灰白	2.5Y8/1灰白	3mmの石英,、0.5mm以下の白色粒	良	内面に輪積痕
29	SK1002	土師器	甕	(14.0)	－	〔6.7〕	摩滅	摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	5Y4/1灰	1mm以下の白色粒・赤色粒	良	外面に黒斑
30	SK1002（下層）	土師器	甕	－	－	〔6.6〕	ヨコナデ、板ナデ	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR6/1褐灰	1～3mmの白色小石、0.5mm以下の石英・白色粒	良	
31	SK1002	土師器	甕	12.6	－	23.8	摩滅	ヘラナデ、ナデ、指オサエ、指ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	1～3mmの石英、0.5mm以下の白色粒・赤色粒	良	孔2箇所 黒斑、輪積痕
32	SK1002	土師器	甕	(12.7)	－	〔18.9〕	摩滅（一部に板ナデ残存）	摩滅（一部に指オサエ）	10YR7/2にぶい黄橙	10YR6/1褐灰	1～5mmの石英、0.5mm以下の白色粒	良	輪積痕
33	SK1002	土師器	甕	(14.0)	－	〔18.3〕	ヨコナデ、板ナデ、ナデ	ナデ、摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/2灰白	1～4mmの石英、赤色小石、0.5mm以下の白色粒	良	
34	SK1002	土師器	甕	(14.0)	－	20.0	摩滅（一部にハケ、ナデ）	指オサエ後にナデ、摩滅（一部にヘラ削り）	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	3mm以下の石英・長石・赤色粒	良	外面に黒斑 孔
35	SK1002	土師器	高杯	17.4	(12.2)	11.9	ナデ、縦方向のナデ	ナデ、絞り目	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒	良	内外面に煤付着 工具痕、接合痕
36	SK1002（下層）	土師器	高杯	－	－	〔6.6〕	摩滅（一部にナデ残存）	ナデ、未調整	10YR8/2灰白	7.5YR8/3浅黄橙	4mmの小石、0.5mm以下の白色粒	良	
37	SK1002	土師器	高杯	－	－	〔7.5〕	縦方向のナデ、摩滅	摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	3mmの石英,、0.5mm以下の白色粒・茶色粒	良	
38	SK1002（上層）	土師器	高杯	－	－	〔7.7〕	ナデ	ナデ、絞り目	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	3mm以下の石英・長石	良	
39	SK1002	土師器	高杯	－	－	〔5.1〕	ナデ	絞り目、縦方向のヘラ削り、ナデ	7.5YR6/2灰褐	7.5YR6/2灰褐	1mm以下の白色粒	良	

土器観察表 (2)

報文番号	遺構名 層位名	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	焼成	備考
40	SK1002 (下層)	土師器	高杯	－	－	〔8.4〕	摩滅	摩滅、ヘラ痕	5YR6/8橙	5YR8/4淡橙	3mm以下の石英・長石多量	良	
41	SK1002 (上層)	土師器	高杯	－	－	〔6.8〕	ナデ	ナデ、ヘラ削り後にナデ	2.5YR5/6明赤褐	7.5YR6/1褐灰	0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
42	SK1002	土師器	高杯	－	(11.8)	〔2.1〕	摩滅	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	2mm以下の石英・長石	良	
43	SK1002 (下層)	土師器	高杯	－	(13.4)	〔4.3〕	ナデ	ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	1～4mmの石英、0.5mm以下の白色粒	良	内面に黒斑
44	SK1002 (上層)	土師器	高杯	－	(17.7)	〔2.5〕	摩滅、ナデ	摩滅	5YR6/6橙	5YR7/4にぶい橙	3mm以下の石英・長石	良	接合痕
45	SK1002 (下層)	土師器	製塩土器	－	(5.0)	〔2.4〕	摩滅	摩滅	5YR6/6橙	5YR7/4にぶい橙	1～5mmの石英・茶色粒、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
46	SK1002 (上層)	弥生土器	壺	－	－	〔1.5〕	刻み目、ナデ	貼付突帯、ナデ	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	2mm以下の長石・石英	良	
47	SK1002 (上層)	弥生土器	甕	－	－	〔1.9〕	ナデ、刻み目、櫛描直線文	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR7/4にぶい黄橙	2mm以下の長石・石英	良	
48	SK1002 (上層)	弥生土器	甕	－	－	〔2.0〕	摩滅、刻み目、ヘラ描き沈線２条	摩滅	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/3にぶい褐	1～2mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
49	SK1002	弥生土器	甕	－	－	〔2.5〕	摩滅、刻み目	ナデ	5YR6/6橙	5YR7/6橙	4mm以下の石英・長石・黒色粒	良	
50	SK1002 (上層)	弥生土器	甕	－	－	〔2.5〕	摩滅、ヘラ描き沈線２条	摩滅	7.5YR7/6橙	2.5Y8/2灰白	2mm以下の石英・白色粒・茶色粒	良	
51	SK1002 (上層)	弥生土器	(底部)	－	－	〔2.3〕	ナデ、摩滅	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR3/1黒褐	5mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒	良	黒斑
56	SK1004・1005 (上層)	土師器	壺	(13.6)	－	〔7.4〕	摩滅	摩滅（ヘラナデ残存）	5YR6/6橙	2.5Y7/2灰黄	1～5mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒・赤色粒	良	
57	SK1004・1005	土師器	甕	(16.1)	－	〔7.7〕	ヨコナデ、摩滅	ヘラナデ、摩滅	10YR7/2にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	1～5mmの小石粒、0.5mm以下の白色粒多量	良	
58	SK1004・1005	土師器	甕	(19.4)	－	〔31.3〕	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、指オサエ、ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR6/6橙	1mm以下の石英・長石	良	内面に輪積痕
59	SK1004・1005 (上層)	土師器	甕	－	－	〔18.0〕	ハケ	指オサエ、指ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒	良	
60	SK1004・1005	土師器	高杯	(14.2)	－	〔5.6〕	摩滅	ナデ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR8/2灰白	2mm以下の石英・金雲母・白色粒多量	良	接合痕
61	SK1004・1005	土師器	高杯	－	－	〔2.4〕	ナデ	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	5YR7/6橙	0.1～2mmの石英・長石・赤色粒	良	接合痕
62	SK1004・1005	土師器	高杯	－	－	〔5.8〕	摩滅	摩滅	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	1mm以下の白色粒・赤色粒	良	
63	SK1004・1005	土師器	高杯	－	(14.6)	〔2.4〕	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	1mmの石英、0.5mm以下の白色粒・赤色粒少量	良	
64	SK1004・1005	土師器	製塩土器	(13.4)	－	〔4.8〕	ナデ	ナデ、指オサエ	7.5YR7/3にぶい橙	5YR5/6明赤褐	2mm以下の石英、0.5mm以下の白色粒	良	
65	SK1004・1005	弥生土器	(底部)	－	(6.6)	〔4.5〕	ナデ	摩滅	7.5YR8/3浅黄橙	2.5Y8/2灰白	1～2mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
66	SK1004・1005	弥生土器	(底部)	－	(7.8)	〔3.4〕	摩滅	摩滅	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	1～3mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒多量	良	
68	SD1001 上・中層	須恵器	杯蓋	－	－	〔2.5〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	－	良	
69	SD1001 上・中層	須恵器	杯蓋	－	－	〔1.0〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	1mm以下の石英・長石	良	
70	SD1001 上・中層	須恵器	杯身	(11.8)	－	〔4.1〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	－	良	
71	SD1001 上・中層	須恵器	杯身	(11.8)	－	〔4.3〕	回転ナデ、底部回転ヘラ削り	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	白色粒若干	良	
72	SD1001 上・中層	須恵器	杯身	(13.2)	－	〔3.5〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	7.5Y4/1灰	N5/灰	－	良	
73	SD1001 上・中層	須恵器	杯身	(14.0)	－	〔3.5〕	回転ナデ	回転ナデ	5PB6/1青灰	5PB6/1青灰	1mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒	良	
74	SD1001 上・中層	須恵器	杯身	(14.8)	－	〔4.2〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	2～4mmの小石粒、0.5mm以下の白色粒	良	
75	SD1001 上・中層	須恵器	甕	－	－	〔3.7〕	波状文	ナデ	N6/灰	7.5Y4/1灰	1mm以下の白色粒	良	外面に自然釉(暗ｵﾘｰﾌﾞ7.5Y4/3)
76	SD1001 上・中層	須恵器	甕	－	－	〔8.0〕	平行タタキのちナデ	自然釉	N7/灰白	2.5GY4/1暗オリーブ灰	－	良	内面に自然釉
77	SD1001 上・中層	須恵器	高杯	(17.0)	－	〔4.1〕	回転ナデ、波状文	ナデ	N5/灰	2.5Y6/1黄灰	－	良	自然釉
78	SD1001 上・中層	須恵器	高杯	(11.5)	－	〔1.9〕	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N6/灰	－	良	スカシ
79	SD1001 上・中層	須恵器	提瓶	－	－	〔6.8〕	カキ目	ナデ	N7/灰白	N5/灰	－	良	
80	SD1001 上・中層	土師器	小型丸底壺	(8.2)	－	〔6.6〕	ナデ	ナデ、ヘラナデ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	1～4mmの小石粒、0.5mm以下の白色粒	良	

土器観察表 (3)

報文番号	遺構名 層位名	種類	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	備考
81	SD1001 上・中層	土師器	小型丸底壺	－	(5.2)	〔1.8〕	指ナデ	摩滅	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	1～3㎜の石英・白色粒・雲母粒	良	
82	SD1001 上・中層	土師器	壺	(4.6)	－	〔4.7〕	ナデ、指オサエ後にナデ	ナデ、摩滅	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	1㎜以下の石英・白色粒・赤色粒・黒色粒	良	
83	SD1001 上・中層	土師器	二重口縁壺	－	－	〔4.0〕	摩滅	摩滅	10YR8/3浅黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	0.5㎜以下の白色粒・黒色粒	良	
84	SD1001 上・中層	土師器	高杯	－	－	〔4.5〕	ナデ、摩滅	摩滅	10YR8/4浅黄橙	10YR7/6明黄褐	1～4㎜の石英少量、0.5㎜以下の白色粒少量	良	
85	SD1001 上・中層	土師器	高杯	－	－	〔2.3〕	ハケ、摩滅	ナデ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	1～3㎜の赤色石・石英、0.5㎜以下の白色粒	良	接合痕
86	SD1001 上・中層	土師器	高杯	－	(15.4)	〔2.3〕	ナデ、ハケ、ハケ後にナデ	ハケ後にナデ	7.5YR8/6浅黄橙	7.5YR7/6橙	1㎜以下の白色粒・黒色粒	良	
87	SD1001 上・中層	土師器	甑	－	－	－	指ナデ、ハケ	指オサエ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR8/2灰白	3㎜以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒	良	
88	SD1001 上・中層	弥生土器	壺	(18.8)	－	〔1.7〕	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	1㎜以下の石英・長石・角閃石	良	
89	SD1001 上・中層	弥生土器	壺	－	－	〔3.2〕	ナデ	ナデ	5YR6/8橙	5YR6/6橙	0.5㎜以下の白色粒少量	良	
90	SD1001 上・中層	弥生土器	壺	－	－	〔2.7〕	ヘラ描き沈線４条、ナデ	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/2灰黄褐	1～3㎜の小石粒、0.5㎜以下の石英・赤色粒	良	
91	SD1001 上・中層	弥生土器	壺	－	－	〔6.4〕	ナデ	ナデ	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	1～3㎜の石英、0.5㎜以下の石英・長石	良	接合痕
92	SD1001 上・中層	弥生土器	甕	－	－	〔3.1〕	ナデ、刻み目	ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	5Y5/1灰	1～5㎜の石英、0.5㎜以下の白色粒少量	良	
93	SD1001 上・中層	弥生土器	甕	－	－	〔1.4〕	刻み目、ヘラ描き沈線２条、摩滅	摩滅	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	2㎜以下の石英・長石	良	
94	SD1001 上・中層	弥生土器	甕	－	－	〔2.0〕	刻み目、ナデ、ヘラ描き沈線５条	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	2～4㎜の小石粒、0.5㎜以下の白色粒	良	
95	SD1001 上・中層	弥生土器	蓋	－	－	〔3.6〕	ナデ	摩滅	10YR6/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	1～3㎜の石英少量、0.5㎜以下の白色粒	良	
96	SD1001 上・中層	弥生土器	(底部)	－	(10.6)	〔7.0〕	摩滅	摩滅	5YR8/4淡橙	10YR8/2灰白	1～3㎜の石英、1㎜以下の白色粒・黒色粒多量	良	
97	SD1001 上・中層	弥生土器	(底部)	－	(15.2)	〔5.8〕	摩滅	摩滅	2.5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	5㎜以下の石英・長石・赤色粒	良	
118	SD1001 下層	須恵器	杯蓋	(12.0)	－	〔2.9〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	－	良	
119	SD1001 下層	須恵器	杯蓋	(14.6)	－	〔4.1〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	7.5YR5/1褐灰	N5/灰	2㎜以下の石英・長石	良	
120	SD1001 下層	須恵器	杯蓋	(15.2)	－	〔3.2〕	回転ナデ(反時計回り)、回転ヘラ削り	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	1㎜以下の白色粒	良	外面部分的に自然釉あり (5y5/1灰)
121	SD1001 下層	須恵器	杯蓋	(16.4)	－	〔2.8〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	－	良	
122	SD1001 下層	須恵器	杯蓋	(10.4)	－	〔4.0〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N5/灰	3㎜以下の長石・赤色粒	良	
123	SD1001 下層	須恵器	杯蓋	－	－	〔2.1〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	－	良	
124	SD1001 下層	須恵器	杯身	(13.4)	－	〔3.0〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	－	良	
125	SD1001 下層	須恵器	杯身	(11.0)	－	〔3.4〕	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	N5/灰	－	良好	
126	SD1001 下層	須恵器	甕	－	－	〔5.5〕	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	0.5㎜以下の白色粒少量	良	
127	SD1001 下層	須恵器	壺	－	－	〔3.1〕	回転ナデ	回転ナデ	10Y5/1灰	7.5Y6/1灰	0.5㎜以下の白色粒・黒色粒	良	内外面に自然釉(オリーブ灰)
128	SD1001 下層	須恵器	壺	－	－	〔4.4〕	回転ナデ、回転ヘラ削り、平行タタキ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	0.5㎜以下の白色粒少量	良	
129	SD1001 下層	土師器	小型丸底壺	－	－	〔5.7〕	摩滅	ナデ、指オサエ	5YR6/6橙	10YR7/3にぶい黄橙	0.5㎜以下の石英・白色粒	良	
130	SD1001 下層	土師器	小型丸底壺	－	2.8	〔1.5〕	ナデ	指オサエ、ナデ	2.5Y5/1黄灰	N4/灰	1㎜の石英、0.5㎜以下の白色粒多量	良	
131	SD1001 下層	土師器	甕	(19.0)	－	〔4.1〕	ナデ	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	1㎜以下の石英・長石	良	
132	SD1001 下層	土師器	甕	(23.2)	－	〔3.5〕	摩滅	摩滅	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	3㎜以下の石英・金雲母・白色粒多量	良	
133	SD1001 下層	土師器	甕	(19.6)	－	〔5.9〕	ナデ	ナデ、ハケ	2.5Y8/4淡黄	5YR5/6明赤褐	1㎜以下の石英・白色粒多量	良	
134	SD1001 下層	土師器	甑	－	－	－	指ナデ	工具痕、指オサエ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	3㎜の石英、1㎜以下の白色粒	良	
135	SD1001 下層	土師器	甑	－	－	－	指ナデ、指オサエ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR2/1黒	3㎜以下の石英・長石	良	
136	SD1001 下層	弥生土器	壺	－	－	〔4.1〕	ヘラ描き沈線、ナデ	ナデ	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙	4㎜以下の石英・長石	良	

土器観察表 (4)

報文番号	遺構名 層位名	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	焼成	備考
137	SD1001 下層	弥生土器	壺	－	－	〔4.8〕	（上に）沈線６条、山形文、（下に）沈線２条	ナデ	N3/暗灰	N3/暗灰	0.1～2mmの石英・長石	良	
138	SD1001 下層	弥生土器	壺	－	－	〔3.1〕	ヘラ描沈線２条、ナデ	摩滅	2.5Y7/3浅黄	10YR8/3浅黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒	良	
139	SD1001 下層	弥生土器	壺	－	－	〔2.8〕	貼り付け突帯、刻み目、ナデ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	2～3mmの石英・小石粒、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
140	SD1001 下層	弥生土器	甕	－	－	〔3.3〕	櫛描直線文16条	摩滅	7.5YR8/6浅黄橙	不明	0.1～2mmの石英・長石	良	
141	SD1001 下層	弥生土器	甕	(23.6)	－	〔3.5〕	ヘラ描き沈線、ナデ	ナデ	2.5Y7/3浅黄	5Y4/3暗オリーブ	2～3mmの石英、0.5mm以下の白色粒	良	
142	SD1001 下層	弥生土器	甕	－	－	〔5.8〕	ナデ	ナデ	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	1mm以下の白色粒・黒色粒少量	良	接合痕
143	SD1001 下層	弥生土器	（底部）	－	(13.6)	〔4.4〕	摩滅	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	5YR7/6橙	4mm以下の石英・長石・赤色粒	良	
165	SD1001	須恵器	杯蓋	－	－	〔2.8〕	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	0.5mm以下の白色粒少量	良	
166	SD1001	土師器	壺	－	－	〔2.8〕	摩滅	摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	1mm以下の白色粒	不良	
167	SD1001	土師器	甕	－	－	〔3.1〕	ヨコナデ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	3mmの石英、1mm以下の白色粒多量	良	
168	SD1001	土師器	高杯	－	－	〔2.4〕	摩滅	摩滅	10YR7/2にぶい黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	5mm以下の石英・赤色粒・黒色粒	良	
169	SD1001	土師器	甕	(17.1)	－	〔4.5〕	ヨコナデ、ナデ、指オサエ	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/3にぶい赤褐	3.5mm以下の石英、0.5mm以下の白色粒多量	良	
170	SD1001	土師器	甕	－	－	〔4.5〕	ハケ	板ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR6/4にぶい橙	2mm以下の石英・赤色粒・黒色粒多量	良	
171	SD1001	土師器	甑	(26.4)	－	〔5.3〕	摩滅	ハケ、ヘラナデ、ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	2.5Y7/3浅黄	3mm以下の長石・石英・赤色粒多量	良	
172	SD1001	土師器	甑	－	－	〔1.2〕	ナデ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	－	良	
173	SD1001	土師器	甑	－	－	－	－	－	7.5YR6/4にぶい橙	－	2mm以下の石英・金雲母・赤色粒・黒色粒多量	良	外面一部に黒斑
174	SD1001	弥生土器	壺	－	－	〔3.5〕	ナデ、ヘラ描沈線６条以上、	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/1灰白	2mm以下の石英・長石	良	
175	SD1001	弥生土器	甕	－	－	〔3.0〕	摩滅	摩滅	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR7/6橙	3mm以下の石英・長石多量	良	接合痕
176	SD1001	弥生土器	（底部）	－	(7.3)	〔3.3〕	ナデ	摩滅	5YR7/4にぶい橙	5Y5/1灰	1～3mmの石英・白色小石多量	良	接合痕
177	SD1001	弥生土器	（底部）	－	(12.8)	〔2.9〕	摩滅	摩滅	2.5Y6/6明黄褐	2.5Y8/3淡黄	5mm以下の石英・白色小石多量	良	
183	SD1002	須恵器	杯蓋	(11.2)	－	〔2.6〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	－	良好	
184	SD1002	須恵器	杯蓋	－	－	〔2.8〕	回転ナデ	回転ナデ	10Y6/1灰	7.5Y7/1灰白	0.5mm以下の白色粒少量	良	
185	SD1002	須恵器	杯蓋	(15.6)	－	〔3.3〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	0.5mm以下の白色粒少量	良	
186	SD1002	須恵器	杯蓋	16.8	－	〔3.3〕	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	－	良好	
187	SD1002	須恵器	杯蓋	(18.0)	－	〔2.2〕	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1灰白	N6/灰	－	良	
188	SD1002	須恵器	杯身	12.8	－	〔3.0〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	2mmの小石、0.5mm以下の白色粒	良	ヘラ記号
189	SD1002	須恵器	杯身	－	－	〔2.0〕	回転ナデ	回転ナデ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	0.5mm以下の黒色粒・茶色粒少量	良	
190	SD1002	須恵器	瓶	－	－	〔6.6〕	回転ナデ、ナデ、波状文、沈線	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
191	SD1002	須恵器	高杯	－	－	〔5.0〕	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N6/灰	1mm以下の長石・石英	良	接合痕、スカシ（推定3箇所）
192	SD1002	須恵器	高杯	－	－	〔3.3〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	0.5mm以下の白色粒少量	良好	孔
193	SD1002	須恵器	高杯	－	(22.2)	〔3.7〕	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	－	良	内面に自然釉が部分的に残存
194	SD1002	須恵器	高杯	－	(8.2)	〔1.6〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	0.5mm以下の白色粒	良	
195	SD1002	須恵器	高杯	－	－	〔3.9〕	回転ナデ	ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/1灰白	0.5mm以下の白色粒少量	良	
196	SD1002	須恵器	壺	－	－	〔3.2〕	回転ナデ、波状文、沈線１条	回転ナデ	N4/灰	N5/灰	0.5mm以下の白色粒	良	内面に自然釉
197	SD1002	須恵器	壺	－	－	〔2.9〕	回転ナデ、波状文	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	0.5mm以下の白色粒少量	良	
198	SD1002	須恵器	壺	－	－	〔2.6〕	回転ナデ、波状文	回転ナデ	N4/灰	N6/灰	0.5mm以下の白色粒少量	良好	

土器観察表 (5)

報文番号	遺構名層位名	種類	器種	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
199	SD1002	須恵器	壺	－	－	〔4.1〕	平行タタキのちカキ目	ナデ	N3/暗灰	N5/灰	0.5mm以下の白色粒	良	
200	SD1002	土師器	杯	(10.0)	－	〔2.7〕	摩滅	摩滅（ナデが一部残存）	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR6/4にぶい橙	3mmの小石粒、0.5mm以下の白色粒	良	
201	SD1002	土師器	杯	10.2	－	〔2.9〕	摩滅	摩滅	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	0.5mm以下の白色粒・赤色粒	良	
202	SD1002	土師器	杯	(10.6)	－	〔4.9〕	摩滅	摩滅	5YR6/6橙	10YR7/3にぶい黄橙	2mmの石英、0.5mm以下の白色粒・赤色粒	良	
203	SD1002	土師器	杯	－	(6.1)	〔1.3〕	ナデ	ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	2.5Y8/2灰白	1mm以下の石英・白色粒・黒色粒	良	
204	SD1002	土師器	小型丸底壺	(7.8)	－	〔2.2〕	摩滅	摩滅	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	1～3mmの石英、0.5mm以下の白色粒・赤色粒	良	
205	SD1002	土師器	小型丸底壺	－	－	〔5.7〕	ナデ	ナデ、ヘラナデ	7.5YR7/4にぶい橙	10YR3/1黒褐	2mmの石英、0.5mm以下の白色粒	良	
206	SD1002	土師器	小型丸底壺	－	－	〔4.0〕	ナデ、指オサエ	ナデ、指オサエ後にナデ	7.5YR7/6橙	10YR7/6明黄褐	1mm以下の石英・長石、0.5mm以下の金雲母	良	接合痕
207	SD1002	土師器	小型丸底壺	－	(4.3)	〔2.2〕	ナデ	指オサエ、指ナデ	5Y2/1黒	10YR7/3にぶい黄橙	2mm以下の石英・黒色粒・赤色粒	良	
208	SD1002	土師器	壺	－	－	〔3.8〕	ナデ、ヘラナデ	指ナデ、摩滅	5YR5/8明赤褐	5YR6/8橙	3mm以下の長石・石英・赤色粒	良	
209	SD1002	土師器	甕	(14.7)	－	4.9	ハケ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	5mm以下の石英・黒色粒・赤色粒	良	
210	SD1002	土師器	甕	－	－	〔3.1〕	ナデ、指オサエ	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	10YR5/1褐灰	1～3mmの小石粒少量、0.5mm以下の白色粒	良	
211	SD1002	土師器	甕	(11.0)	－	〔5.6〕	ナデ	ナデ	7.5YR7/3にぶい橙	10YR7/2にぶい黄橙	0.5mm以下の白色粒・赤色粒・黒色粒	良	輪積痕
212	SD1002	土師器	甕	(14.0)	－	〔7.0〕	ナデ、指オサエ	ヘラナデ後にナデ、ヘラ削り	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	0.5mm以下の白色粒・茶色粒	良	ヘラの押圧痕
213	SD1002	土師器	甕	(14.6)	－	〔3.5〕	ナデ、ハケ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	2.5Y7/2灰黄	2mmの小石粒、0.5mm以下の白色粒	良	
214	SD1002	土師器	高杯	(16.0)	－	〔5.6〕	指頭圧痕、摩滅	摩滅	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	3mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒	良	接合痕
215	SD1002	土師器	高杯	－	－	〔8.4〕	ナデ	絞り目、ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	2mm以下の石英・長石	良	接合痕2箇所、孔3個残存
216	SD1002	土師器	高杯	－	－	〔8.5〕	摩滅	摩滅、ヘラ削り	5YR7/6橙	7.5YR8/4浅黄橙	2mm以下の長石・石英・赤色粒	良	孔1個残存
217	SD1002	土師器	高杯	－	－	〔6.2〕	摩滅	摩滅	5YR8/3淡橙	5YR7/6橙	1mm以下の石英・白色粒・黒色粒	良	孔2個残存
218	SD1002	土師器	高杯	－	(9.2)	〔5.6〕	摩滅	摩滅（ヘラ削りが一部残存）、絞り目	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	3mm以下の石英・長石多量	良	
219	SD1002	土師器	高杯	－	(9.9)	〔2.1〕	摩滅	摩滅	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	3mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒多量	良	
220	SD1002	土師器	壺	－	－	〔3.8〕	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	1mm以下の石英・白色粒	良	
221	SD1002	弥生土器	壺	－	－	〔3.2〕	ヘラ描き沈線4条、ナデ	摩滅	5YR6/6橙	5YR6/6橙	3mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒	良	
222	SD1002	弥生土器	壺	－	－	〔4.4〕	ナデ、ヘラ描き沈線	ナデ	7.5YR6/6橙	10YR7/2にぶい黄橙	2～5mmの石英、1mm以下の白色粒	良	
223	SD1002	弥生土器	壺	－	－	〔3.5〕	ナデ、ヘラ描き沈線	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR5/1褐灰	1mmの小石粒、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
224	SD1002	弥生土器	甕	－	－	〔2.7〕	ナデ、削り出し突帯	ナデ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	5mm以下の長石・石英・赤色粒	良	
225	SD1002	弥生土器	甕	－	－	〔3.8〕	ナデ、ヘラ描き沈線	摩滅	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	1～2mmの石英、0.5mm以下の白色粒	良	
226	SD1002	弥生土器	甕	－	－	〔2.4〕	ナデ、ヘラ描き沈線2条	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	5YR6/6橙	1～3mmの小石粒、1mm以下の白色粒・黒色粒	良	
227	SD1002	弥生土器	（底部）	－	7.8	〔5.3〕	ナデ	ナデ	2.5Y7/2灰黄	7.5YR6/4にぶい橙	3mm以下の石英・白色粒多量	良	輪積痕
228	SD1002	弥生土器	（底部）	－	(9.0)	〔4.9〕	摩滅	摩滅	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/2灰白	3mm以下の石英・白色粒・黒色粒多量	良	黒斑
229	SD1002	弥生土器	（底部）	－	(11.6)	〔3.2〕	摩滅	摩滅	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙	1～5mmの小石粒、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
230	SD1002	弥生土器	壺	－	(11.2)	〔3.8〕	ナデ	ナデ	10R6/8赤橙	10YR7/2にぶい黄橙	1mm以下の石英・長石	良	
231	SD1002	弥生土器	（底部）	－	(14.6)	〔4.0〕	摩滅	摩滅	10YR8/1灰白	10YR8/2灰白	2～4mmの石英、1mm以下の白色粒・茶色粒多量	良	
252	SD1006	須恵器	壺	(21.0)	－	〔5.6〕	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	0.5mm以下の白色粒	良	
253	SD1006	須恵器	杯	－	(19.8)	〔2.1〕	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	1mm以下の白色粒	良	
254	SD1006	土師質土器	鍋	－	－	〔4.4〕	摩滅	摩滅	5YR4/6赤褐	10YR5/4にぶい黄褐	6.5mm以下の小石粒、1mm以下の白色粒多量	良	

土器観察表 (6)

報文番号	遺構名層位名	種類	器種	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
255	SD1006	須恵器	(底部)	—	(20.8)	〔4.3〕	摩滅	摩滅	2.5Y7/4浅黄	2.5Y6/3にぶい黄	1mm以下の白色粒・黒色粒	良	
256	SP1065	須恵器	杯	—	(10.4)	〔1.7〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N6/灰	0.5mm以下の白色粒	良	体部から底部にかけて火襷
257	SP1006	土師器	高杯	—	—	〔7.2〕	摩滅	摩滅（ヘラ切りの痕跡）	7.5YR7/4にぶい橙	2.5YR6/8橙	4mm以下の長石・石英・赤色粒多量	良	接合痕
258	SP1069	土師器	甑	—	—	—	指ナデ、指オサエ	—	7.5YR6/6橙	5Y7/8黄	3mm以下の石英・長石	良好	
259	SP1068	土師質土器	鍋	—	—	〔4.6〕	ヨコナデ、摩滅	ヨコナデ、指オサエ	10YR5/6黄褐	10YR7/4にぶい黄橙	1～5mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒多量	良	
260	SP1062	弥生土器	(底部)	—	7.6	〔2.9〕	摩滅	摩滅	5YR5/8明赤褐	10YR8/2灰白	4mm以下の石英・白色粒・赤色粒多量	良	
262	近世の鋤跡	須恵器	甕	—	—	〔4.0〕	平行タタキ	ハケのちナデ	N6/灰	N6/灰	—	良好	
263	近世の鋤跡	須恵器	甕	—	—	〔2.4〕	格子状タタキ	ナデ	N4/灰	N5/灰	1mm以下の白色粒	良	
264	近世の鋤跡	土師器	甕	—	—	〔1.8〕	ナデ	ナデ	5Y8/1灰白	10YR7/4にぶい黄橙	0.5mm以下の白色粒・黒色粒・金雲母	良	
265	近世の鋤跡	土師器	甕	—	—	〔2.2〕	ナデ	ナデ	7.5YR4/1褐灰	10YR4/1褐灰	3mm以下の石英・白色粒	良	
266	近世の鋤跡	土師器	高杯	—	—	〔1.8〕	ナデ	摩滅	5YR7/6橙	5YR7/6橙	0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
267	近世の鋤跡	土師器	甕	(18.0)	—	〔2.2〕	摩滅	摩滅	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白	2～5mmの石英、0.5mm以下の白色粒・赤色粒多量	良	
268	近世の鋤跡	土師質土器	鍋	—	—	〔5.4〕	摩滅	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	2.5Y5/1黄灰	3mm以下の石英・雲母・黒色粒	良	
269	近世の鋤跡	弥生土器	甕	—	—	〔3.5〕	摩滅	摩滅	7.5YR4/1褐灰	5Y3/1オリーブ黒	3mm以下の石英・小石、0.5mm以下の白色粒・金雲母	良	
270	近世の鋤跡	弥生土器	壺	—	—	〔4.0〕	ナデ、ヘラ描き沈線3条	ナデ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR5/2灰黄褐	2mmの石英・小石、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
271	近世の鋤跡	弥生土器	壺	—	—	〔2.9〕	ヘラ描き沈線3条、刺突文		10YR7/4にぶい黄橙	10YR8/4浅黄橙	0.5mm以下の白色粒少量	良	
272	近世の鋤跡	弥生土器	壺	—	—	〔4.0〕	摩滅	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	2.5Y5/3黄褐	2mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
273	近世の鋤跡	弥生土器	(底部)	—	(8.6)	〔1.6〕	摩滅	摩滅	10YR7/2にぶい黄橙	2.5Y5/2暗灰黄	4mm以下の石英・小石粒、0.5mm以下の白色粒・赤色粒	良	
274	第1遺構面	須恵器	蓋	—	—	〔2.7〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	1～3mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
275	第1遺構面	須恵器	蓋	—	—	〔1.5〕	ナデ	ナデ	N7/灰白	N7/灰白	0.5mm以下の白色粒少量	良	
276	第1遺構面	須恵器	蓋	(13.4)	—	〔3.2〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N5/灰	—	良	
277	第1遺構面	須恵器	壺	(14.2)	—	〔2.2〕	回転ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	—	良好	
278	第1遺構面	須恵器	杯	—	(10.4)	〔1.6〕	回転ナデ	ナデ	N6/灰	N6/灰	—	良	底部内面が滑らかであり、硯の可能性がある
279	第1遺構面	須恵器	杯	—	(9.2)	〔2.9〕	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	N7/灰白	N7/灰白	1mm以下の長石・石英	良	火襷
280	第1遺構面	須恵器	高杯	—	(13.0)	〔3.5〕	回転ナデ	回転ナデ	N6/灰	N7/灰白	2mm以下の白色粒少量	良	
281	第1遺構面	土師器	壺	(8.8)	—	〔3.2〕	ナデ	ナデ	10YR6/8明黄褐	10YR6/6明黄褐	1mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒	良	
282	第1遺構面	土師器	壺	(12.8)	—	〔4.4〕	摩滅	摩滅	7.5YR6/6橙	7.5YR5/6明褐	1～3mmの石英、0.5mm以下の白色粒・赤色粒	良	
283	第1遺構面	土師器	甕	(13.4)	—	〔3.3〕	ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR5/3にぶい黄褐	4mmの石英少量、0.5mmの白色粒・金雲母	良	
284	第1遺構面	土師器	高杯	—	—	〔3.6〕	ハケ	ハケ後にナデ	7.5YR7/6橙	5YR7/8橙	2mm以下の石英・白色粒・赤色粒多量	良	
285	第1遺構面	土師器	高杯	—	—	〔2.2〕	ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/6明赤褐	3mmの石英、1mm以下の石英・白色粒・黒色粒	良	接合痕
286	第1遺構面	土師器	高杯	—	—	〔6.3〕	摩滅	絞り目、摩滅	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒	良	
287	第1遺構面	土師器	製塩土器	—	(3.2)	〔2.3〕	ナデ	ナデ	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/2灰白	2mmの石英、0.5mm以下の白色粒	良	
288	第1遺構面	弥生土器	甕	—	—	〔3.4〕	ヘラ描き沈線、磨滅	摩滅	5Y8/1灰白	10YR5/8黄褐	1mm以下の長石・石英	良	
289	第1遺構面	弥生土器	甕	—	—	〔3.4〕	ヘラ描き沈線、摩滅	摩滅	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白	3mm以下の石英・長石・赤色粒多量	良	
290	第1遺構面	弥生土器	(底部)	—	7.8	〔2.7〕	摩滅	摩滅	5YR5/6明赤褐	10YR7/3にぶい黄橙	5mm以下の石英・白色粒・赤色粒多量	良	

表５　石器観察表

報文番号	遺構名 層位名	機種	法量(cm)			重さ(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
15	SK1001	石鏃未製品	2.6	2.2	0.5	2.4	サヌカイト	
16	SK1001	二次加工のある剥片	〔1.9〕	〔4.1〕	0.5	3.2	サヌカイト	
17	SK1001	磨製石斧	〔6.0〕	〔4.75〕	4.85	244.8	緑色岩	
52	SK1002	石鏃	1.7	1.1	0.3	0.5	サヌカイト	平基式
53	SK1002（上層）	石鏃	2.6	1.95	0.4	1.8	サヌカイト	平基式
54	SK1002(下層)	微細剥離痕のある剥片	〔4.1〕	〔5.5〕	1.2	20.1	サヌカイト	
55	SK1002(下層)	スクレイパー	〔4.5〕	〔5.1〕	0.9	24.1	サヌカイト	
67	SK1004・1005 （上層）	石鏃	2.2	2.4	0.15	1.5	サヌカイト	異形
98	SD1001 上・中層	石鏃	1.8	1.7	0.2	0.7	サヌカイト	平基式
99	SD1001 上・中層	石鏃	1.8	1.3	0.25	0.5	サヌカイト	平基式
100	SD1001 上・中層	石鏃	2.3	1.8	0.3	1.1	サヌカイト	平基式
101	SD1001 上・中層	石鏃	2.0	1.35	0.3	1.0	サヌカイト	平基式
102	SD1001 上・中層	石鏃	〔2.3〕	〔2.0〕	0.3	1.7	サヌカイト	平基式
103	SD1001 上・中層	石鏃	2.8	1.8	0.5	2.4	サヌカイト	平基式
104	SD1001 上・中層	石鏃	〔2.2〕	〔2.3〕	0.5	2.0	サヌカイト	平基式
105	SD1001 上・中層	石鏃	2.6	1.7	0.4	1.6	サヌカイト	平基式？
106	SD1001 上・中層	石鏃	2.75	1.1	0.35	1.6	サヌカイト	凸基Ⅰ式
107	SD1001 上・中層	石鏃	1.8	1.2	0.3	0.5	サヌカイト	凹基式
108	SD1001 上・中層	石鏃	2.1	1.55	0.3	0.9	サヌカイト	凹基式
109	SD1001 上・中層	石鏃	2.0	1.8	0.4	0.9	サヌカイト	凹基式
110	SD1001 上・中層	石鏃	2.0	1.75	0.35	0.8	サヌカイト	凹基式
111	SD1001 上・中層	石鏃	〔1.9〕	〔2.2〕	0.5	1.5	サヌカイト	凹基式
112	SD1001 上・中層	石鏃未製品	〔2.1〕	〔2.0〕	0.5	2.9	サヌカイト	
113	SD1001 上・中層	石錐	3.5	1.1	0.4	2.4	サヌカイト	Ⅲ類
114	SD1001 上・中層	打製石斧	〔3.5〕	〔3.4〕	0.7	11.2	サヌカイト	使用痕あり
115	SD1001 上・中層	スクレイパー	〔2.8〕	〔3.7〕	0.5	6.2	サヌカイト	
116	SD1001 上・中層	スクレイパー	〔4.2〕	〔2.9〕	1.1	14.6	サヌカイト	
117	SD1001 上・中層	二次加工のある剥片	〔2.2〕	〔3.5〕	0.7	4.1	サヌカイト	
144	SD1001 下層	石鏃	2.35	1.25	0.45	1.6	サヌカイト	平基式
145	SD1001 下層	石鏃	2.4	2.3	0.7	2.6	サヌカイト	異形
146	SD1001 下層	石鏃	2.05	1.55	0.3	0.6	サヌカイト	凹基式。刃部鋸歯
147	SD1001 下層	石鏃	1.8	1.0	0.3	0.4	サヌカイト	凹基式
148	SD1001 下層	石鏃	〔1.8〕	〔1.6〕	0.3	1.0	サヌカイト	平基式
149	SD1001 下層	石鏃	2.1	1.3	0.4	0.6	サヌカイト	凹基式
150	SD1001 下層	石鏃	2.5	1.4	0.3	0.7	サヌカイト	凹基式
151	SD1001 下層	石鏃	4.0	1.8	0.5	3.0	サヌカイト	凹基式
152	SD1001 下層	石鏃	2.5	1.7	0.45	1.5	サヌカイト	有基式
153	SD1001 下層	石鏃未製品？	2.7	2.1	0.3	1.6	サヌカイト	
154	SD1001 下層	石鏃未製品	〔3.9〕	〔3.1〕	0.7	6.8	サヌカイト	
155	SD1001 下層	石錐	3.4	2.45	0.8	5.3	サヌカイト	Ⅱ類
156	SD1001 下層	石錐	3.4	1.4	0.6	2.0	サヌカイト	Ⅲ類
157	SD1001 下層	石錐	〔3.4〕	〔1.2〕	0.5	1.9	サヌカイト	Ⅲ類
158	SD1001 下層	打製石斧	〔6.6〕	〔4.2〕	1.5	39.9	サヌカイト	使用痕あり
159	SD1001 下層	打製石包丁	〔4.9〕	〔4.0〕	0.6	18.9	サヌカイト	
160	SD1001 下層	スクレイパー or 二次加工のある剥片	3.15	4.0	0.7	6.9	サヌカイト	
161	SD1001 下層	スクレイパー	〔3.1〕	〔4.4〕	1.0	9.5	サヌカイト	
162	SD1001 下層	スクレイパー	〔2.7〕	〔2.5〕	0.8	4.8	サヌカイト	
163	SD1001 下層	スクレイパー	〔2.5〕	〔3.8〕	1.2	9.1	サヌカイト	
164	SD1001 下層	二次加工のある剥片	2.15	2.45	0.45	2.7	サヌカイト	
178	SD1001	石鏃	1.9	1.85	0.3	1.0	サヌカイト	凹基式
179	SD1001	石鏃	2.1	1.7	0.35	1.1	サヌカイト	平基式
180	SD1001	石鏃	2.0	1.8	0.6	1.2	サヌカイト	平基式
181	SD1001	石鏃	2.2	2.4	0.4	2.2	サヌカイト	
182	SD1001	異形石器	3.4	2.9	0.25	7.9	サヌカイト	
232	SD1002	石鏃	2.05	1.2	0.3	0.8	サヌカイト	凹基式
233	SD1002	石鏃	2.2	1.6	0.3	0.7	サヌカイト	凹基式
234	SD1002	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.7	サヌカイト	平基式
235	SD1002	石鏃	1.4	1.9	0.5	1.3	サヌカイト	平基式
236	SD1002	石鏃	2.9	2.3	0.7	2.9	サヌカイト	平基式
237	SD1002	石鏃	3.6	1.5	0.5	2.6	サヌカイト	平基式。刃部鋸歯
238	SD1002	石鏃	〔4.4〕	1.3	0.45	2.9	サヌカイト	凸基Ⅰ式
239	SD1002	石鏃未成品	2.8	0.8	0.4	0.6	サヌカイト	
240	SD1002	石鏃未成品	1.8	2.0	0.5	1.6	サヌカイト	風化著しい
241	SD1002	石鏃未成品	2.9	1.7	0.4	1.7	サヌカイト	
242	SD1002	石鏃未成品	〔2.9〕	〔2.4〕	0.5	4.4	サヌカイト	
243	SD1002	石鏃未製品 or 二次加工のある剥片	3.1	2.5	0.4	3.7	サヌカイト	
244	SD1002	石錐	2.7	1.5	0.7	3.6	サヌカイト	Ⅲ類
245	SD1002	スクレイパー	〔2.7〕	〔3.6〕	0.5	4.1	サヌカイト	
246	SD1002	微細剥離痕のある剥片	〔3.4〕	〔3.0〕	0.55	5.0	サヌカイト	
247	SD1002	微細剥離痕のある剥片	4.45	1.9	0.75	6.0	サヌカイト	
248	SD1002	石製模造品	〔2.9〕	1.5	0.4	2.1	サヌカイト	石剣？。擦痕あり
249	SD1002	石棒	〔7.0〕	〔1.8〕	1.0	14.1	結晶片岩	
250	SD1002	不明	〔10.3〕	〔7.4〕	〔1.35〕	171.4	珪化木	
251	SD1002	砥石	〔6.4〕	〔4.15〕	〔1.85〕	58.5	流紋岩	使用痕あり
261	SP2024	石鏃	2.0	1.6	0.4	0.9	サヌカイト	凹基式
291	第1遺構面	石鏃	2.4	0.9	0.25	0.3	サヌカイト	凹基式
292	第1遺構面	石鏃	1.9	1.3	0.3	0.8	サヌカイト	凹基式？
293	第1遺構面	スクレイパー	〔4.7〕	〔4.9〕	0.9	23.1	サヌカイト	
294	第1遺構面	敲き石	9.6	7.6	6.2	682.7	砂岩	

写真図版

目次

写真図版 1
1 建物本体南半 第 1 遺構面全景（東から）
2 建物本体北半 第 1 遺構面全景（南西から）
写真図版 2
1 SK1001 遺物出土状況（西から）
2 SK1001 断面（西から）
写真図版 3
1 SK1002 遺物出土状況（西から）
2 SK1002 断面（西から）
写真図版 4
1 SK1003 断面（南西から）
2 SK1004 断面（南西から）
写真図版 5
1 SX1004 完掘状況（南西から）
2 SX1005 断面（南西から）
写真図版 6
1 SD1001・1002 完掘状況（南から）
2 SD1001・1002 b～b ’断面（南から）
3 SD1001・1002 c～c ’断面（南から）
写真図版 7
1 SD1006 完掘状況（南西から）
2 SD1006 断面（南西から）
写真図版 8
1 建物本体南半 第 2 遺構面全景（南東から）
2 SD2001 a～a’断面（南東から）
写真図版 9
1 SK1001 出土遺物集合写真
2 SK1002 出土遺物集合写真
写真図版 10
1 SK1001 出土土器
2 SK1001 出土土器
3 SK1001 出土土器
4 SK1001 出土土器
5 SK1002 出土土器
6 SK1002 出土土器
写真図版 11
1 SK1002 出土土器
2 SK1002 出土土器
3 SK1002 出土土器
4 SK1001 出土土器
5 SK1005・SP1006 出土土器
写真図版 12
1 SD1001 出土土器
2 SD1001 出土土器
3 SD1002 出土土器
4 SD1002 出土土器
5 SD1002・第 1 遺構面出土石器
写真図版 13
1 SD1001 出土石器
2 SD1001 出土石器
写真図版 14
1 SD1002 出土石器
2 SK1001・SK1002・SK1005・第 1 遺構面・SP2024 出土石器
3 SD1002 出土石器
4 SD1001 出土動物骨

1　建物本体南半 第１遺構面全景（東から）

2　建物本体北半 第１遺構面全景（南西から）

1　SK1001 遺物出土状況（西から）

2　SK1001 断面（西から）

1　SK1002 遺物出土状況（西から）

2　SK1002 断面（西から）

1　SK1003 断面（南西から）

2　SK1004 断面（南西から）

1　SX1004 完掘状況（南西から）

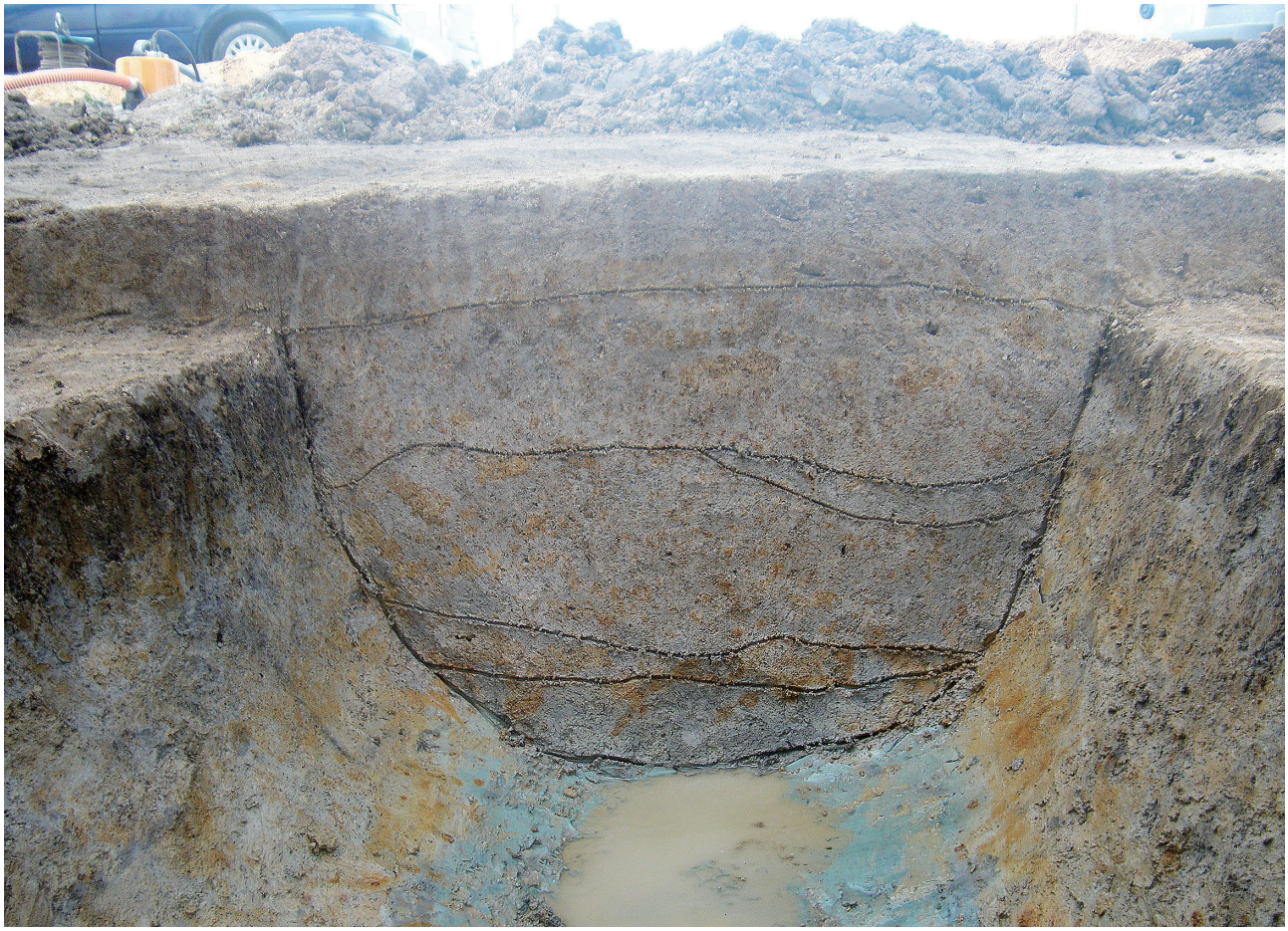
2　SX1005 断面（南西から）

1　SD1001・1002 完掘状況（南から）

2　SD1001・1002 ｂ～ｂ　断面（南から）

3　SD1001・1002 ｃ～ｃ’断面（南から）

1　SD1006 完掘状況（南西から）



2　SD1006 断面（南西から）

1　建物本体南半 第２遺構面全景（南東から）

2　SD2001a ～ a’ 断面（南東から）

1　SK1001 出土遺物集合写真

2　SK1002 出土遺物集合写真

1　SK1001 出土土器

4　SK1001 出土土器

2　SK1001 出土土器

5　SK1002 出土土器

3　SK1001 出土土器

6　SK1002 出土土器

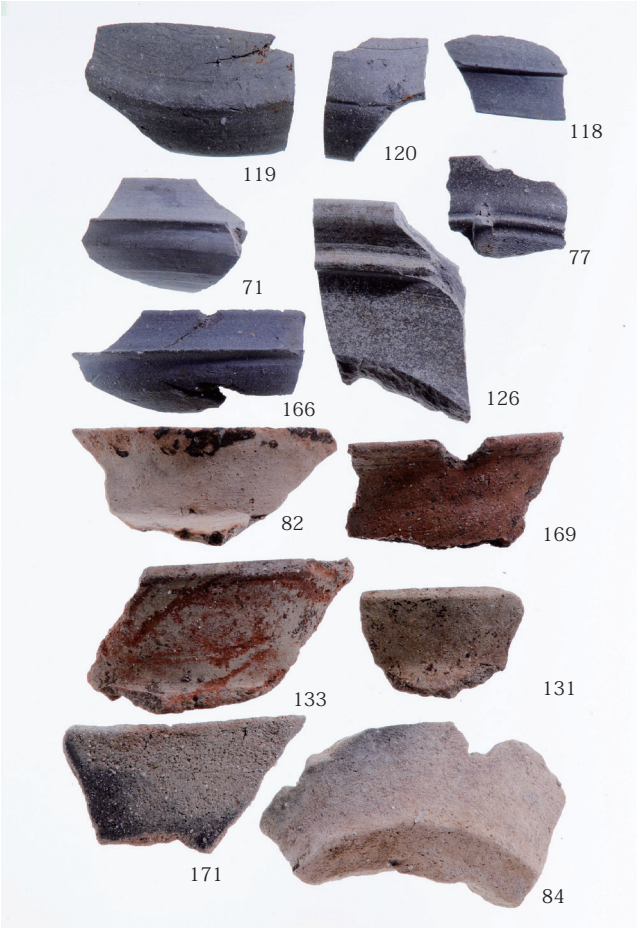
1　SK1002 出土土器

2　SK1002 出土土器

3　SK1002 出土土器

4　SK1001 出土土器

5　SK1005・SP1006 出土土器



1　SD1001 出土土器

3　SD1002 出土土器

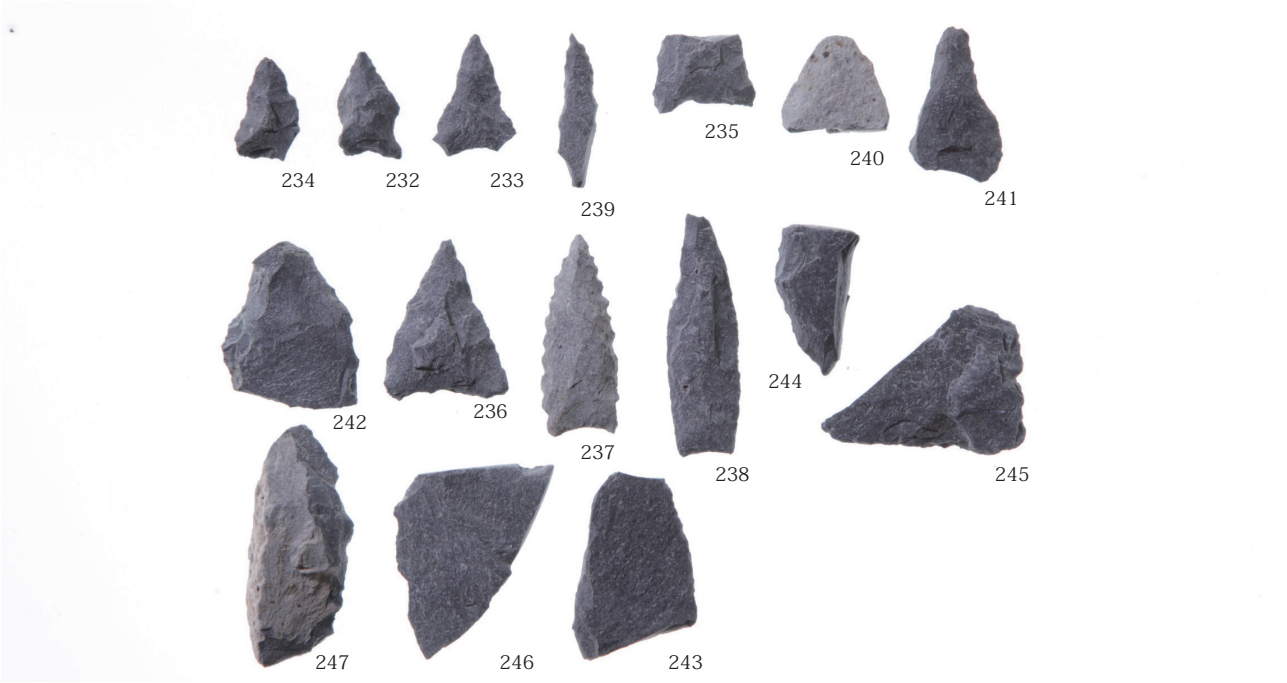
2　SD1001 出土土器

4　SD1002 出土土器

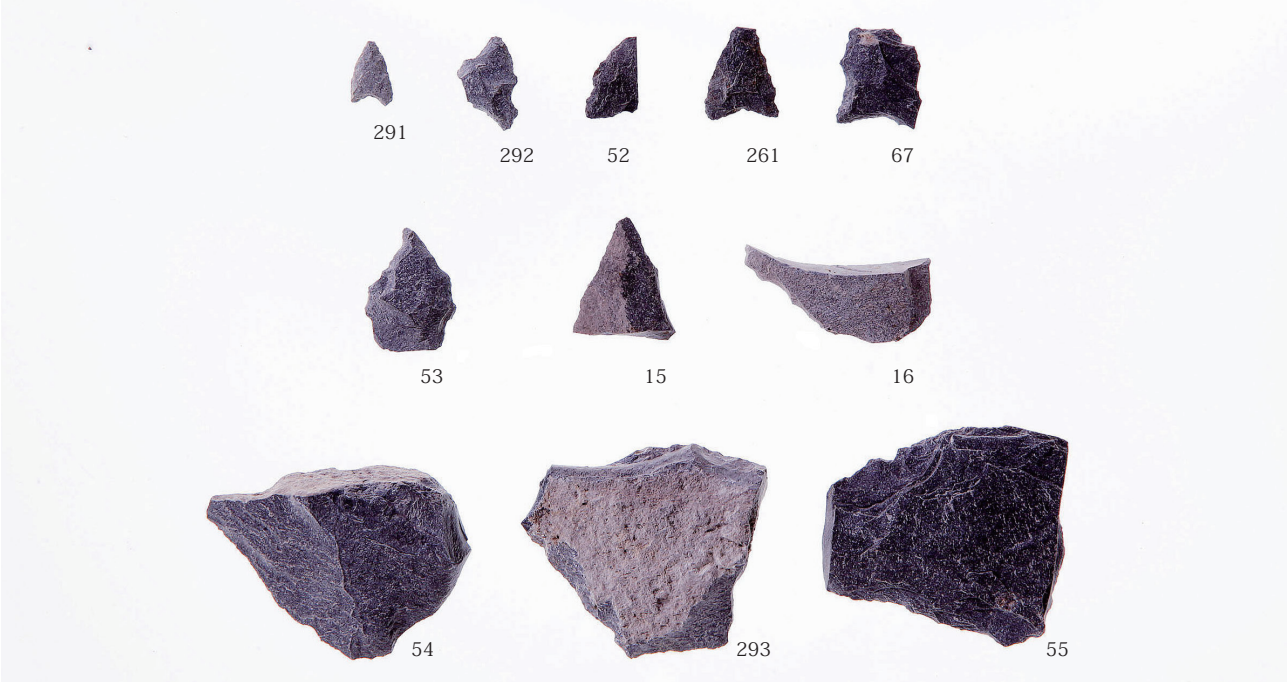
5　SD1002・第 1 遺構面出土石器

1　SD1001 出土石器

2　SD1001 出土石器



1　SD1002 出土石器



2　SK1001・SK1002・SK1005・第 1 遺構面・SP2024 出土石器

3　SD1002 出土石器

4　SD1001 出土動物骨

報　告　書　抄　録

ふりがな	かわしまほんまちいせき
書名	川島本町遺跡
副書名	川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第184集
編著者名	波多野　篤（編）、中西　克也
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2017年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
かわしまほんまちいせき 川島本町遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 かわしまほんまち 川島本町	37201		34° 16′ 23″	134° 04′ 59″	2016.7.4 ～ 2016.8.24	886㎡	葬祭会館 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川島本町遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 中世	土坑 井戸 性格不明遺構 ピット 溝	弥生土器 土師器 須恵器 石器	

要約	今回の調査では、主に弥生時代前期、古墳時代前期・後期、古代を中心とした集落に関わる遺構・遺物を検出した。居住遺構は検出していないが、古墳時代前期後葉の土器が大量に出土した土坑など、かつての集落での生活の一端を窺い知ることができる重要な遺構等を確認した。

川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川島本町遺跡

平成 29 年 9 月 30 日

編　集　　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目 8 番 15 号
発　行　　株式会社ベルモニー
　　高松市教育委員会
印　刷　　有限会社中央ファイリング